

刊行にあたって

急速かつ激しい変化が進行する現代の社会を、一人一人が主体的・創造的に生き抜いていくために、子どもに基礎的・基本的な知識や技能を確実に定着させることはもとより、その知識・技能を生かして社会で生きてはたらく力、生涯にわたって学び続ける力をはぐくむ教育活動を展開していくことが、学校教育に求められています。

一方、近年のOECD学習到達度調査（PISA）等の調査結果などから、我が国の子どもたちは勉強が好きだと思える子どもが少ないなど、学習意欲が必ずしも高くないことや、学校の授業以外の勉強時間が少ないなど学習習慣が十分身に付いていないことが課題として指摘されています。更に、平成19年3月に出された財団法人日本青少年研究所の調査では、学習に対する意欲が、日本の小学生は中国や韓国の小学生に比べてかなり低いという報告がされました。

当教育研究所におきましては、このような状況を踏まえつつ、「学ぶことへの関心・意欲を高める指導」に関するプロジェクトを立ち上げ、調査研究を進めてまいりました。本書では小学校の各教科における学ぶことへの関心・意欲を高める指導の在り方及びその指導と評価に対する工夫改善について、それぞれの具体案をまとめたものです。

これらの研究の成果をご一読いただくとともに、研究をより一層発展させるためにも、ご教示・ご意見を賜れば幸いに存じます。

なお、末筆となりましたが、調査研究のためにご指導、ご協力を賜りました皆様方に、心からお礼申し上げます。

平成19年3月

奈良県立教育研究所

所長 井上 喜一

プロジェクト研究（2）「学ぶことへの関心・意欲を高める指導」

第1節 学ぶことへの関心・意欲

1 学ぶことへの関心・意欲と確かな学力

これからの学校教育においては、激しい変化と多様な価値観が存在する社会に生きる子どもたちが、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決できる能力や態度を身に付けることを重視する必要がある。このような教育を実現するためには、学ぶことへの子どもたちの内発的な関心・意欲を高めることが必要である。

もちろん、知識・技能などを身に付けさせる場合においても、児童生徒の関心・意欲・態度が必要である。

知識・技能や思考力・判断力を身に付けるに当たっては、関心・意欲という「学ぶ意欲」が支えとなり、学習を効果的に成立させる。また逆に、深い理解に基づいた知識、十分に原理を理解した上で習得した技能、じっくりと考え抜く思考活動などが、子どもたちに学習の面白さや自信を喚起し、「学ぶことへの関心・意欲」が高まると考えられる。

平成15年の中央教育審議会答申「初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について」において示されているように、「確かな学力」は知識や技能に加え、学ぶ意欲や、自分で課題を見付け、自ら学び主体的に判断し、行動し、問題を解決する資質や能力までを含むものである。「確かな学力」とは、学ぶことへの関心・意欲を重視したこれからの子どもたちに求められる学力にほかならないのである。

2 学ぶ意欲の実態

「平成15年度小・中学校教育課程実施状況調査」によると、全国の子どもたちについて、学習意欲の面で一定の向上がみられる。具体的には、「勉強が大切だ」「勉強が好きだ」あるいは「授業がわかる」と答えた子どもの割合が増加傾向にあり、平日における学校の授業以外の学習時間について、「全く、ほとんど勉強しない」と回答した子どもの割合が平成13年度の調査と比較すると減少している。

平成15年度小・中学校教育課程実施状況調査より

○ 勉強が好きだ。

区分		そう思う		どちらかと言えば そう思う	
		平成15年度	平成13年度	平成15年度	平成13年度
小学校	第5学年	11.3%	9.4%	34.0%	30.4%
	第6学年	8.5%	6.8%	31.3%	26.9%
中学校	第1学年	3.7%	3.1%	18.3%	15.7%
	第2学年	3.1%	2.8%	14.8%	13.2%
	第3学年	4.1%	3.6%	15.7%	14.2%

- 学校の授業がどの程度わかりますか。

区分		よくわかる		大体わかる	
		平成15年度	平成13年度	平成15年度	平成13年度
小学校	第5学年	18.2%	16.5%	45.4%	44.8%
	第6学年	18.0%	15.0%	48.0%	44.1%
中学校	第1学年	7.1%	6.2%	41.0%	39.7%
	第2学年	6.1%	5.2%	37.3%	35.9%
	第3学年	8.8%	7.5%	40.6%	38.8%

- 学校の授業以外に、一日にだいたいどれくらい勉強しますか。

		全く、または、ほとんどしない	
		平成15年度	平成13年度
小学校	第5学年	9.1%	10.6%
	第6学年	9.2%	10.8%
中学校	第1学年	13.1%	14.3%
	第2学年	15.7%	17.1%
	第3学年	7.9%	8.5%

これらの結果は、学校現場や教育委員会における、基礎的事項の徹底といった学力向上に向けた取組などの成果と考えられる。ただし、子どもたちの学習意欲、学習習慣・生活習慣が引き続きの課題であることに変わりはない。

また、小・中学校教育課程実施状況調査における質問紙の回答状況とペーパーテストの結果との関連を見ると、当該教科の勉強を好き、あるいは、勉強を大切と思うと回答した子どもについては、ペーパーテストの点数が高い傾向にある。

知識・技能や思考力・判断力を身に付けるに当たって、関心・意欲という「学ぶ意欲」との関連が大きいことを示したものであると考えられる。

第2節 学ぶことへの関心・意欲を高める学習指導

1 学ぶめあての明確化

学ぶことへの関心・意欲を高めるためには、子ども自身が主体として学ぶめあてをもてるようにすることが大切である。そのためには、子どもたち自身が、自分がどんな生き方をしたいかというイメージや、これからの自分の可能性をイメージできることが大切である。こうして、子どもが一

定の見通しをもって自らのめあてをつくり、その実現に向けた目標の設定を工夫することによって、学ぶ意欲を高めていくことができると考える。一方、各学校においては、子どもたちにどのような力をつけてもらいたのかを考えることが大切である。

なお、中央教育審議会の経過報告では、年間の読書冊数や各種検定への取組など具体的な目標設定の工夫も必要であると述べられている。

2 「わかる授業」の実現

学習内容について「わかる」ことは、子どもたちに自信をもたせ、「次もわかりたい」という意欲をもたせることにもつながる。この「わかる授業」を実現するための取組として、習熟の程度に応じた指導や少人数指導など、個に応じた指導や、教材・教具の工夫、自己評価等の評価の工夫、家庭や地域との連携などが考えられる。

本県においては、これまでからも、学習フロンティア事業や学力向上拠点形成事業などを中心に、「分かる授業」の実現に向けて取り組んできたところである。今回のプロジェクト研究においても、各教科や各単元に応じて、様々な取組を紹介している。

3 学ぶことの意義や意味の自覚

学ぶことの意義や有用性、社会において果たしている役割についての認識を高めることも重要である。学習内容が生活や社会につながっており、「役に立つ」ことを実感することが「学ぶ意欲」につながる。学ぶことの意義が見えやすく、知識が生きて働くという実感がわくような学習は、基礎・基本の大切さや必要性の理解に結び付くとともに、将来の自分や自分の可能性を具体的にイメージする上でも重要であると考えられる。また、活動や体験の中で子どもが興味・関心を広げ、自らのやる気と探求心を引き出すようにすることも大切である。

各教科の指導においては、調べ学習や実験・観察、ものづくりなど、体験活動を積極的に取り入れ、課題を発見したり解決したりするなど、追求して表現することのおもしろさを十分味わわせることができるようにしたい。

また、各教科以外でも、自然体験、職場体験、奉仕体験など、様々な体験活動を取り入れることで、学ぶことの意味を発見させ、学習意欲を向上させることができる。具体的には、中学校において職場体験を行う「キャリア・スタート・ウィーク」のなどを通じて社会や職業を体験させ、社会生活に対する実感をもたせることが、学習意欲の喚起にもつながることが中央教育審議会経過報告においても述べられている。

参考・引用文献

- | | | |
|---------------------|----------|-------|
| (1) 小学校学習指導要領解説－総則－ | 文部省 | 平成10年 |
| (2) 初等教育資料平成18年10月号 | 文部科学省 | 平成18年 |
| (3) 学ぶ意欲とスキルを育てる | 市川伸一 小学館 | 平成16年 |

第2章 学ぶことへの関心・意欲を高める指導の在り方

第1節 社会（学ぶことへの関心・意欲を高める指導）

1 基本的な考え方

(1) 教育課程実施状況調査の結果から

平成15年度教育課程実施状況調査の質問紙調査及びペーパーテスト、実施状況に関する研究指定校の報告等からみると、社会科好きの児童をどう育てるかということは、検討課題の一つとなる。例えば、同調査の質問紙調査によると、下の表のとおり「社会科の勉強は大切だ」「社会科の学習をすれば、ふだんの生活や社会に出て役に立つ」と感じている児童が比較的高いが、それに比べて「社会科の勉強が好きだ」と答えている割合が低いことがわかる。

	国語	社会	算数	理科
その教科の勉強が好きだ	58.5	54.7	61.8	74.2
	52.9	56.9	59.2	64.1
その教科の勉強は大切だ	87.8	84.6	90.1	75.2
	88.3	82.6	91.4	69.9
その教科の勉強は、生活や社会に出て立つ	75.6	74.9	79.1	57.6
	75.5	65.2	79.2	50.5

平成15年度小学校教育課程実施状況調査の結果から 単位(%)

(「とても思う」「どちらかと言えば思う」の合計)(上段 5年生 下段 6年生)

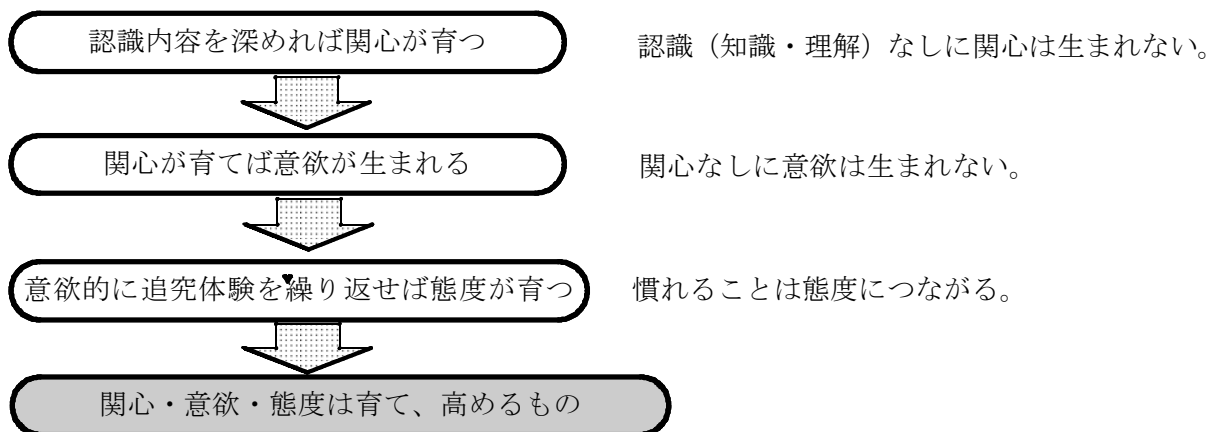
このように小学校において、社会科好きの児童を育て、児童の学ぶ意欲を高める指導方法や教材、評価などの研究は、大きな課題であるといえることができる。

(2) 社会科における学ぶ意欲・関心について

社会科では、児童の学習意欲を高め、主体的な問題の追究・解決を促すなど、「確かな学力」の育成に向けて、これまでから児童一人一人の興味・関心に応じた指導の工夫・改善が積極的に進められてきた。

小学校の社会科においては、問題解決的な学習を取り入れた追究活動を通して考えることによって、児童は新しい発見をしたり、分からなかったことが分かるようになっていたりすることができる。そこに、社会科のおもしろさがあると考えられる。そして、そのような学習の中で「社会科の学習が楽しい、分かった、考えが深まった」と成就感を味わわせ、更なる学ぶ意欲を喚起させることによって「自ら学び、自ら考える力」を育てることにつながる。

問題解決的な学習においては、次のように関心や意欲が高まっていくと考えられる。



(3) 学ぶ意欲を高める題材

児童にとって学ぶ意欲を高める題材は、次の三つの要素を含んだものであると考えられる。

① 児童にとって身近に感じられるもの

社会科では、従来から地域を大切にしてきた。物理的に近いものであるだけでなく、情意面からも身近に感じられるためである。更に、一度の見学や聞き取りに終わるものではなく、学習対象となる人・もの・ことに対して繰り返し取材等のできるという利点があるためである。しかし、地域に目を向けるあまりねらいが疎かになってはならない。その単元において学習指導要領のねらいを達成するために最もふさわしい題材の開発に努めたいものである。

② 人の営みを通して思いや願いなどがみえるもの

その人の立場に立って考えたり、その人の生き方にふれて共感的に理解したりすることにより、自分の生き方と比較し、考えることができる。心を揺さぶられ、学ぶ意欲がわいてくるのは、単にものに対してでなく、その背景にある人の思いや願い、工夫や努力といったものを目の当たりにしたときである。

③ 学習問題を児童が明確に意識できるもの

題材については、単元の目標や内容に迫る学習問題との関係を考えなければならない。そこで、児童が学習問題を意識できるものでなければならない。問題をどうしても解決したいという気持ちで主体的な学習に結び付いていくからである。

(4) 学ぶ意欲を高める学習活動の工夫

児童の学ぶ意欲を高め、主体的に学習に取り組めるように、次のような問題解決的な学習の過程を踏まえて学習を進めたい。

- ・ 社会的事象を見つめ、学習問題を設定し、学習の計画を立てる。
- ・ 学習計画に基づき、自分なりの方法で追究し、問題解決のための手がかりを探る。
- ・ 収集した情報を整理、選択し、お互いの学びを情報交換する中で社会的意味を考え、自分の見方・考え方を確立する。
- ・ 学習を通して得た見方・考え方を自らの生活に生かしたり、発信したりする。

この中でも、特に次の三つの活動について大切にすると考える。

① 学習問題作り

児童に学習意欲をもたせるためには、学習の見通しがもてていることが必要になる。見通しがもてるということは学習問題が明確であることと考えられる。そこで、重要となるのは学習問題の設定である。学習問題は、何も知らないところからは生まれない。社会的事象との出会いを大切に、児童が抱いた疑問を単元を貫く価値ある学習問題に高める手だてが必要である。

② 体験的な活動を取り入れた追究活動

見学や調査活動の中で児童は社会的事象に出会う。調査対象となる人・もの・ことに会う中で、児童は心揺さぶられる体験を積んでいく。百聞は一見に如かずの言葉のとおり、机上の調査活動だけでなく、直接出会うことによって、共感的に理解することができる。

③ 調べたことを基に考える活動

従来から、追究したことを表現する活動が重視されてきた。しかし、表現すること自体が目的

になってしまい、その成果を基に考えるということに結び付かない実態があったのも事実である。しかし、大切なのは調べるのではなく、調べたことを基に考えることである。「調べて考える社会科」は、これまでから問われてきた社会科の課題である。現行学習指導要領でも改訂の要点として「社会的事象に関心を持ち、公正に判断できるように、各学年の発達段階に応じて、観察、調査したり、各種の資料を活用したり、調べたことを表現したりするとともに、社会的事象の意味や働きなどを考える力を育てること」を挙げている。練り合い、立ち止まりの場面を設けることにより思考が深まり、社会的事象の意味を考えることができるものであり、学習して得た知識を総動員して考え、表現する学習を大切にしたい。

(5) 学ぶ意欲を高める評価の工夫

自分の学びの成果を実感し、その成果を次の学習意欲につなげていくために、評価活動が学習の中に効果的に位置付けられることが大切である。児童の側からは、自己の変容に気付くこと、指導者の側からは、評価規準を基に児童の学びを見取りながら次の授業展開につなげていくことが求められる。そこで、次の評価方法を取り入れるようにしたい。

児童の学びを育てる評価

- ・自らの学びや成長を振り返ることのできる評価
- ・学びへの自信と意欲につながる相互評価
- ・外部からの評価

指導者の評価

- ・児童の学びを確かめる評価
- ・指導計画や学習活動を改善するための評価

参考文献

- | | | | | |
|-----|------------|-------------------|--------|-----|
| (1) | 文部科学省 | 小学校学習指導要領解説 社会編 | 日本文教出版 | 平11 |
| (2) | 文部科学省教育課程課 | 初等教育資料 | 東洋館出版 | 平17 |
| (3) | 安野 功 | 社会科授業が対話型になっていますか | 明治図書 | 平17 |
| (4) | 北 俊夫 | 社会科学習問題づくりのアイデア | 明治図書 | 平16 |
| (5) | 北 俊夫 | 社会科の責任 | 東洋館出版 | 平13 |

2 事例

1 単元の構想 第3学年

- (1) 単元名 たんけん！ 広陵町のくつ下のよさ
- (2) 単元について

本単元では広陵町の地場産業である靴下工業を取り上げる。「靴下の町 広陵町」と言われるように、広陵町内には100を越す靴下工場があり、全国一の生産量を誇っている。靴下工業は、生産の様子を直接見たり、生産者の思いに直接ふれたりすることができる格好の題材である。現在、靴下工業のおかれている状況は非常に厳しいが、靴下の生産にかかわる人たちが様々な工夫や努力をしている。児童は、そうした人々の思いにふれることで、共感的に問題を追究し、広陵町の靴下のよさをとらえることができるものと考ええる。

本学級の児童は、広陵町に靴下工場が多いことは、1学期における校区の学習ですでに学んでいる。クラスの約半数の家庭が、何らかの形で靴下の生産に携わっている。児童は、靴下についての多少の知識はもっており、身近な人が作っている靴下のことをもっと知りたいという知的欲求は高いと言える。しかし、靴下がどのように作られているのか、作るときにどんな工夫や苦労があるのかまでは、十分理解していない。また、靴下は工業製品であるために、商品として店頭と並んでいる靴下が広陵町で作られたものかどうかは分かりにくい。

そこで、広陵町で生産された靴下を直売している場へ出かけて、広陵町の靴下のよさを取材するところから学習をスタートさせる。その際、靴下のよさは何かを話し合い、そのよさの秘密を工場見学や内職をしている人たちへの取材を通して明らかにさせていく。その際、ただ調べるだけでなく、友達との意見交流の中で自分の考えが深まるように、対話を大切にしながら授業を構成していく。そして、学習を通して得た知識を基に、広陵町の靴下をPRするのぼりを作成させる計画である。

2 単元の目標と評価規準

(1) 目標

- 靴下の生産の様子に関心をもち、意欲的に調べようとしている。
- 靴下の工場見学から学習問題を見いだして追究・解決し、よい靴下が作られるわけを考えることができる。
- 靴下の生産の様子を見学したり調査したりして分かったことを工夫して表現することができる。
- 靴下の生産の様子やそれらの仕事に携わっている人々の工夫や努力、国内外の他地域などとの関連を理解することができる。

(2) 評価規準

ア 社会事象への関心・意欲・態度	イ 社会的な思考・判断	ウ 観察資料活用 of 技能・表現	エ 社会事象についての知識・理解
・靴下の生産の様子に関心をもち、それを意欲的に調べようとしている。	・靴下の工場見学から学習問題を見いだして追究・解決し、よい靴下が作られるわけを考えようとしている。	・靴下の生産の様子を的確に見学したり調査したりするとともに、調べた過程や結果を工夫して表現している。	・靴下の生産の様子やそれらの仕事に携わっている人々の工夫や努力、国内外の他地域などとの関連を理解し

			ている。
①靴下工場において、自分なりの課題をもって意欲的に取材している。	①聞き取りしたことを基に、広陵町の靴下はどんな点がよいのかを考えている。	①靴下工場の仕事の色を見学・調査して視点をもって調べている。	①広陵町には靴下に関する仕事があることを理解している。
②靴下作りに携わっている人に意欲的に取材している。	②広陵町の靴下工業のこれからを考えている。 ③靴下市が10年間続いている理由を考えている。 ④学んできたことをもとにして、広陵町でよい靴下が作られるわけを考えている。	②靴下作りにかかわる仕事をしている人について、調べてわかったことを工夫して表現している。	②靴下の生産の様子や国内外の他地域との関連を理解している。 ③働いている人の仕事の様子や、工夫・努力を理解している。

3 学ぶことへの関心・意欲を高めるための指導と評価の工夫

(1) 研究の仮説

社会科は調べることを大切にす教科といえる。問題解決的な学習に代表されるように、問いを立て、予想し、検証していく一連のプロセスがある。しかし、社会科の本当のおもしろさは、調べることのみにあるのではなく、調べたことを基に考えることにこそあるのではないだろうか。

本研究プロジェクトの主題は「学ぶことへの関心・意欲を高める」ことにある。「学ぶことへの関心・意欲を高める」には、「分からなかったことが、実感を伴って分かる」ことが最も大切であろう。社会科の学習において「実感を伴って分かる」とは、「調べて考えることを通して理解が深まる」ことだと考える。そのためには、体験的な活動を通しての共感的な理解が必要である。特に「人」の思いにふれることが重要であると考え。また、調べることで得られた知識を総動員して考えることを通して理解が深まっていくこと、そして、そうした自己の学習の深まりを自覚することも実感を伴った理解のために必要である。考えに広がりや深まりを生み出すためには、友達との意見交流をしながら考え合うことが重要だと考える。

そこで、本研究では、以下の仮説を設定した。

人を通して社会的事象を共感的に理解し、そこから得られた知識を基にして、友達と共に考え合うことで、実感を伴った理解ができ、学ぶ意欲が高まる。

(2) 研究の視点

ア 体験的な活動をとおしての共感的理解

3年生の発達段階を考えると、直接「人」・「もの」・「こと」にふれあうことは何にもまして大切である。特に、人の思いや願いにふれることは、頭だけでなく、心にも残っていくものである。本単元では、地場産業である靴下生産を取り上げるが、児童が靴下生産をしている人の立場に立ち、共感的に考えられるようになることは、学習問題を人ごとでなく自分のこととしてとら

え、意欲的に追究していくよさがあると考え。そして、体験的な活動で得られた知識は、転化・応用できるものになり、新たな気付きを生んだり、自分の考えを確かなものにしたりしていく上で大いに役立つものになるだろう。また、靴下生産をしている人の工夫や苦勞について共感的に理解することは、地域に対する愛着を培うことにもつながると考える。そこで本研究では、人とかがかわることに重点を置いた体験的な活動を計画に取り入れていく。

イ 友達との意見交流を大切にしたい考え合う学習

児童がもっている知識や考えていることをただ発表することだけでも、知識の共有化を図ることはできる。しかし、それは実感を伴った理解とまではいえないだろう。分かったことの発表で終わらず、調べ学習で得られた知識や自己の考えを友達との意見交流によって、確かなものにしたり、新たな気付きを生んだりすることで、実感を伴った理解につながると考える。そこで、本研究では、ただ発表するだけに終わらず、友達との意見交流を意識した学習活動を大切にしたいと考える。

みんなで考え合う学習になるように、個別に調べて分かったこと・考えたことを、類似点や相違点に着目し考えたり、もっている知識や考えを基に話し合ったりするなど、友達との意見交流を生み出す学習活動を工夫したい。また、友達との意見交流だけでなく、自己の学習の振り返りも大切に、深く考えていくことにつなげていきたい。


ウ 学ぶ意欲が高まる評価


児童が学習を通して何が分かり、何が課題として残ったのかを振り返り、次に生かしていく自己評価を大切にしていく。学習を通して、自らの変容した姿が意識できるようになると、学ぶ意欲は高まるであろう。そこで、学びの蓄積が視覚的にとらえられるように、学習した成果をファイルに重ねていき、どのように学習を進めていったのか、どのように考えが変容したのかを振り返られるようにする。また、普段から重点を置いてきた作文指導を生かし、自分の考えの深まりが意識できるように、学習の節目節目で、自分の考えを書くことによって整理させることにした。

更に、自己評価だけでなく、友達との相互評価や、教員による支え励ます評価、そして、外部からの評価も適宜用いることで、学ぶ意欲を高めていきたいと考える。

4 学習の流れ

過程	主な学習活動・内容	教員の指導・資料等	評価等
みつめる	○靴下市の写真を見て、気付いたことや知っていること、思ったことや考えたことを出し合う。		
1	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> どうして広陵町では靴下市が開かれているのだろうか？ </div>		
	○広陵町で毎年靴下市が開かれているわけを予想する。	・広陵町と靴下にはどんな関係があるかを想起させる。	
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> かぐや姫まつりで靴下を買いに来る人にインタビューをしよう！ </div>		

課外	<p>2 ○かぐや姫まつりで靴下を直売している様子を調べる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ どうして靴下を買いにくるのかを予想する。 ・ インタビューをして自分たちの課題を確かめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ かぐや姫まつりで靴下を買う理由を考えることで、広陵町で生産される靴下に関心をもたせ、課題追究の意欲付けとする。 	
しらべる	<div style="border: 1px solid black; padding: 10px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> <p>たんけん 「広陵町のくつ下のよさ」をさぐろう！</p> </div>		イの①
	<p>4 ○広陵町の靴下について調べてみよう。</p> <p>5 ○靴下工場へ見学に行こう</p> <p>6 ・見学の計画を立てる。</p> <p>7 ・広陵町の靴下のよさが、工場のどこに隠されているのか予想をする。</p> <p>8 ・自分なりの課題をもって工場を見学する。</p> <p>・工場見学を通して分かったこと、確かめられなかったこと、疑問に思ったことをまとめ、様々な方法で確かめる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 資料や聞き取りを基に地域に靴下工業が根付いていることを確かめさせる。 ・ 見学の視点を明らかにするために、見学やインタビューをする計画を立てさせる。 ・ 靴下を作っておられる方からも直接話を聞き、どんな工夫や苦勞をしているのか、その人の思いにふれさせる。 	エの① アの① ウの① エの②
課外	<p>9 ○靴下作りにかかわる仕事をしている人に取材をしよう。</p> <p>10 ・インタビューの計画を立てる。</p> <p>・インタビューをする。</p> <p>・取材したことを交流する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 内職など、家の人がしている仕事を直接取材させる。 ・ 2、3人でグループを作り、取材の計画を立てさせる。 	アの② ウの②
ふかめる	<div style="border: 1px solid black; padding: 10px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> <p>もっとたんけん！ くつ下のひみつ</p> </div>		
	<p>11 ○気が付いたことを話し合おう。</p>		イの②
	<p>12 ○外国産の靴下が増える中、広陵町の靴下がどうなるのかを考える。</p> <div data-bbox="603 1727 863 1917" style="text-align: center;">  </div> <p>○靴下市が10年間続いている秘密について考える。 商工会の方を招いて</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 靴下の国内生産量の資料をもとに、今もなお全国一の生産量である理由と、働く人のがんばりについて考えさせる。 ・ 商工会の方に靴下市を開くに至ったいきさつや、靴下市の様子、10年以上続いている 	イの③

		秘密について話をしてく。	
	靴下市に広陵町の靴下のよさを知ってもらうのぼりを作ろう！		
1 3	○のぼりにどんなことを書いたらよいかを話し合 う。	・靴下市で聞き取った内容を発表、交流する。  (のぼりの文字の話合い)	イの④
1 4	○のぼりを作成する。		
1 5	○のぼりの文字を元にして広陵町のよさを知っ てもらうチラシを作成する。		
課外	○靴下市で作ったチラシを靴下市にきた人に手渡 す。		
1 6	○靴下市でのインタビューした内容を交流する。		

5 学ぶことへの関心意欲を高める指導の実際

(1) 体験的な活動を通しての共感的理解

学ぶ意欲を高めるために、以下のような体験的な活動を計画的に取り入れた。

① 広陵町の靴下を直売している場（かぐや姫まつり）でのインタビュー

はじめは、インタビューに抵抗を示している児童もいたが、徐々に慣れていき、靴下の買い物袋をぶら下げている人を見つけては、積極的に話を聞いていた。お店の人も丁寧にインタビューに答えてくださり、児童も熱心にメモをすることができた。

かぐや姫まつりに参加できなかった児童は、参加した児童とともにインタビューの回答をまとめていき、買い物をする人の考えを確かめ合った。

買う側へのインタビューによって、広陵町の靴下のよさが、「品質のよさ」と「種類の多さ」として受け入れられていることに気が付くことができた。

また、売る側（工場）の人が親切にインタビューに答えてくださったということもあり、工場働く人の存在にも気が付くことができた。この活動は、これから追究していく靴下の生産についての学習に対する意欲付けと見通しをもつのに有意義な活動であった。



(かぐや姫まつりでのインタビュー)

② 靴下工場見学

工場見学をするに当たって見学の視点を明らかにするための話合いを行った。かぐや姫まつりでのインタビューでまとめた「品質のよさ」「種類の多さ」「作り手の思い」という三つのよさを実現するための秘密が工場に隠されているのではないかと問いかけた。児童は「特別な糸で作っているのではないか」「機械の性能がよいのではないか」「パソコンでデザインしているのではないかな」といった予想を立て、自分なりの見学の視点がもてるようにした。工場ではその視点に沿って熱心に見学をし、編み立ての機械の他に、検針の機械や糸くずが付くのを予防する機械を見付けたり、コンピュータでサイズやデザインを管理していることを発見したりしていた。見学

後の話合いで、「品質のよさ」「品種の多さ」の秘密については十分な理解が得られた。また、靴下工場の機械の大きな音の中でも、一生懸命働いている姿を見ることで、人の営みに気付く児童もいた。更に、靴下が工場の中だけではできないことを知り、どのようにできあがっていくのかについても興味をもつこともできた。視点が明確であったことで意欲的に見学できたと同時に、新たな課題が生まれ、更に追究意欲が芽生えたといえる。

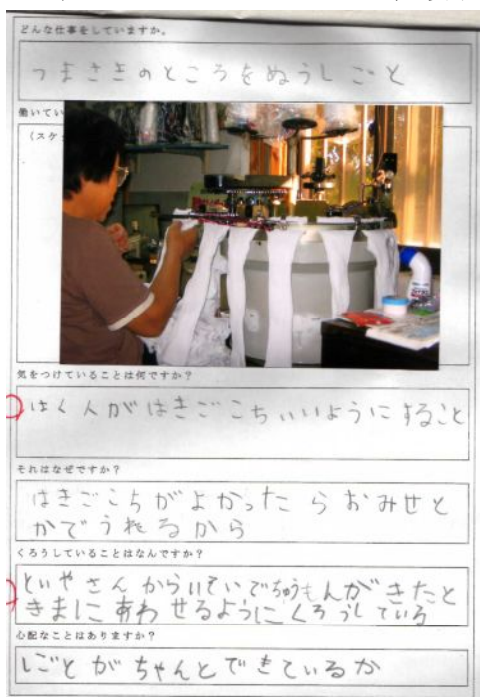


(靴下工場の見学)

③ 靴下づくりの仕事にかかわる人へのインタビュー

工場見学では、生産工程については理解が深まったが、人の思いにまで考えをめぐらせる児童は少なかった。しかし、見学のまとめをするとき、祖父が靴下工場に勤めている児童が、「品質」「品種の多さ」も広陵町の靴下のよさだが、「お客さんの気持ちを考えながら作っていること」「いつも情報をキャッチして新しいことにチャレンジすることが大切だ」ということを発表した。この発言をきっかけに、靴下作りにかかわる人の存在に児童が気付き始めた。

学級には家族の中で靴下作りにかかわる仕事をしている児童が11名いる。そこで、その児童を中心としたグループごとに直接取材を行った。取材する際には、仕事の内容についてはもちろんのこと、気を付けていること、その理由、苦勞していることを中心に質問するようにした。



(靴下生産にかかわる人への取材)

働いている様子やその思いにふれることにより、「靴下づくりはその品質を保つために、細かなところまで気を配って作業をしていること」、また、「作り手が靴下をはく人の気持ちを考えて作っていること」に思いが及ぶようになった。「靴下にはたらく人の思いがこめられているなんて知らなくて、びっくりした。」「ふだんはいている靴下には働く人の気持ちがこもっているのだから、これからは大切にはきたい」という児童の感想もあった。靴下生産の裏には、人々の思いが存在するという事は、児童にとって、見えなかったものに気付いた驚きや喜びもあった。この取材を契機として、作り手の思いがクローズアップされ、広陵町の靴下のよさの裏側に、働く人の思いがあることに気が付く児童が増えてきた。靴下生産をしている人の立場に立つて考える上で大切な学習活動となった。

(2) 意見交流を大切にしたいみんなで考え合う授業

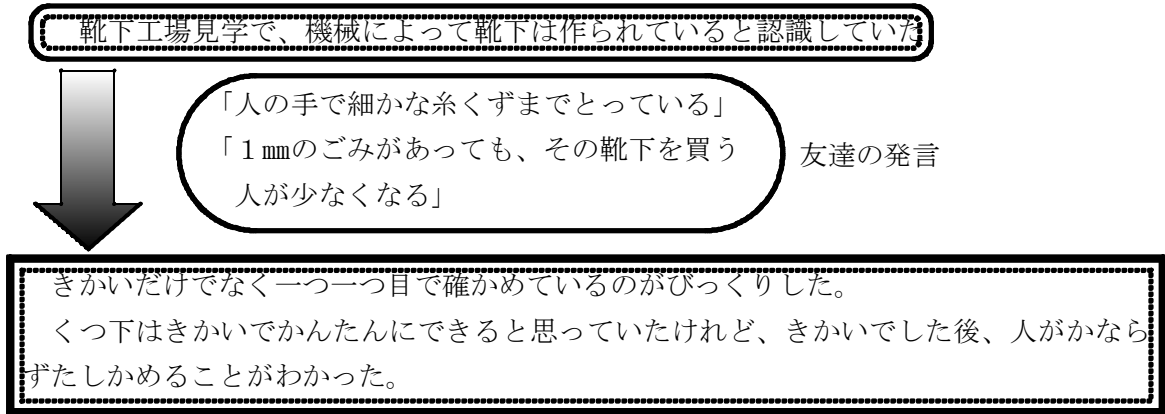
ただ発表するだけで終わらず、みんなで考え合う学習を大切にしたい。そこで、以下のような学習活動を行った。

① 靴下の仕事調べの後の情報交換

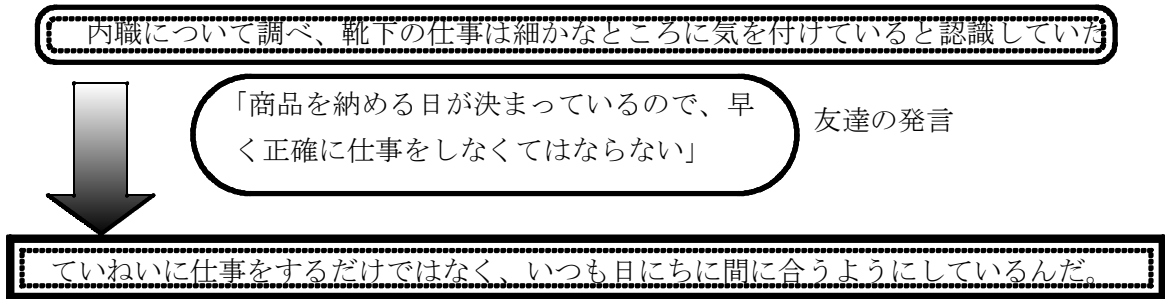
靴下生産にかかわる人にインタビューをして分かったことの情報交換を行った。靴下工場について更に調べを進めるグループや内職の様々な仕事(さきぬい・きずみなど)グループに分かれて調べ学習を進めさせた。そして、調べた班ごとに工程と工夫・苦勞をまとめ、発表し、お互いに得た情報から靴下生産の特色について考えさせた。

友達との意見交流の中で考えが深まった例

児童の変容①



児童の変容②



どんな仕事	どんな思い
くつ下を作る	お客さんとしたいようにするためにがんばりまがもつけない。
糸くずを捨てる	はやくきれいにきれいにする。
かぎ針で縫う	まちがわれないように正しくすること。
くつ下を作る	お客さんのことを考えてつくっている。
はいす	ていねいにできているかたしかめたりはききやすいようにつくる。
くつ下をかぎ	きかいたけをしないように気をつける。
ロストをぬぐ	きかいたけと仕事をすること。(目かかめる)
くつ下のせん	お客さんのことを考えて悪いところをおかしく早く、正しくにする。
くつ下の先ととめる	同じ色にばかように組む。
きかいたけ	糸くずを見おとさないようにする。
くつ下のせい	いいようにするためにがんばりまがもつけない。

友達の発表を聞いて…
こんなにくつ下にかかるとかあるんだよ。しうすからた。ok
お客さんのことをかんがえながらつくっている。お客さんのこともかんがえてきれいなくつ下をつくらせてくれる。ok

(インタビュー交流ワークシート)

② もっとたんけん くつ下のひみつ

①の児童は、友達の発言によって、手作業の細かさに気付き、靴下生産について考えを深めることができたといえる。また、②の児童は、自分が調べてきたこと以上に苦労があることに気付いたといえる。考えのやり取りをする中で「内職や工場の仕事など、仕事の中身は違っても気をつけていることがほとんど同じなのびっくりした」「くつ下を作る人はお客さんのことを考えて作っている人が多い」といった靴下生産に携わる人の多くに共通している思いに着目し、意見を発表する児童もいた。

このように調べたことを発表、意見交換することで、自分が調べたことだけでは分からなかったことを知ることができた。また、友達が調べたたくさんの情報や、友達が調べてきたことと自分が調べたことを比較したり、関連付けて考えることで、靴下生産の特色について理解を深めたりすることができた。このように意見交流は、思考の深まりにつながったと言える。

学習したことを基に、広陵町の靴下の生産について考えを深めるために、「もっとたんけんくつ下のひみつ」をテーマに、二つの学習活動を組んだ。一つは、「広陵町の靴下はこれから」もう一つは、「10年以上続く靴下市の秘密」について考えることである。

まず、「値段の安い外国製の靴下に日本の靴下は負けてしまうのではないか？広陵町の靴下はこれからどうなるのか？」と問いかけた。児童は一様に、「大丈夫。広陵町の靴下ははきごちちがよくて、作る人もはく人の気持ちを考えている。」「何回も検査してて、不良品がない。」「内職の人もがんばっている。」という意見でまとまった。これまでの学習から、広陵町の靴下のよさに対する自信のようなものを感じていた。

靴下市が10年間続いている秘密については、生産者の側に立った発言が多かった。ただ、「品がよい」という発言でなく、「検査を何回もしているから」「はく人のことを考えて作っているから」といった今まで学んだことを生かして自分の言葉で理由を言うことができていた。また、「広陵町は靴下の町として有名だから」「はきごちちがよくて、また買

思	せ	だ	て	い	い	の	の				
い	い	か	も	る	て	中	思	広			
か	そ	ら	小	く	て	に	い	陵			
こ	う	さ	つ	い		か	町	広			
め	を	き	な	下	る	わ	こ	の	陵		
ら	し	が	ゴ	に	の	た	め	く	町		
れ	て	見	こ	も	だ	し	ら	っ	の		
て	い	を	ま	思	ろ	の	れ	下	く		
く	る	し	で	い	う	お	て	い	っ		
つ	人	こ	と	か	か	ば	い	足	下		
下		い	っ	こ		あ	る	に	足	の	
か	そ	う	て	の	わ	ち	と	ほ	よ		
で	れ	ん	く	ら	た	ら	分		さ		
さ	ぞ	い	れ	れ	し	ん	か	い	の		
あ	れ	く	て	い	の	の	ろ	ひ			
か	の	つ	い	る	は	思	た	ん	み		
る	ト	下	る	い	か	た	な	っ			
の	の	の	と	て	は	そ	ん				

(意見交流を終えての作文)

いに来る人がいるから」「種類が多くて買い物が楽しみだから」などの意見から、生産者側のがんばりによって消費者側もそのことを認め、10年間続いているということに気が付くことができた。更に、「広陵町の靴下はすごいと知ってほしいから。」「自分たちで作った靴下をはいてほしいから。」「他のところに住んでいる人に靴下のよさを伝えたいから」といった生産者側に思いを重ねて考える児童もいた。この意見交流から、多面的に広陵町の靴下のよさを見つめていくことができた。

③ のぼりを作ろう

「たんけん 広陵町の靴下のよさ」をテーマに、広陵町の靴下生産について理解を深めてきた。その集大成として、これまでの学習を生かし、広陵町の靴下のよさをより多くの人に知ってもらうため、靴下市にのぼりを立てることにした。自分たちが作ったのぼりを立てるという活動は児童の意欲を喚起した。

のぼりの文字を考えていくに当たっては、生産者の側に立ち、そのよさをPRする文章を考えさせた。また、いくつかのサンプルを用意し、イメージ化できるようにした。グループ内で意見を出し合い、選んだり組み合わせたりすることで、よりよいのぼりの言葉を考えていた。

児童が考えた意見は、作り手が履く人のことを考えて靴下を生産していることに着目した意見が多かった。その他に、検査を何度をしていることや、工場だけでは靴下はできあがらず、様々な工程があることについての意見が出ていた。「手に針が刺さってもがんばって作っているくつ下です」「目がつかれても、きずがないか見ているくつ下です」という具体的な言葉を、話し合いによって「思いがたくさんつまっている」という表現にまとめている班があった。また、「生地がよくてはきごちちのいいくつ下です」という意見でまとまりかけている班が、作り手の思いにこだわった児童の意見を取り入れ、「作り手の思いがこもった」という文を付け加えていた。

話し合いの結果、のぼりの文字は以下のようにまとまった。

- ・作り手の思いがこもったはきごちのいくつ下です
- ・時間とろう力をかけて一生けんめい作ったくつ下です
- ・一足ずつに作る人の思いがたくさんつまっているくつ下です
- ・けんさを何度もしているから悪いところを見のがしていないきれいなくつ下です



(靴下市で立てたのぼり)

のぼりを作る一連の活動は、靴下市でみんなに見てもらえるということもあり、意欲的に考えることができた。「買いに来るお客さんのことを考えながら作れた。」「いろんな人に靴下のよさを知ってもらえる喜びを感じながらのぼりを作成することができた。」とふりかえる児童もいた。みんなで話し合ったのぼりの言葉を、児童は「書くの緊張する。」と言いながら、一文字一文字丁寧に仕上げている。

(3) 学ぶ意欲が高まる評価

児童が学習を通して何が分かり、何が課題として残ったのかを振り返り、次に生かしていく自己評価を大切にしたい。時系列にノートや学習カードを整理した結果、学習の足跡を振り返りながら、のぼりの文字を考えたり、チラシを作成したりすることができた。

右の作文を書いた児童は、工場見学の後で、靴下の学習をはじめる前の様子と、工場見学で学んだことの振り返りをさせたところ、見学によって工程面についての理解が深まったことを記述している。この児童は、後の感想でも靴下工場での見学でたくさんのが分かったと振り返っていた。靴下生産にかかわ



(靴下工場見学後の作文)

る人へのインタビュー後の振り返りは、友達との意見交流をする中で、靴下生産について理解が一層深まることつにながったことが分かる。

この児童はこの学習のまとめに、「この学習で、とても靴下のことが分かった。広陵町の靴下のことをもっといろんな人に知ってもらいたくなった。」という感想を書いている。靴下生産について理解を深めただけでなく、そのよさを発信しようというところまで高まったことがうかがえる。

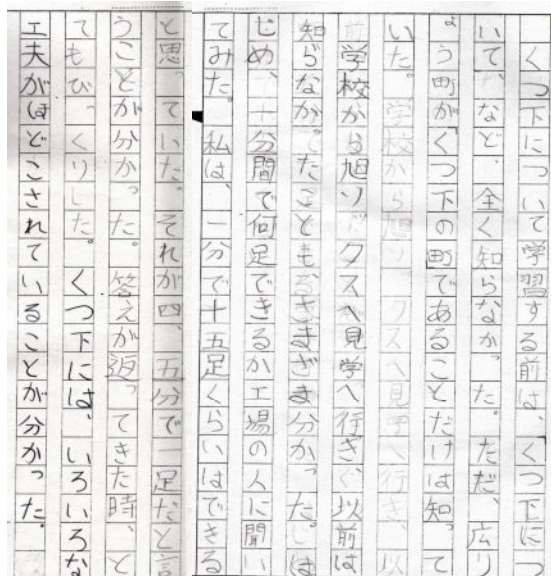
学習のまとめとしてチラシを作成し、靴下市を訪れた人に配布した。チラシの内容を考えることは、今まで自分が得た知識を総動員して考えることにつながった。

また、靴下市で配布したチラシの裏には、「感想があったら学校に送ってください」と書いておいたところ、10通の返信があった。どの手紙も自分たちの学習活動を賞賛してくださる内容で

あった。第三者から評価をいただいたことは、自分たちの学習に価値を見いだすことができ、地域に対する愛着を育てる一助となった。自分たちのがんばりが心のこもった手紙という形で何通も返ってきたことは、学習の達成感を大きいものにした。

6 成果と課題

知的好奇心を基に新しい知識を獲得することは、学ぶ喜びにつながる。児童は、広陵町の靴下についての情報を、見学やインタビューなどの活動や友達と意見交流から蓄積させることができた。工場見学や靴下を生産している人へのインタビューが楽しかったと感想を述べる児童が多かった。児童からは、



(インタビュー後の振り返り)

- ・さいしょはむずかしいと思っていたけれど、おもしろくなった。
- ・はじめはいいややっていたけど、だんだん楽しく勉強ができた。

といった感想が多く出された。また、学習のまとめの際、

- ・広陵町の靴下について何も知らなかったけれど、今は広陵町の靴下が一番の自慢です。
- ・靴下で有名な広陵町に住んでいてよかったです。
- ・これからは広陵町のよさを説明できるのがいいところだと思います。
- ・これからは広陵町のよさをみんなに伝えていきたいです。

等の感想があった。靴下が一番の自慢だと感想を書いた児童は、自分が祖母に聞き取った靴下の仕事の特徴が、友達が調べた他の靴下の仕事の特徴やみんなで考えた10年続く靴下市の秘密と、働く人の思いという点でつながっていることに気が付いて、跳び上がるぐらいうれしかったと学習の振り返りをしていた。共感的な理解を基にして、友達との意見交流の中で考えが深まったといえる。人とのかかわりを意識して体験的な活動を組んでいったことで、実感を伴って分かることにより、追究意欲が高まり、学習する喜びを感じながら取り組めたと考えられる。

ただ、友達からの意見を基に考えを深めることはできても、そこで深まった自分の考えを基に友達に再度働きかけるところまでは至らなかった。交流、練り合い、価値葛藤を生む学習活動の工夫はもちろんのこと、児童が個々にどのような考えをもち、どのような情報をもっているのか、指導者側が十分に把握することが必要である。授業の工夫をすることによって意図的に発言をつなげることで新たな気付きを生み出したり、考えを深めたりすることになる。今後の実践に生かしていきたい。

第2節 理科

1 基本的な考え方

(1) 理科における学ぶことへの関心・意欲を高める指導の基本的な考え方

理科は、自然に親しみ、見通しをもって自然の事物・現象を観察、実験などを通して調べ、結果を整理し、考察を深めることに関心や意義を感じることや、問題解決の過程を大切にしている。更に、ものづくりの充実を図り、知的好奇心を高め、実感を伴った理解を図ることも大切にしている。理科において「学ぶ意欲」は重要であり、「学ぶ意欲」が支えとなり、知識・技能や思考力・判断力を牽引する。体中の感覚を働かせて、自然の事物・事象に親しむとき、子どもは「不思議だなあ」という心情を抱く。これが興味・関心であり、「学ぶ意欲」につながっていく。

そして、「不思議だなあ」という心情をもって、考え調べていく。この探究する過程、問題解決の過程に楽しさがあり、更に「学ぶ意欲」を高めていくことができるのである。しかし、子どもに問題を解決するための「課題」と「具体的な方法」が明確になっていないと、「学ぶ意欲」は顕在化されない。子どもに「何を」という、明確な「目標」や「課題」がない場合は、実現すべき「目標」や「課題」を、事象、状況、環境などによって提示し、子どもが「目標」や「課題」を明確にできるように工夫することが必要である。

また、「学ぶ意欲」を高めるためには、学習を振り返る過程においてその学びの価値や日常生活での活用に気付かせることも重要である。日常生活との関連を意識した指導の中で、「学ぶ意欲」が高まるだけでなく、基礎的な科学概念や知識・技能等の定着、科学的な思考の育成につながっていくものと考えられる。

(2) 学ぶことへの関心・意欲を高める指導方法の工夫

学ぶことへの関心・意欲を高める指導方法の工夫として、第一には、探究的な活動を通して、子どもの知的好奇心を刺激し、「学ぶ意欲」を高めることが大切である。探究的な活動では、子どもは、自らの予想や仮説をもって、観察、実験という活動に主体的に取り組んでいく。この過程を充実させることにより、「確かな学力」を確実に身に付けることができる。「学ぶ意欲」は、「確かな学力」と本来相互にかかわりながら補強し合っていくものである。

子どもの知的好奇心を刺激するには、教員は常に子どもの側に立ち、一人一人の子どもが自ら考え、分かったという思いをもてる授業をつくっていかなければならない。教員が説明して教えることも必要であるが、子ども自身が、観察、実験などを通して見付けたり考えたり、考えたことを話し合っ理解を深めたりするなど、探究的な活動を進めることが求められる。

第二には、子どもが自ら知をつくり、知を生かす学習活動を充実させることが大切である。学習前の子どもの姿をよく把握して、「補充的な学習」や「発展的な学習」を計画的に実践していくことが大切である。そのために、次の四点に留意して、子どもが自ら知をつくり、知を生かす学習活動を充実させることが大切である。

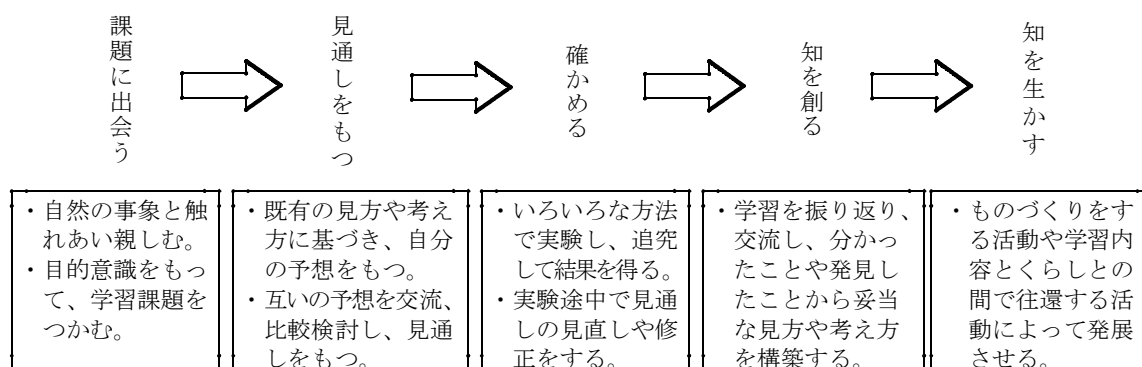
ア 問題解決の過程では、子ども自身が課題意識をもって積極的に進めなければならない。主体的な学習は、子どもが自然の事物、現象と積極的に触れあい、親しみ、「課題に出会う」ことから始まる。教員は自然の事物、現象と子どもの出会いを工夫し、着目点を明確にして学習課題をつかませることが、子どもが自ら学ぶためのスタートとなる。

イ 課題を追究する過程では、子どもが「こうなりそうだ。こうすればできそうだ。」という見通しを積極的にもたせることが主体的な学習の原動力となり、「学ぶ意欲」を喚起する。授業では予想をもつ場面としてそれらの見通しを表出できる場面をつくり、子ども同士が交流し、

予想について比較検討する中で明確な「見通しをもつ」ことに至る。

ウ 「確かめる」過程では、子ども同士の協同学習は大きな効果を発揮する。追究によって得られた結果から手続きが見直され、見通しが修正され、自然に対する見方や考え方が徐々に構築されていくのである。このとき、友達と意見を交流し、考えを出し合う中で、様々な観点から予想や手続きが見直され、いろいろな考えが淘汰とうたされることでより妥当な考えが形成されていく。

エ 問題解決の過程を終えた後では、学習を振り返り、その学習を意味付け、学びの価値に気付くような指導を行う。「学ぶ価値」を見いだすことができれば、次の問題解決への意欲は格段に高めることができる。そして、学習で明らかになった物の性質や規則性などが実社会や実生活の中でどのように活用されているかを意識して学習を意味付けていくような指導の工夫によって、自らが創り上げた「知」が、まさに生活の中で生き、生かされていることに驚き、更に学習が深まるのである。



(3) 学ぶことへの関心・意欲を高めるための教材開発の在り方

教材は、学習者を学習目標へ到達させるための媒介物である。教科書で扱われている教材・教具は、学習指導要領に基づいているとはいえ、教材について工夫の余地が十分に残されている。子どもの実態と学校の地域性等を十分考慮して、最適な教材を選択し、創造することが大切である。特に、教師自らが開発・自作した教材・教具を授業に使用するとき、子どもは親近感を覚え、その結果、子どもの興味・関心が高まり、「学習への意欲」を高めることができる。

ア 教材開発の視点

理科学習で使用する教材・教具の善し悪しが、その授業の成否を大きく左右する。したがって、指導内容や指導方法に合った有効な教材・教具を開発することが必要である。有効な教材・教具の開発に当たって必要な視点には、次のようなものがある。

(ア) 子どものつまずきを修正する

教師が自己の日常の授業実践を振り返り、子どもが理科学習で何につまずいているのか、どんな内容が理解しにくいかに着目する。「わかる授業」の構築こそが、「学ぶ意欲」を喚起する第一条件でもある。そして、子どものつまずきの原因が、教材・教具に問題点があると考えられる場合には、子どものつまずきを修正したり理解度を高めたりするための教材・教具の改良や新規開発の必要性が見いだされる。

(イ) 教師の指導内容・指導方法にあったもの

開発しようとしている教材・教具が理科学習のどの段階で使用するものであるかを明らか

にし、次の表に示すような指導段階に応じた教材開発が、学習意欲を高めたりする効果がある。

表1 教材・教具の特徴

指導段階	教材・教具の特徴
導入段階	子どもたち一人一人に問題意識をもたせ、興味・関心を引き起こし、矛盾・葛藤をよび起こしやすい教材・教具
展開段階	子どもの疑問や問題点を解決するのに有効かつ、自ら進んで試したくなる教材・教具
応用段階	日常生活と関連し、展開段階で発見した原理や法則の有効性を十分に感得させる教材・教具

(4) 学ぶことへの関心・意欲を高めるための評価の在り方

児童の評価に当たっては、知識や技能の習得の程度を的確に評価することはもちろん大切であるが、児童の学習に対する努力や意欲などを積極的に評価し、評価の結果を分かりやすく、活用しやすい形でフィードバックして、子どもの学習意欲の向上に生かすようにすることが大切である。その際には、学習の成果だけでなく、学習の過程における評価を一層重視する必要がある。特に、他者との比較ではなく、児童一人一人のよさや可能性などを様々な側面、進歩の状況などを積極的に評価する個人内評価も合せて行うことが大切である。また、評価は授業改善の機能をもつことから、実施した学習の教材や指導方法が適切であったか、児童一人一人が自己効力感を高める学習を進めたかななどを、授業を常に振り返りながら、指導の工夫・改善を図っていかなければならない。

参考・引用文献

- (1) 中央教育審議会答申 「初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について（答申）」 平成15年10月7日
- (2) 初等教育資料 学ぶ意欲を高める学習指導の改善 平成17年10月号(No. 813)
- (3) 初等教育資料 学ぶ意欲を高める学習指導の改善 平成17年11月号(No. 814)
- (4) 理科教育学講座 第6巻 日本理科教育学会 東洋館出版社 平成4年10月30日
- (5) 小学校における確かな学力を育てる指導 奈良県教育委員会 平成18年3月31日

2 事例

1 単元の構想

(1) 単元の目標とねらい

これまでに子どもたちは、流れる水の働きと土地の変化の関係についての見方や考え方を、第5学年「流れる水のはたらき」の中で学習してきた。本単元では、これらの見方や考え方を基本として、身の回りの土地やその中に含まれる物を調べ、土地の構成物や地層の広がりやでき方をとらえられるようにすることを目標としている。

指導に当たっては、実験や観察を通して、子どもが直接経験できるように配慮するとともに、デジタルコンテンツの映像や標本などの資料を積極的に活用し、土地に関する事象に興味・関心をもちながら意欲的に課題を追究する態度を育てたい。また、これらの活動を通して、土地の構成物の特徴やそのでき方及び土地の変化の規則性についての考え方を養うとともに、土地に関する事象を多面的に追究する能力や、火山の噴火や地震に見られる自然の力の大きさを感じとるようにすることがねらいである。

(2) 学習前の子どもの姿

本単元の学習に当たり、子どもの思考に沿った単元構成と課題づくりを行うため、事前調査として、コンセプトマップづくりと簡単なアンケート調査を行った。コンセプトマップづくりでのラベルとラベルの使用割合は図1のとおりである。この単元に関連した①から⑬のラベルを指導者が設定し、知らないラベルは使用しなくてもよいこととした。図1から、事前調査のコンセプトマップでは「①化石」と「②恐竜」の二つのラベルはすべての子どもたちが使用し、言葉としての認知の高さを知ることができた。「①化石」と「②恐竜」は各メディアにも頻繁に取り上げられ、子どもたちも目にする機会が多く、興味・関心が高いことが予想される。

リンクについては、図2のように「⑦小石」と「⑫川」のラベルをリンクさせている子どもは11名であった。

地層の構成物である小石と川との関係は第5学年「流れる水のはたらき」の単元で既習であることが考えられるが、図3のように「④地層」と「⑬海」のラベルをリンクさせている子どもは1名という結果であった。「⑬海」のラベルも使用率は高いものの、「③アンモナイト」⑥

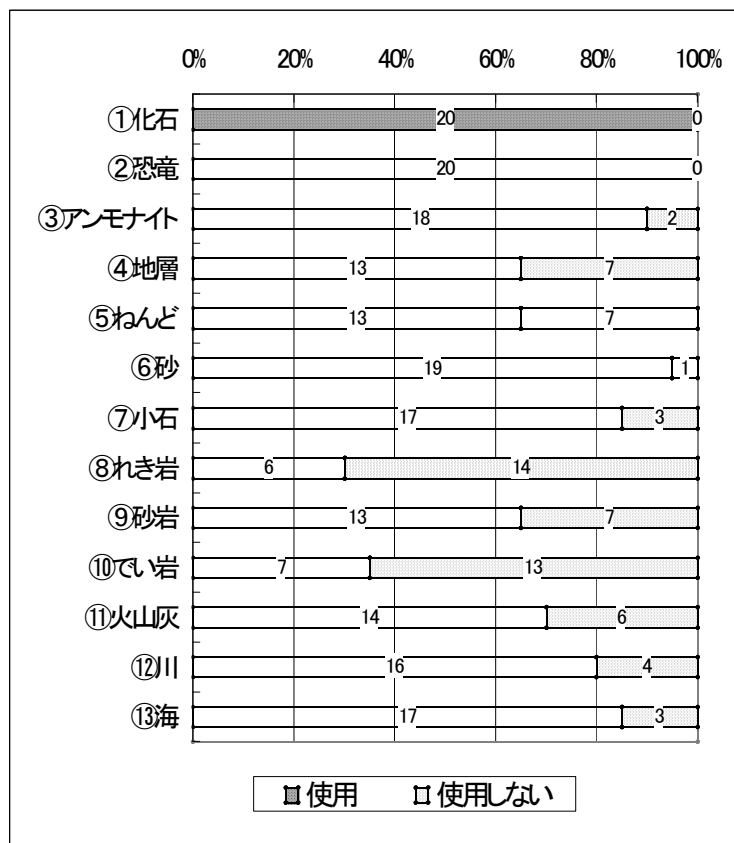


図1 事前調査におけるコンセプトマップのラベル使用割合 (N=20)

砂」「⑫川」とのリンクが8名ずつと、多くの児童のリンクは地層が海底で堆積することを意識し

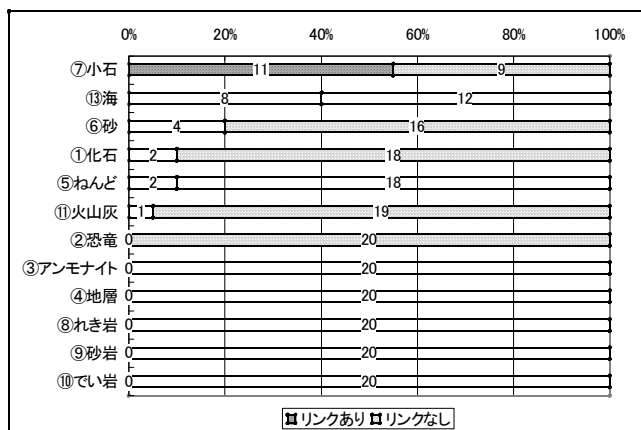


図2 「⑫川」ラベルとのリンク状況 (N=20)

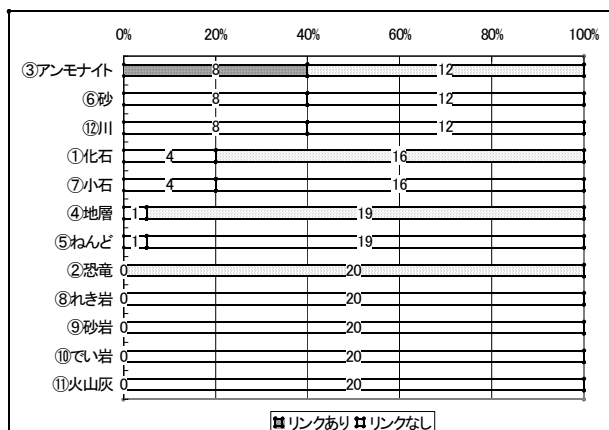


図3 「⑬海」ラベルとのリンク状況 (N=20)

たものとはなっていないかった。

また、表1は事前のアンケート調査の内容であり、その結果が図4である。図4より、「化石について」の項目では興味があると回答した児童の割合が多いのに対して、「地層に含まれる物」や「地層のでき方」の項目では興味がないと回答した児童の割合が多いことがわかった。

(3) 改善の視点

事前調査から、流れる水の働きで削られ、運ばれた土砂が、長い年月をかけて海底に堆積し、地層を構成するという概念形成のための指導の工夫が必要であると考える。更に、地層の構成物や地層のでき方について興味がないとする児童が多いため、直接体験的な活動が有効であると考えられるが、実際に地層が形成される様子を子どもたちが直接観察することは不可能である。直接体験に代わるモデル実験により、時間や空間を関係付けながら地層の構成物の特徴や形成過程を身近に感じ取ることが必要であると考える。

更に、本単元の指導者側の意識のアンケート調査を行った。調査項目として、「身近な地層の観察場所について」、「沈降実験や堆積実験の実験器具の活用について」、「指導のしやすさについて」を挙げ、回答を得た。指導のしやすさについての項目では、図5のように「指導が難しい」と回答した指導者の割合が多くを占める結果となっている。露頭などを直接観察させることができないことや、時間的・空間的規模が大きすぎるため、資料提示や映像による授業展開となってしまうこと、また、実験器具の不足や、準備・

表2 事前のアンケート調査

理科 大地をさぐるアンケート
これから学習する内容について、あてはまる番号に○をつけましょう。

①化石について
1 大変興味がある 2 興味がある 3 興味がない

②地層ちそうに含まれる物(小石・砂・ねんど等)について
1 大変興味がある 2 興味がある 3 興味がない

③地層のでき方について
1 大変興味がある 2 興味がある 3 興味がない

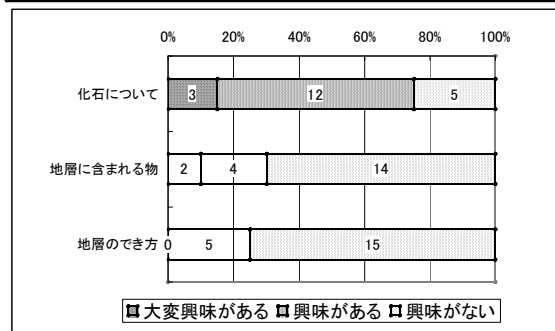


図4 事前のアンケート調査の結果 (N=20)

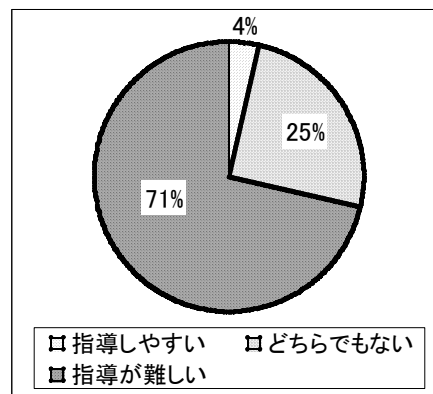


図5 指導者の意識調査 (N=28)

片付けの手間がかかるため実験が行われにくく、結果として児童が興味や関心・疑問をもちながら問題を意識できるような授業を展開しにくいことが、「指導が難しい」と回答した主な理由であった。

モデル実験では主に堆積実験装置を使用するが、市販の堆積実験装置は高額であり、学校に実験装置が備わっていても台数が少ないため、指導者による演示実験と解説で終わる授業になりがちである。また、教科書にあるように水槽や塩ビパイプで堆積実験装置を準備したとしても、準備や実験後の土砂の処理に手間がかかることになる。

これらの問題点から、子ども一人一人が疑問や興味をもち、学ぶことへの関心・意欲をもって学習を行うことができる教材、また、指導者も学校の立地条件や資料の有無、時間的制約にかかわらず子どもの興味・関心を高めることのできる授業展開ができる教材の開発が必要であると考えた。

2 単元の目標と評価規準

(1) 単元の目標

土地のつくりと変化のようすを調べ、見いだした問題を多面的に追究する活動を通して、土地のつくりと変化のきまりについての見方や考え方を養う。

(2) 単元の評価規準

自然事象への 関心・意欲・態度	科学的な思考	観察・実験の 技能・表現	自然事象についての 知識・理解
①大地やその中に含まれる化石などに興味をもち、調べようとする。 ②身の回りの土地の様子や構成物、土地の変化について意欲的に調べようとする。 ③土地をつくったり変化させたりする自然の力の大きさを感じ、意欲的に調べようとする。	①地層のようすと大地の構成物とを関係付けて、地層の広がりや推論することができる。 ②大地の様子やその構成物と川原の様子や堆積実験、沈降実験とを関係付けて、地層の成り方を推論することができる。 ③陸上に現れた地層は、長い年月をかけて、流れる水のはたらきで削られ、土砂が運ばれて積み、また、地層ができることができる。	①資料を使うなどして、大地やその中に含まれる化石などを調べることができる。 ②試験管等に土を入れて、土の積もり方を調べることができる。 ③水槽に土を流し込んで、土の積もり方を調べることができる。 ④地層モデルや柱状図を活用し、地層の様子を調べ、記録することができる。	①地層は、礫、砂、粘土、火山灰および岩石からできており、層をつくって広がっていることを理解している。 ②地層は、流れる水や火山の噴火によってでき、化石が含まれているものがあることを理解している。 ③水中で堆積した地層が長い年月の間に隆起し、地上で見られることを理解している。

3 指導と評価の計画

(1) 指導の計画（全12時間）

単元導入 大地をさぐる。 …2時間

第1時 化石について疑問に思うことを話し合い、調べる。

第2時 化石の原石を割って化石探しをする。

第一次 地層はどのようにしてできたのだろう。 …5時間

第3時 地層の構成物を調べ、層が積み重なる訳を考える。

第4時 地層のでき方について予想し、実験で確かめる。 …（本時）

第5時 地層のでき方について実験したことをまとめる。

第6時 地層が火山の噴火によってもできることを調べる。

第7時 調べたことをもとに地層のでき方をまとめる。

第二次 地層の広がりを調べよう。 …2時間

第8時 地層モデルから学校の地面の下の様子を予想する。

第9時 柱状図を作って学校の地面の下の様子を推論する。

第三次 水底に積もった地層が陸上で見られるのはどうしてだろう。 …3時間

第10時 長い年月の間に起こる大地の変化を調べる。

第11時 大地の変化や土地の成り立ちをまとめる。

第12時 学習したことをまとめる。

(2) 指導と評価の計画（全12時間）

次・時	学習内容 ・ 指導事項	評価規準との関連				評価方法等
		関心	思考	技能	知識	
導入	大地をさぐる。					
第1時	化石について疑問に思うことを話し合い、調べる。			①		行動観察 ノート
第2時	化石の原石を割って化石探しをする。	①				行動観察
第一次	地層はどのようにしてできたのだろう。					
第3時	地層の構成物を調べ、層が積み重なる訳を考える。		①	②		行動観察 ワークシート
第4時 （本時）	地層のでき方について予想し、実験で確かめる。			③		行動観察 ワークシート
第5時	地層のでき方について実験したことをまとめる。		②			行動観察 ノート
第6時	地層が火山の噴火によってもできることを調べる。				①	行動観察 ノート
第7時	調べたことをもとに地層のでき方をまとめる。				②	ノート
第二次	地層の広がりを調べよう。					
第8時	地層モデルから学校の地面の下の様子を予想する。	②				行動観察 ワークシート
第9時	柱状図を作って学校の地面の下の様子を推論し、まとめる。			④		ノート
第三次	水底に積もった地層が陸上で見られるのはどうしてだろう。					
第10時	長い年月の間に起こる大地の変化を調べる。	③				行動観察 ノート
第11時	大地の変化や土地の成り立ちをまとめる。		③		③	行動観察

第12時	学習したことをまとめる。					ノート 自己評価 コンセプトマップ
------	--------------	--	--	--	--	-------------------------

4 学ぶことへの関心・意欲を高めるための指導と評価の工夫

(1) 教材開発

ア 化石発掘体験

コンセプトマップづくりや学習前のアンケート調査の結果から、子どもの興味・関心の高さを知ることができる「化石」と「恐竜」のキーワードを手がかりとして、直接体験的な活動を授業展開に生かすことを考え、単元導入では化石発掘体験を行った。

化石の原石を木の葉化石園（栃木県那須郡塩原町）から取り寄せた。今回使用した化石の原石からは、植物の化石を中心としてすべての子どもが化石を発掘することができたことで、児童一人一人が実際の化石に触れることができ、化石をより身近に感じ取り地層の構成物や構成等について興味・関心をつなげていくことができた。化石の原石は一つ100円程度と安く、子どもの体験活動としては取り組みやすい活動であると言える。

イ 沈降実験

次に沈降実験・堆積実験を行うに当たり、指導者による演示実験ではなく、個々の子どもが実際に課題解決学習を行えるよう、図6の簡易型沈降実験装置と図7の簡易型堆積実験装置を製作した。子ども一人一人が簡易型の沈降実験装置と堆積実験装置を持つことで、自分の予想や疑問をふまえて何度も実験・観察を行い、確実な概念形成ができるように工夫した。材料費は両装置で200円程度であるので、実験班数の準備はもとより、児童数の装置を準備・製作することも可能である。



図6 簡易型沈降実験装置



図7 簡易型堆積実験装置

簡易型沈降実験装置の製作方法は以下のとおりである。

(ア) 準備物

ペットボトル（500ml、炭酸飲料用）×2、ビニールテープ（透明）、ペットボトルばさみ

(イ) 製作方法

- a 2本のペットボトルの上端をそれぞれペットボトルばさみで切り取る。（切り取った上端部分は簡易堆積実験装置で使用する。）

- b 一方のペットボトルのみ下端をペットボトルばさみで切り取る。
- c ペットボトルの切り取った部分をつなぎ、水漏れ防止のためビニールテープでとめる。
- d 下端部分を蓋とする。

(ウ) 成果

個人の実験器具ということもあり、子どもたちは様々な土の種類で繰り返し実験を行い、大変意欲的に活動に取り組むことができた。水中では小石・砂・ねんどの粒子の違いにより、沈降速度が変わることをはっきりと観察することができた。更にこの実験が、堆積の様子から地層の形成に関する興味・関心の高まりとともに、子どもたちの堆積実験へのより具体的な疑問や課題を明らかにすることができたと考える。

ウ 堆積実験

簡易型堆積実験装置の製作方法は以下のとおりである。

(ア) 準備物

クリアケース (270mm×100mm×30mm) × 2、ペットボトル (500ml、炭酸飲料用の上端)、アクリル板カッター、電気ドリル、アクリルボンド、ペットボトルばさみ、コーキング剤

(イ) 製作方法

- a 斜面となるアクリル板を、クリアケースの深さに合わせて切る。
- b クリアケースの側面に、給水用と、排水用の穴を開ける。
- c クリアケースの片方に、斜面となるアクリル板をアクリルボンドで接着し、水漏れ防止のため、アクリル板の接着部分をコーキングする。
- d 二つのクリアケースをアクリルボンドで接着する。
- e ペットボトルの上端を給水用の穴にセットする。

(ウ) 成果

子どもたちは校内の土を利用し、大変意欲的に何度も繰り返し実験を行うことができた。また、図8のように数種類の砂を活用することで、1時間の授業時間内で何層かに堆積の様子をより分かりやすく観察することができた。更に、流量の調節により、河口付近の堆積の様子と、沖合での堆積の様子も簡単に再現することができた。簡易型沈降実験装置も同様であるが、個人で実験器具を活用し実験・観察を行うことは、指導者が行う演示実験と比較して、子どもの興味・関心や概念形成のより効果的な高まりを期待できるものであると考える。

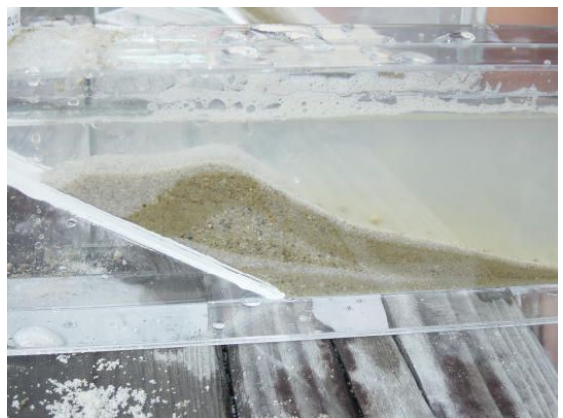


図8 簡易堆積実験装置による堆積の様子

(2) 評価の工夫

学習の事前調査として、コンセプトマップによる子どもの概念形成の把握を行ったが、単元の終末に事後調査することで概念形成やより多面的な見方や考え方の高まりを確認した。学習前後のコンセプトマップを子どもが比較することで、自己評価することも可能である。また、ノートは板書の記録だけではなく課題について自分で調べたことや、グループ議論の過程や結果をまとめることにより、問題や疑問を意識しながら学習を進め、課題を解決するための子ども

も自身の参考資料となるようにした。

表3 課題後のアンケートの内容

更に、授業ごとに子どもの学習意欲の高まりについて、各項目を数値化して評価することとし、表3のような課題後のアンケートを用意した。学習意欲の評価については、行動観察以外の部分で指導者が見取りにくい内容であるが、数値化したアンケートの結果分析から、より明確に評価ができた。これらの調査資料や授業での子どもの行動観察及びノート記録を、指導者が的確にとらえて評価しフィードバックすることで、子どもの関心・意欲の高まりや、より多面的で科学的な概念形成を期待したいと考えた。

理科 アンケート	月 日 ()
名前 ()	
今日の学習をふりかえろう!	
①不思議なことや調べてみたいことがありますか?	5 - 3 - 1
②進んで取り組みましたか?	5 - 3 - 1
③学習内容はよくわかりましたか?	5 - 3 - 1
ひとこと感想	
[]	

5 指導の実際

(1) 本時の目標 (第一次、第4時)

流水の働きで流された礫、砂、粘土などが、分けられて水底に積もることを堆積実験によって確かめることができる。

(2) 評価規準

評価の観点	「おおむね満足できる」(B)と判断される状況	「十分満足できる」(A)と判断される状況の具体例	「努力を要する」(C)と判断される子どもへの手だて
技能・表現③	堆積実験装置を使い、土の積もり方を調べることができる。	水量や投入する土を変えながら実験に取り組み、結果を地層のでき方を含めてまとめている。	カラーサンドを使った演示実験で堆積の様子をよりわかりやすく示す。

(3) 本時案

過程	学習活動	指導上の留意点	評価方法等
導入 5分	・地層の構成物や沈降実験について振り返る。		
展開 35分	流れる水の働きで積もる土の様子を観察しよう。		
	1 土が流されるとどのように堆積するか予想する。		
	2 堆積実験を行う。 ・指導者が準備した粒子の異なる物を混合した土を使用して、堆積の様子を観察する。	・堆積実験装置の扱い方について説明する。	技能・表現③ (行動観察)
	・土の割合や水量を変えな	・流す土の割合や水量などに着目	

	ながら、堆積の様子を観察する。 ・構成物によって沈む速さや流され方に違いがあることに気付く。 ・層を作りながら堆積する。 ・堆積実験の様子をワークシートに記録する。	きるよう助言する。 ・各層の構成物を観察させる。	使い堆積の様子を観察できているか記録する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> 技能・表現③ 〈ワークシート〉 </div> ・流水が土を分ける・運ぶ・積もらせることに着目し、堆積の様子を記録しているか分析する。
まとめ 5分	3 流水の働きによって運ばれた土は構成物によって分けられ、水底に堆積することを知る。	・実験の結果について質問する。 ・カラーサンドを使った演示実験で堆積の様子を確認させる。	
実験準備 参考資料	簡易堆積実験装置、ペットボトル、土、砂、カラーサンド、水槽、ワークシート		

6 成果と課題

(1) アンケート調査の結果

本単元の学習を終えて、子どもの学ぶことへの意欲の高まりを、事前と事後のアンケート調査の比較で考察していきたい。

まず、「化石について」のアンケート結果が図9であるが、学習前から子どもの興味・関心については他の項目に比べ高い傾向であったが、化石発掘体験を行うことで更に関心・意欲の高まりをみることができる。

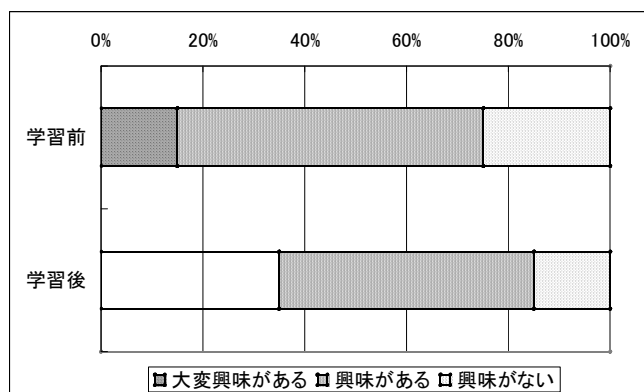


図9 化石についての興味・関心 (N=20)

実際に子どもの様子を見ていると、大変楽しそうに発掘体験を行うとともに、化石を発見したときの歓声や表情からはこれまでとは違う特別なものを感じ取ることができた。単元導入と

して発掘体験を取り入れたことで、この後の学習活動にも大変意欲的に取り組むことができたと考えている。

次に「地層に含まれる物について」の結果が図10である。学習前は「興味がない」と回答した子どもが過半数を占めているが、学習後にはその割合も減少している。化石を含め、堆積岩や各地の火山灰の観察、県内の名勝である屯鶴峯^{どんづるぼう}の凝灰岩の観察を行うことで、少なからず自分たちの足下にある大地の構成物に興味をもつことができたようである。特に二上山の火山活動とその後の地殻変動と浸食により現在の屯鶴峯があることについては驚き、興味・関心をもったようである。

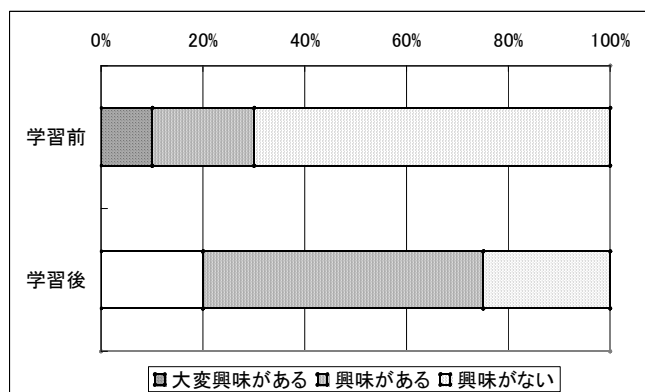


図10 地層に含まれる物についての興味・関心

更に「地層のでき方について」の結果が図11である。学習前は「興味がない」との回答がほとんどであり、授業展開の工夫が求められた。簡易型の沈降実験装置と堆積実験装置で一人一人が何度も自分が納得できるまで実験・観察を繰り返すことで、意欲的に活動を行う子どもの姿があった。また、堆積の様子も観察しやすく分かりやすいため、興味・関心のみではなく、子どもの確実な概念形成にも有効であったと考えている。

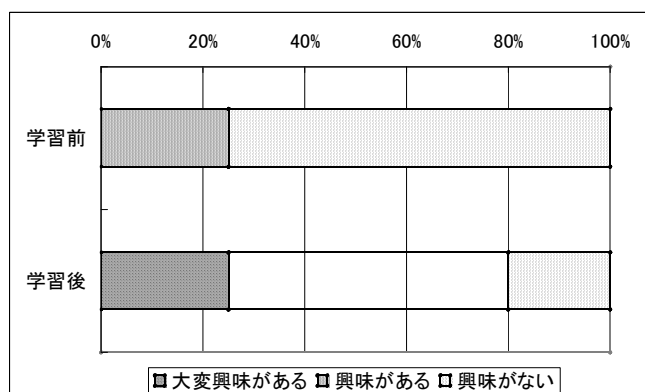


図11 地層のでき方についての興味・関心 (N=20)

(2) 課題後のアンケートの集計結果

表2で示した課題後のアンケートによる自己評価を計7回行った。「①不思議なことや調べてみたいことがありますか？」を興味・関心として、「②進んで取り組みましたか？」を学習意欲として、「③学習内容はよくわかりましたか？」を知識・理解

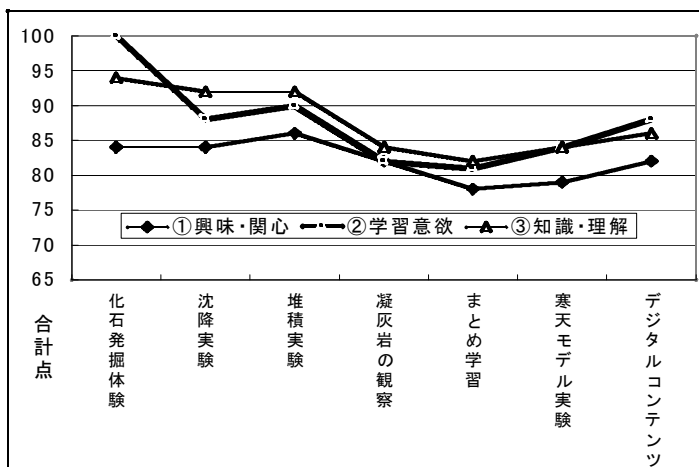


図12 課題後のアンケートの集計結果

として、数値化し集計することで評価の参考資料となるようにした。学級全体の集計結果が図12である。合計点の最大値が100であるので全体として高い数値で推移している結果となっている。子どもたちが本単元を通じて、関心・意欲を継続しながら学習に取り組んだことがうかがえる。特に、第2時の化石発掘体験や開発教材である第3時の沈降実験、第4時の堆積実験において、それぞれの観点で高い結果となっていることがわかる。更に、各項目の合計点を見

比べてみると、関心・意欲と知識・理解の合計点がほぼ同じように推移していることが分かる。関心・意欲の高まりが子どもの知識・理解も高めることにつながるということが明らかになった。

(3) コンセプトマップの結果

単元の終末で実施したコンセプトマップから、子どもの概念形成や多面的な見方や考え方の高まりも評価していきたい。A児の事前調査のコンセプトマップが図13である。地層やその構

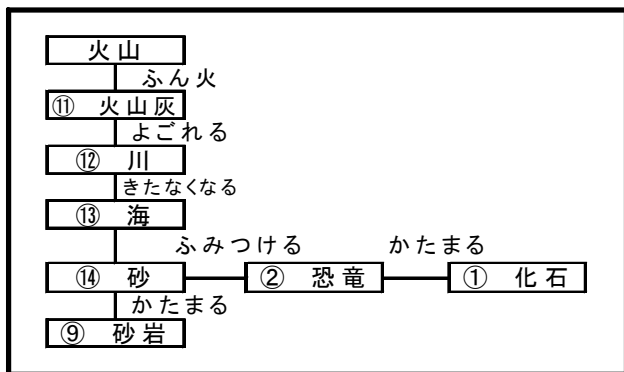


図13 A児のコンセプトマップ（事前調査）

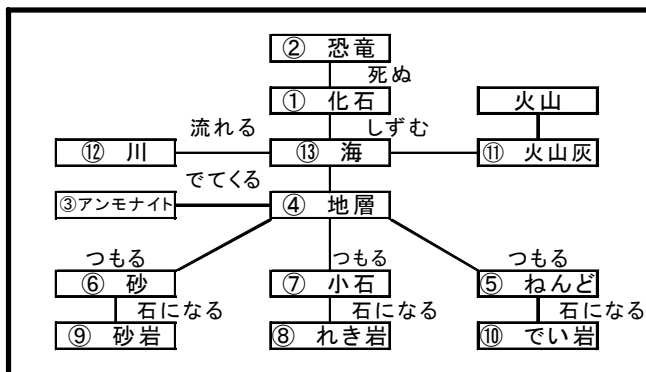


図14 A児のコンセプトマップ（事後調査）

成物のラベルは使用しておらず、その他のラベルのリンクからも大地の変化や土地の成り立ちが理解できているとは言えない。同じ子どもの事後調査のコンセプトマップが図14であるが、流れる水の働きに関係するラベルのリンクは不十分ではあるが、地層の構成物や地層が海で形成されることを理解したことを読み取ることができる。事前調査としてのコンセプトマップでは、図15のように地層のラベルと海のラベルをリンクしていた子どもは1名であったのに対して、事後のコンセプトマップでは半数がリンクすることができているとともに、すべての子どもが海のラベルを使用している。事後調査では地層と海とのリンクがない子どもも、何らかの形で地層が海底に堆積してできることを意識したコンセプトマップとなっており、流れる水のはたらきによって流された土砂が海底に堆積し、やがて地層が形成されるという概念を理解することができたと評価することができる。

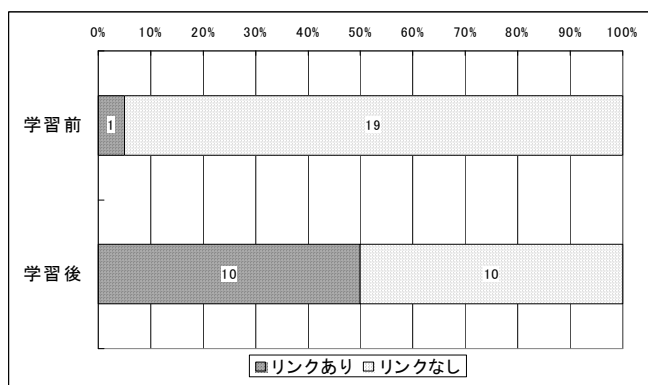


図15 「④地層」と「⑬海」のリンク状況（N=20）

(4) 今後の課題と展望

今回の教材を活用することで、子ども一人一人が大変意欲的に興味・関心をもって学習に取り組むことができたと感じるとともに、研究目標が達成されたのではないかと考えている。条件が許すのであれば、モデル実験だけでなく実際に露頭などの観察にも出かけていきたい。本単元での学習を基礎として、大地の変化や自然の営みに興味・関心をもって観察してくれることを期待し、今後とも、子どもがより学ぶことへの関心・意欲を高めることができる教材開発を行いたいと考えている。

第3節 体育

1 基本的な考え方

(1) 体育科における学ぶことへの関心・意欲を育てる指導の基本的な考え方

学習指導要領が改訂され、「小学校学習指導要領解説―体育編―」（平成11年5月発行）で改訂の要点の一つとして、「生涯にわたって運動やスポーツを豊かに実践していくことの基礎を培う観点を重視し、児童の発達の特性を考慮した運動に仲間と豊かにかかわりながら取り組むことによって、各種の運動に親しみ運動が好きになるようにすること。」とある。また、運動の学び方の重視の項目には、「自ら学び、自ら考える力を育成するために、各学年の各運動領域における内容を、技能の内容、態度の内容及び学び方の内容に整理統合して示すこととした。」とある。このことは、学び方を重視し、自ら考え、自ら学ぶ力の育成を目指すものであり、学ぶことへの関心・意欲を高めることにほかならない。

学習意欲とは、「学びたいとか、学ぼうという気持ち」であり、体育科における学習意欲とは、「できないことができるようになりたいとか、もっとうまくできるようになりたいという気持ち」である。そして、この学ぶ意欲の源になるのは、「知的好奇心」と「運動有能感」である。体育科における「知的好奇心」とは、いろいろな運動に興味をもち、興味をもった運動に果敢に挑戦していく気持ちである。また、もう一つの源である「運動有能感」とは、運動の上達や成功の体験から得られる“やればできる”という、運動に対する自信や自分に対する自信のことである。このような「知的好奇心」と「運動有能感」を維持させることができれば、継続的に学ぶことへの関心・意欲を高める指導につながる。

(2) 学ぶことへの関心・意欲を育てる指導方法の工夫

子どもの学ぶことへの関心・意欲を高めるためには、子どもの実態や能力に合った学習課題や学習内容を設定する必要がある。難しすぎる課題を与えたり、逆に簡単すぎる課題を与えたりしてしまうと学習に対する興味だけでなく、関心・意欲が失われる。加えて、子どもの興味や関心を高める教材や教具づくりが重要である。子どもにとって教材が面白くなかったり、興味がなければ学習意欲は湧いてこない。逆に子どもの興味や能力に合った学習課題や教材が計画されていれば、子どもたちは飽きることなく、意欲的に繰り返し課題に挑戦する。

また、体育の授業は、教室での授業と違って運動場や体育館などの広い空間を使って行われる。したがって、移動や集合、用具の準備等に予想外の時間を費やすことになる。これらの時間が多くなると、必然的に学習（運動）する時間が減少する。子どもの精一杯運動したいという気持ちを満たし、どの子どもにも充実感や達成感を味わわせ、関心・意欲を高める指導を行うには以下のことに留意する必要がある。

ア 約束事を決める

用具の準備、準備運動、整理運動、後片付け、集合、整列などの基本的な活動については、子どもとの間で約束事を決めておく。ただ、むやみに多くの約束事を決めないで、必要なものに絞って徹底することが大切である。また、約束事を教員の権威で維持しようとしても子どもの意欲にはつながらない。約束事が何を意味するのかをはっきりさせ、なぜそれを用いるのかを事前に説明し、理解させておく必要がある。

イ 施設・用具（教具）の工夫

授業で活用する施設や用具は、授業そのものを成立させたり、関心・意欲を高めたりする指導に重要である。特に、目標となる運動や技の習得に向けたスモール・ステップ的な下位教材づく

りの中で教具の工夫が重要になってくる。ただし、注意しなければいけないことは、子どもの発達段階や学習内容に合致していなければ、子どもの学習意欲にマイナスに働く場合もある。また、数量についても学習段階や学習過程、学習内容と関連させながら適切な数量を準備する必要がある。

ウ 学習資料の活用

学習カードなどの学習資料は、子どもが円滑に学習を進めることを助けるものであり、意欲的な学習を促す重要な情報源である。その活用については、使用方法や活用の仕方を確実に伝え、理解させることが必要である。そうすることにより、学習をより活発にし、関心・意欲をもって学習内容を深めていくことができる。

また、デジタルカメラやデジタルビデオなどのビジュアル機器を活用することによって、子どもたちの興味・関心を高めるとともに、視覚的に技術ポイントの確認をさせたり学習内容をフィードバックさせたりすることができる。

エ グルーピングの工夫

体育の授業では、グループで活動することが多い。そのなかで子どもたちは教え合ったり、励まし合ったりしながら学習を深めていく。もし、グループの人間関係が悪かったり、はじめから勝敗の結果が予想されるグループであったりすると学習意欲は高まらず、逆に低下してしまう。学級の間関係や授業のねらい、運動の特性や施設・用具の数量など様々な角度から考察し、慎重にグループづくりを行う必要がある。また、グループの中で一人一人が機能するようにすべてのメンバーに何らかの役割を設定することが望ましい。

(3) 学ぶことへの関心・意欲を育てる教材づくり

体育の授業で使われる「教材」の意味は実に多様である。ボールゲームで使用するボールや縄跳びの縄を「教材」と呼ぶ場合もあれば、サッカーやバレーボールなどの運動種目や器械運動の技を「教材」と呼ぶ場合もある。ここでは、運動種目や器械運動の技などの学習内容を子どもに分かりやすく伝えるためのものを「教材」と呼ぶことにする。

教材づくりに欠かせないのは、子どもの運動技能の実態を適切に把握することである。そのことは、運動種目などのルールや進め方を簡素化したり、個に応じた学習活動の機会を均等に保障したりすることにつながる。また、学習課題を細分化し、簡単なものから次第に難しいものにつながる下位教材を提示することや、動作の類似性を重視して、系統立てた学習が成立するように工夫する必要がある。

子どもの運動技能の実態把握に続いて大切なことは、子どもに学習課題をどれだけ平易に伝えられるかである。体育の授業では、様々な運動技能習得段階の子どもが一斉に同一の学習課題に取り組むので、どのようにすればその運動や技が習得できるようになるのかを分かりやすくする教材を工夫する必要がある。

(4) 学ぶことへの関心・意欲を育てる評価の在り方

体育の授業は、運動することの好き嫌いや、上手、下手に関係なく、自分の姿を教員や友達の眼差しの中に晒さなければならぬ時間と空間である。どのような力をもった子どもも、授業には今もっている力でしか参加できない。だからこそ、一人一人が最大限に生かされ、子どもの中に自己肯定感や有能感（自信）が広がり、学ぶ関心や意欲を芽生えさせる評価でなくてはならない。そのためには、学ぶことに対する有能感と学ぶことのおもしろさや楽しさが感じられる評価でなければならない。それらが感じられると「知的好奇心」や「運動有能感」が活性化する。

よくできた（成功した）という「肯定的な評価」は、一般に有能感を高める。一方、よくできなかった（失敗した）という「否定的な評価」は、有能感を下げたり、無能感を植え付けてしまったりする。たとえ最終的に課題の達成に失敗しても、その学習過程を細かく分析し、点検することによって、できなかった（失敗した）と否定的な最終評価を行うのではなく、できた（成功した）ところまで認めて評価する。特に体育などの実技を併う教科においては、「肯定的な評価」を行うことによって、子どもが有能感を感じ、学ぶことに対する関心・意欲も高まる。

参考・引用文献

- | | | |
|-----------|----------|------|
| (1) 指導と評価 | 日本図書文化協会 | 2004 |
| (2) 体育科教育 | 大修館書店 | 2005 |

2 事例 第6学年「器械運動」(トライ・トライ・マット運動)

(1) 単元の構想

ア 児童の実態

本学級の児童(27人)は、比較的体を動かすことが好きで、休み時間はほとんど屋外に出て遊んでいることが多い。しかし、遊びの種類は広がり乏しく、男子がサッカー、女子はドッジボールというようにボール遊びが中心である。また、男子と女子と一緒に遊ぶ姿はほとんど見られない。一方、放課後や休日には野球、サッカー、スイミング、タグラグビー、卓球、体操教室、ダンス教室、学習塾、音楽教室など様々な習い事に励んでおり、大変忙しい日々を送っている。器械運動の学習をスタートするに当たり、マット運動・とび箱運動のどちらで学習を進めていこうか迷った。そこで、最初に器械運動についての児童の意識を知るためにアンケート調査を行った(表1)。「器械運動が好きですか」という質問に対して表1の結果のように「好き」という児童が少なく「どちらでもない・嫌い」という児童が多かった。「好き」な理由としては、「以前に器械体操をやっていた。今もやっているから」「体を動かすことが好きだから」という答えがあった。また、器械運動は好きではないが、とび箱は「好き」と答えた児童が4人いた。その理由としては、「高い段をとべたから」「得意だから」「できた時に気持ちがいいから」などの答えがあった。マット運動については、「好き」と答えた児童はいなかった。反対に「どうして器械運動が嫌いですか」という質問に対しては、とび箱では「技がうまくできないから」「縦をとぶのがこわいから」、マット運動では「ほとんどの技ができないから」「苦手」などの答えがあった。これらのことから、とび箱運動よりもマット運動のほうが児童の意欲としては低いように感じられた。

表1 授業前の児童の意識調査結果①(複数回答)

	器械運動	とび箱運動	マット運動
好き	3人	4人	0人
どちらでもない	17人	0人	4人
嫌い	1人	2人	2人

表2 マット運動で知っている技と今の出来具合

	知っている	○	△	×
前転	26人	26人	0人	0人
後転	24人	18人	4人	2人
倒立	17人	2人	11人	4人
倒立前転	2人	2人	0人	0人
側方倒立回転	9人	4人	2人	3人
開脚前転	7人	6人	1人	0人
開脚後転	4人	2人	0人	2人
とび前転	1人	1人	0人	0人
前方宙返り	1人	0人	0人	1人
後方宙返り	2人	0人	0人	2人
両足てんかい	2人	1人	0人	1人
ブリッジ	2人	2人	0人	0人
ロンダート	2人	2人	0人	0人
倒立ブリッジ	1人	1人	0人	0人

○できる △まあまあできる ×できない

表3 マット運動に対する児童の意識(授業前)

	マット運動
好き	3人
どちらでもない	11人
嫌い	13人

次の段階として児童が今、どんな技が実際にできるかを知るために技調べを行った。「マット運動で知っている技を書きましょう」という質問に対して、容易にできる技から難易度の高い技まで非常にたくさんのマット運動の技の名前が出てきていた(表2)。しかし、実際にマット運動を行ってみると「前転」についてはほぼ全員ができた。一方、「後転」は名前は全員が知っており、「できる」と答えた児童も多くいたが、実際に行ってみると、腕で支えて回転できる児童が非常

に少なかった。「開脚前転」については初めて名前を聞いたという児童が非常に多かった。「倒立」は補助有りのできる児童が16人、そのうち「壁倒立」ができる児童が10人、恐怖心からできなかった児童が4人いた。たくさんのマット運動の名前が出てきたのは、器械体操を以前に習っていたり今も習っている児童がいたためだと考えられる。その後もう一度、マット運動だけに絞ってアンケート調査を行った(表3)。「マット運動についてどう思っていますか」という質問に対して3人の児童が「好き」と答え、11人の児童が「どちらでもない」と答え、13人の児童が「嫌い」と答えた。アンケートや技調べの結果から、マット運動に対する知識は豊かであっても経験不足により学習意欲の低さを引き起こしていると感じられた。これらを踏まえ、本研究主題である「学ぶことへの関心・意欲を高める指導」に迫るためにも、マット運動の学習を取り上げ進めていくことにした。

イ 単元の特性

マット運動を含む器械運動は、様々な器械の条件に規定されて生み出された「技」に挑戦し、これを達成したときに喜びや楽しさを味わうことのできる個人的な運動である。「できる・できない」がはっきりしており、「できる」ようになれば楽しさを味わうことができるが、努力しても「できない」と嫌になってしまう。このような意味で、器械運動の学習指導では、すべての児童が「できる」ようになることに対して特別に配慮が必要である。

しかし、技が「できる・できない」は個人の意欲や技能レベルと大きく関係するので、特定の一つの技を目標として設定し、これをクラス全員の共通課題として学習させる方法では、すべての児童に「できる」喜びを味わわせる可能性は低い。すべての児童に器械運動の楽しさを味わわせるためには、個々の児童の技能に応じた目標の技を選択させ、個人のペースで学習させる必要がある。

ところが、個々の児童の能力や関心によって目標の技(課題)を自由に選択させると、系統的な学習の発展が望めず、また授業としてのまとまりがつきにくい。このような問題を解決するためには、指導者が特定の学年で最も学習価値の高い「発展性のある技群」を選択して、この枠内で児童に学習すべき技を選択させることや、個々の児童が技能に応じて系統的に学習していくことのできるような学習課題(下位教材)、学習の方法、学習の場を準備することが必要になる。更に、実際の学習場面では、児童が実施する運動をよく観察し、どのような基礎的な技であれば習得できるのかを見極めて、技を選択させたり、場を工夫させたり、更に有効な指導助言を与えたりすることも必要となってくる。

ウ 改善の視点

本単元の学習では児童の実態を踏まえ、系統的・段階的学習を大切にしていきたい。マット運動を含む器械運動は多くの技から成り立っているが、それらの技はバラバラに存在するのではなく、運動形態が類似する基礎技、関連技、発展技などの群や系にまとめることができる。そこで指導者が技の発展性が豊かな技群や系を取り上げ、それらの系統に即して、単純な技(やさしい)から複雑な技(難しい)へと段階的に学習できるようにしたい。また、一つの技の学習についても「スモールステップ」の課題(下位教材)を大切にしたい。

学習の初めの段階でつまづかせないために、マット運動に必要な基礎的・基本的な運動感覚が養える体ほぐしの内容も取り入れ、できるだけ細かなステップの課題を用意しながら、毎時間わずかであっても進歩していくことが感じられるような学習を展開したいと考えた。また、場の設定や技自体の課題を部分的に変化させたり、集団化なども利用したりすることにした。このよう

にバリエーションのある課題達成の楽しさを味わわせることで、児童のマット運動に対する学習意欲を高めると同時に、運動の習熟を図ることをねらいとした。

(2) 単元の目標と評価規準

ア 単元の目標

- (ア) 友達と協力し合って運動し、意欲的に学習に取り組むことができる。(関心・意欲・態度)
- (イ) 自分の力に合った課題をもち、その解決を目指して練習の場や練習の方法を工夫することができる。(思考・判断)
- (ウ) 今できる技や新しい技に取り組み、できるようになったら、その技も加えて繰り返したり、組み合わせたりすることができる。(技能)

イ 単元の評価規準と方法

関心	a 友達と協力して運動をしようとする。(観察・学習カード)
意欲	b 運動に進んで取り組もうとする。(観察)
態度	c 約束を守り、安全に気を付けて運動に取り組もうとする。(観察)
思考	a 自分に合った課題を持っている。(観察・学習カード)
判断	b 課題解決に向けて練習の仕方を工夫している。(観察・学習カード)
技能	a 自分の技能に応じた技に取り組み、ある程度正確にできる。(観察)
	b 今持っている力でできる技を繰り返したり、組み合わせたりすることができる。(観察)

(3) 指導と評価の計画

ア 基本的な考え方

器械運動の楽しさを味わわせ、個に応じた学習を進めようとする意図から、児童による課題選択や各自の学習目標にしたがって学習を進めていく「めあて学習」が提唱されている。めあて学習の基本的な学習の道筋としては、「今できる技で楽しむこと」(めあて1)と「できそうな技に挑戦して楽しむこと」(めあて2)の二つの課題を位置付け、各授業時間にこれを螺旋的・発展的に学習させようとするもので“「スパイラル型」の学習”モデルと呼ばれている。本単元の学習も基本的にはこのスパイラル型の学習形態を進めていくことにした。そして「今できる技で楽しむこと」(めあて1)の学習の中に、少しでもマット運動の学習に意欲をもたせたいという思いから、集団でマット運動を行うシンクロマットを取り入れることにした。更に、児童は今までに「めあて学習」という学習形態をあまり経験したことのない様子であったため、毎時間「めあて」を学習カードに盛り込ませるようにした。

場の設定についても「めあて1」と「めあて2」の学習時で練習する場の設定を変えて学習を進めていくようにした。マット運動に対して、経験不足による学習意欲の低さということを感じていたため、こちらからどんどん学習課題を与え、指導者主体で学習を進めていく形態の指導計画を組んだ。

イ 指導と評価の計画と概要

時	1	2	3	4	5	6
学習過程	学習の見通しをもち自分のできる技を調べる					
主な活動	器械・器具の準備をする					
	準備運動（マット運動の感覚づくりの運動）をする					
	学習の進め方を知る	・今できる技で、友達と一緒に回ったり、合わせて回ったりする（めあて1）				
	今できる技調べをする	・少し努力すればできそうな技に挑戦する（めあて2）				
	後片付け					
学習のまとめ						
評価	意 b c	意 a b c 思 a	意 a 思 b 技 a	意 a 思 b 技 a	思 a b 技 a b	思 a b 技 a b

※意 a は前ページの評価規準における関心・意欲・態度の a を表す。以下同様に表す。

(4) 学ぶことに関心・意欲を高めるための指導と評価の工夫

ア 自己評価のねらい

本単元の学習の進め方は、先にも述べたように、児童による課題選択や各自の学習目標にしたがって学習を進めていく「めあて学習」であり、「今できる技で楽しむこと」（めあて1）と「できそうな技に挑戦して楽しむこと」（めあて2）の二つの課題を位置付け、各授業時間にこれを螺旋的・発展的に学習させようとする「スパイラル型」の学習である。そこで、毎時間学習カードを用意し、その時間の「めあて」がどれくらい達成できたか、またどれくらい意欲をもって学習に取り組めたかをカードに記入させ、次時の学習にもつなげられるよう毎時間自己評価をさせた。そのことにより、児童自身のマット運動に対する意識も高まると考えた（図1）。

マット運動学習カード ①

名前 ()

めあて **約束を守り、いろんな前転をやって楽しもう**

○ 今日のめあてがどれだけ達成できましたか。あてはまるところを○でかこみましょう。

よくできた ふつう できなかった

--	--	--

○ 今日の学習を終えて感じたことを書きましょう。

マット運動学習カード ②

名前 ()

めあて 回転技をシンクロさせて楽しもう。
いろんな場所で、自分の「できそうだ」と思う技の獲得に取り組もう。

○ 今日のめあてがどれだけ達成できましたか。あてはまるところを○でかこみましょう。

よくできた ふつう できなかった

--	--	--

○ あなたがチャレンジした技を書きましょう。

○ あなたはどこの場所で、どう練習をして、今日どんなことができるようになりましたか。

○ 学習を終えて感じたことを書きましょう。

マット運動学習カード ⑤

名前 ()

めあて 回転技をシンクロさせて楽しもう。
いろんな場所で、いろんな練習方法で「できた」をいっぱいゲットしよう。

○ 今日のめあてがどれだけ達成できましたか。あてはまるところを○でかこみましょう。

よくできた ふつう できなかった

--	--	--

○ あなたがチャレンジした技を書きましょう。

○ あなたはどこの場所で、どう練習をして、今日どんな「できた」をゲットすることができましたか。

○ 学習を終えて感じたことを書きましょう。

マット運動学習カード ⑥

名前 ()

めあて いろんな場所で、いろんな練習方法で「できた」をいっぱいゲットしよう。

○ 今日のめあてがどれだけ達成できましたか。あてはまるところを○でかこみましょう。

よくできた ふつう できなかった

--	--	--

○ あなたがチャレンジした技を書きましょう。

○ あなたはどこの場所で、どう練習をして、今日どんな「できた」をゲットすることができましたか。

○ 学習を終えて感じたことを書きましょう。

図1 学習カード①

イ 指導と評価

(7) 授業の形態

「今できる技で楽しむこと」(めあて1)の学習では、男女混合のグループで毎時間学習を進めていくことにした。なお、グループの編成については、この学習に入る少し前に修学旅行に行っていることもあり、その行動班のグループとした。その理由は、男女共にお互い気の合う者同士のグループであるためである。普段の児童の様子からは、グループでの活動になると、ある一人の主張が強く、話合いがうまく進まなかったり、気の合わない友達とはうまく協力できなかったりするなど、なかなかスムーズにいかないことがよくあった。本授業では、この種のトラブルを少なくし、できるだけ学習に集中できるようにという願いからこのような編成とした。5グループが、それぞれ設定された五つの場で毎時間ローテーションをして学習を進めていくようにした。

「できそうな技に挑戦して楽しむこと」(めあて2)の学習では、児童の実態により、開脚前転、とび前転、後転、開脚後転、伸膝後転、倒立、側方倒立回転、前方倒立回転とびを挑戦する技とした。「めあて2」の学習では、「めあて1」の学習のグループを解体して、各自が挑戦したい技をその技の練習に適した場で練習していくようにした。

(4) 場の設定

「めあて1」の学習では「マット運動を楽しむ」観点から単にマットをまっすぐに並べるのではなく、長く並べたり、方形に並べたり、十字型にマットを置いたりして、児童の意欲を高めるための工夫を行った(図2)。「めあて2」の学習では「めあて1」の場とはがらりと変えて、児童が自分の課題に挑戦できるような場に変化させるようにした(図3)。運動量を確保するために、その準備をできるだけ短時間にスムーズに行えるようにしなければならないと考え、ホワイトボードにその図を示し、毎時間掲示するようにした。

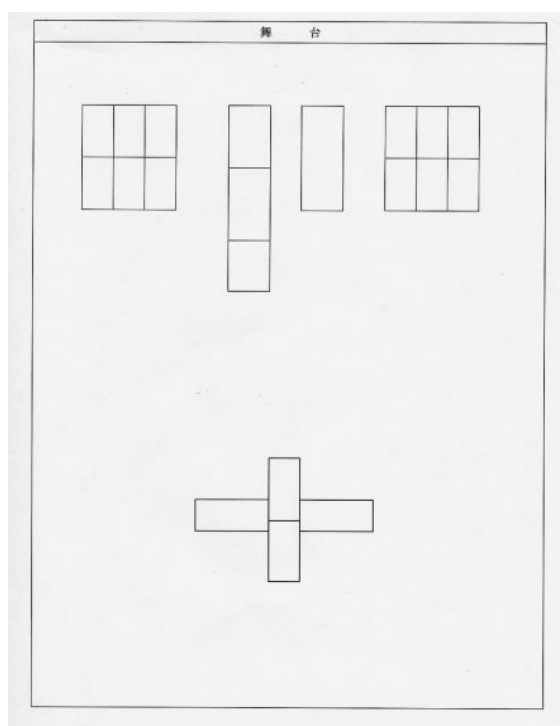


図2 めあて1の場

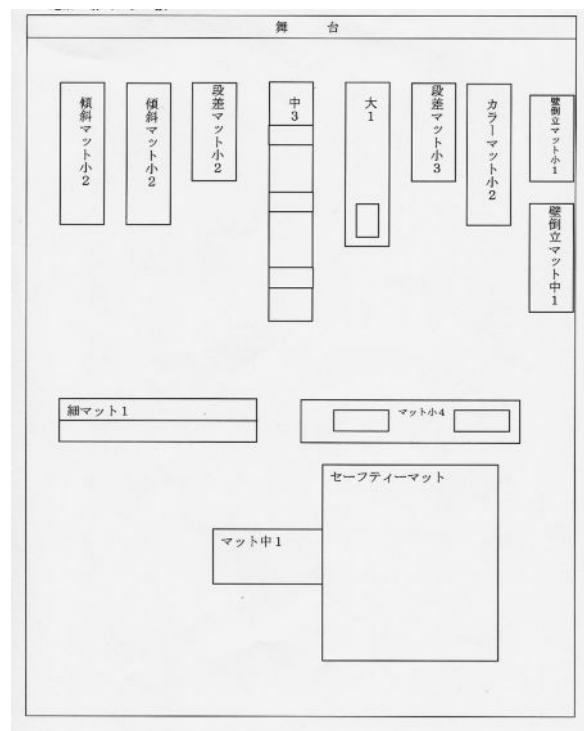


図3 めあて2の場

(ウ) 集団マット運動とスモールステップ

「めあて1」の学習では「めあて2」の学習の技につながるスモールステップ（かえるの足打ち、背・肩倒立からの開脚前転など）を提示し、準備運動もかねて行わせるようにした。また、マット運動への関心を少しでも高めるために動きをシンクロさせて楽しむ集団でのマット運動を活用した。

(I) 技のワンポイントアドバイス

「めあて2」では、それぞれが自分の挑戦する技に取り組んでいくため、その技でつまずきそうなところやそれに対してのアドバイスと練習方法、練習の場を示した学習資料（図5）を作成し、児童に持たせた。そして、特定の一つの技をできるようになることを目指すのではなく、個々の児童の技能に応じた目標の技を選択させ、個人のペースで学習させていくようにした。選択した技ができるようになるまでの様々な要素を示した学習カード

（図4）を提示し、それをできるだけ多く獲得させて（「できた」をゲットする）毎時間少しでも自分が進歩していることが実感できるように学習を進めた。

どんな「できた」をゲットすることができたかな

名前 ()
できた〇 もう少し△

技	「できた」のポイント	
開きやく前転	段差マットで開きやく後、手で支えて立つことができたようになった。	
	坂マットで開きやく後、手で支えて立つことができたようになった。	
	マットで開きやく後、手で支えて立つことができたようになった。	
	坂マットでひざをのぼして回転ができたようになった。	
	マットでひざをのぼして回転ができたようになった。	
とび前転	とび箱をとびこえて、前転ができたようになった。	
	とび箱の上から前転ができたようになった。	
	とび箱の上から少しジャンプして前転ができたようになった。	
	マットで少し速くに手をつけて前転ができたようになった。	
後転	回転が途中で止まらず、スムーズに回転ができたようになった。	
	後転をしてひざで立てるようになった。	
	後転をして足裏で立つことができたようになった。	
開きやく後転	後転ができたようになった。	
	坂マットでひざをのぼして回転ができたようになった。	
	マットでひざをのぼして回転ができたようになった。	
	坂マットで開きやく後、立てるようになった。	
	段差マットで開きやく後、立てるようになった。	
	マットで開きやく後、立てるようになった。	
	マットで開きやく後転ができたようになった。	
坂マットでしんしつ後転ができたようになった。		
開きやく後転	マットでしんしつ後転ができたようになった。	
	かえるの足打ちが三回できるようになった。	
	壁の上じ登り倒立ができたようになった。	
	セーフティーマットに倒立をして倒れ込めるようになった。	
	壁倒立ができたようになった。	
	とび箱を手で支え、こしを上げてとび越すことができたようになった。	
	手を曲げず前方倒立回転とび（地転）ができたようになった。	
マットで倒立ができたようになった。		
マットで側方倒立回転ができたようになった。		
セーフティーマットで前方倒立回転とび（地転）ができたようになった。		

図4 学習カード②

開きやく前転に挑戦!

ワンポイントアドバイス

つまずき	アドバイス	練習方法・練習の場
開脚後うまく立てない	「手と足を同時にここう」 「おしりの下に手をつこう」 「手を見てマットを押そう」 「前転をする時足しっかり床をけるう」	背倒立からの開脚前転 傾斜マットでの開脚前転
ひざが曲がる	「ひざに力を入れよう」 「足のつま先を上に向けよう」 「足をばっと広げよう」	傾斜マットでの開脚前転 綿マット小マットでの開脚前転

とび前転に挑戦!

ワンポイントアドバイス

つまずき	アドバイス	練習方法・練習の場
手をついた後うまく回転できない	「つま先でしっかりけろう」 「足をしっかりふりあげよう」 「あごをしめてやろう」	大また歩きから少し速くに手をつけて前転 前後開脚から前転 とび箱から前転
前転後背中を打つ	「手で支えてから前転しよう」 「あごをしめてやろう」	前後開脚でとび箱から前転 とび箱から前転

図5 学習資料

(5) 指導の実際

ア 本時のねらい

(ア) 回転系の技を仲間と一緒に連続させたり、組み合わせたりしてマット運動を楽しむ。

(イ) 練習の場、方法を選び、自分の技能の程度に応じた技の練習に取り組む。

イ 展開（第4時）

学習活動	指導と評価（指導・支援○ 評価☆）	資料・用具
<p>1 集合し準備をする。</p> <p>2 準備運動をする。</p> <p>3 前時に引き続き回転系の技を友達と連続させたり、組み合わせたりしてマット運動をする。 （めあて1）</p> <p>4 自分ができそうな技に挑戦する。 （めあて2）</p> <p>5 後片付け</p>	<p>○ マット運動の感覚づくりの運動をし、体や心をほぐさせる。 （ストレッチ・ゆりかご・かえるの足打ち・背倒立）</p> <p>○ 集団で行える回転系のいろいろな技を行わせる。 （五つの場で毎時間ローテーションをして行う）</p> <p>☆ 友達と動きを合わせて楽しんで取り組んでいるか。 （意 a）</p> <p>○ 前時に引き続き、自分の技能の程度に合った技に挑戦させる。 （開脚前転・とび前転・開脚後転・伸膝後転・側方倒立回転・前方倒立回転とび）</p> <p>☆ 練習の場、方法を選んで自分ができそうな技に取り組んでいるか。 （思 b）（技 a）</p>	<p>MDデッキ</p>
<p>6 学習のまとめ</p>	<p>○ 学習カードに記入させる。</p>	<p>学習カード</p>

ウ 授業の様子



図6 ゆりかご



図7 背倒立



図8 集団マット



図9 傾斜マットを使って



図10 とび前転



図11 側方倒立回転

(6) 成果と課題

ア アンケート結果より

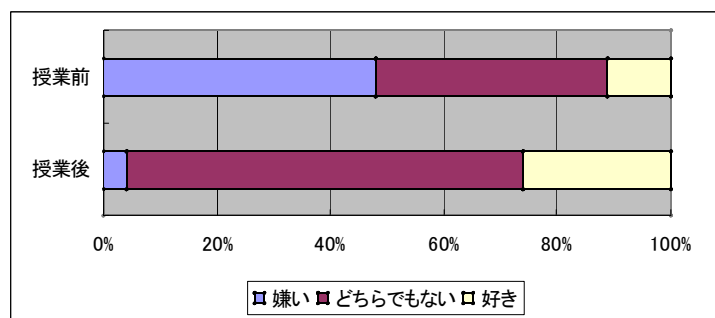
授業に入る前のアンケート調査では、マット運動に対して「好き」と答えた児童は少なく、「嫌い」と答えた児童が多かった。本単元の授業を終えてのアンケート調査では「好き」「どちらでもない」と答えた児童が増え、「嫌い」と答えた児童が減っている（表4）。

「めあて学習」を中心に、技のスマールステップを大切に、集団で行うマット運動を取り入れたり、更にいろいろな練習の場を設定したりしたこと、そして何よりも自分で課題を選択し、その達成を目指して毎時間学習していく形態が、児童にとっては今までにないマット運動の学習につながったのではないかと考える。また、「一つの技ができるようにならないといけない」という評価の方法ではなく、「技ができるようになるまでの様々な要素をできるかぎりたくさん獲得しよう、それが技の完成につながるよ」と声をかけて評価を行ったことで、一つの技が完全にできなくても前向きに学習に取り組めたのではないかと考える。このような授業を進めたことによって、児童の

表4 マット運動に対する児童の意識 ①

	授業前	授業後
好 き	3人	7人
どちらでもない	11人	19人
嫌 い	13人	1人

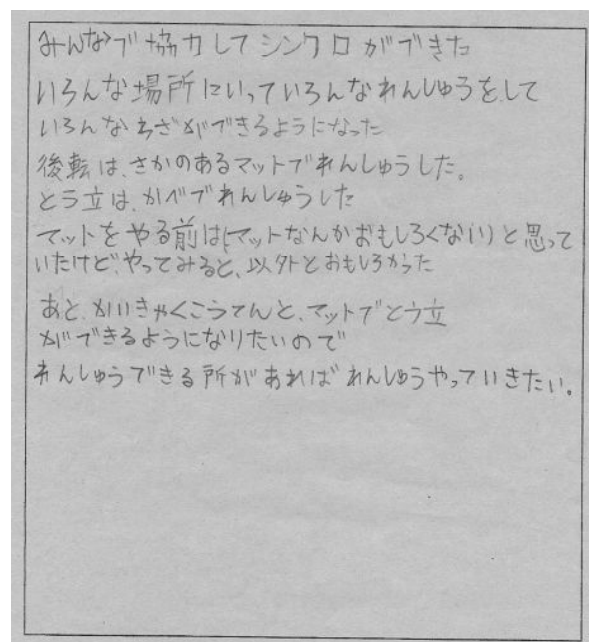
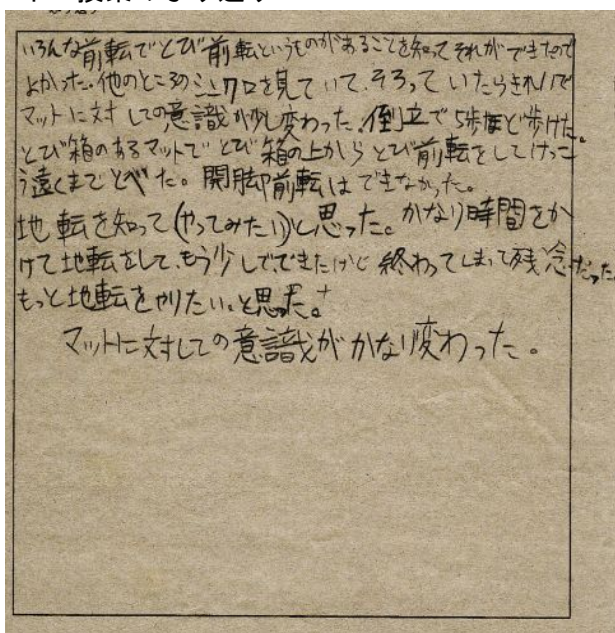
表5 マット運動に対する児童の意識 ②



児童にとっては今までにないマット運動の学習につながったのではないかと考える。また、「一つの技ができるようにならないといけない」という評価の方法ではなく、「技ができるようになるまでの様々な要素をできるかぎりたくさん獲得しよう、それが技の完成につながるよ」と声をかけて評価を行ったことで、一つの技が完全にできなくても前向きに学習に取り組めたのではないかと考える。このような授業を進めたことによって、児童の

マット運動に対する意識が大きく変わり、学習意欲が高まったように感じた。

イ 授業の振り返り



ウ 児童の様子から

本単元の最初の段階では、みんなでうまく協力ができず、マットを用意するなどの学習の準備や後片付けに大変時間がかかった。ホワイトボードを使ってどのマットをどこの場所へ移動させるのかを示したことにより、学習を重ねるごとに短時間でスムーズに用意ができるようになった。それは、マット運動の学習を早くやりたいという意欲が高まったためだと考えられる。

集団で行うマット運動では、最初はこちらからそれぞれの場に合った動きを与えた。しかし、お互いに技を見せ合う中でグループで相談をし、自分たちで動きを考え出していくことができるようになった。気の合う者同士で組んだグループではあったが、男女がうまく話し合いをし、活動していく姿は今までにあまり見られなかった光景である。

今後の課題としては、「マット運動（器械運動）に興味をもたせたい」「マット運動もやってみれば楽しいんだ」との思いを感じさせたいというところからのスタートであったため、「マット運動が得意」という児童の学習に対しての関心・意欲は低かったのではないかと感じている。しかし、授業の中でマット運動が得意な子どもは、うまくできない子どもにアドバイスをするなどの姿がよく見られた。マット運動を含む器械運動は、個人の能力の差も大きく一斉に授業を進めていくことは非常に難しい。今後は器械運動が得意な児童も、そうでない児童も意欲をもって取り組む授業を工夫していきたい。

参考・引用文献

- (1) 新小学校指導要領実践小学校体育⑦図解・実践 体づくり運動・器械運動
藤崎敬・後藤一彦 東洋館出版 2000年
- (2) 器械運動の授業づくり 高橋健夫・三木四郎・長野淳次郎・三上肇 大修館書店 1992年

第4節 音楽

1 基本的な考え方（音楽科における学ぶことへの関心・意欲を高める指導の実際）

(1) 自ら学び自ら考える力を育てる指導について

現行の学習指導要領による教育課程が完全実施されて4年が過ぎた。この間、県内の学校においては、これまでの音楽教育の成果を踏まえつつ、「指導と評価の一体化」、「確かな学力を育てる指導方法の工夫」等、様々な研究が行われてきた。

従前から音楽科では、発声の仕方や楽器の奏法、読譜といったことに重点を置いた指導、どちらかというと教師主導型で子どもたちに技能や知識を習得させていくというスタイルの指導が多かった。もちろん技能や知識を子どもたちに習得させていくことは大切であり、必要なことであるが、これらのことを大切にするあまり、授業の主たる目的が「楽曲の完成」であったり、「演奏の出来映え」といったことに重きが置かれがちであったりしたことは否めない。

例えば、子どもたちに「今日は音楽の時間でどんなことを習ったの？」と尋ねると、多くの子どもたちは教材曲の名前を答えることが多い。つまり、自分が獲得した学習内容を答えるのではなく、楽曲名を答えるのである。子どもたちが主体的に音楽にかかわり、「今日の授業でこんな新しい発見があった」、「自分でこんな工夫をしたんだ」、「今日の授業でいろいろなことを考えたよ」と言えるような指導をしていくことが必要である。

ことに小学校の段階では、子どもたちが、音楽の諸要素と関連付けながらイメージをふくらませたり、感情を自分の言葉で語ったり、自分なりに表現の工夫を行ったり、音楽を聴き取ったりできる力を身に付けられるようにすることが大切である。

(2) 学ぶことへの関心・意欲を高める指導の工夫

ア 学びを明確にした授業

音楽科は子どもたちにとって大好きな教科の一つである。子どもたちが音楽が好きであるということは、すなわち、子どもたちにとって音楽が楽しいということである。

しかし、「楽しい」ということは、単にゲーム感覚で授業が受けられるということや、自分の好きなことができるからということではない。もし、そうであれば子どもたちはそういった授業に何の魅力も感じず、むしろ飽きてしまい、無味乾燥な授業として捉えてしまう。子どもたちが音楽の授業を楽しんでいるのは、音楽を通して自分のもっている資質や能力を十分に発揮できること、自分の資質や能力を伸ばし、高めていくことが実感できるからにほかならない。既成の楽曲を再表現することの多い「歌唱」や「器楽」においては、教員が「このように歌いなさい」、「このように演奏しなさい」という授業になりやすい。最初はこのような授業から出発したとしても、次の段階として、音楽をどのように表現したいのか、音楽をどのように表現しようかと子どもに考えさせる授業、つまり、子どもの思考力や判断力、感じ取る力をはぐくむ授業づくりを考えなければ子どもたちの関心・意欲を高めることは難しい。

その他、教員の恣意的な判断や好みなどで音楽のジャンルや音楽活動の分野を限定的に教えたり、逆に子どもたちの好みに合わせた授業に走ってしまったりするようなことは避けるべきである。

イ 授業形態の工夫改善

音楽の授業では、「一斉」、「小集団（グループ）」、「個」の三つの学習形態が自然に展開されていることが多い。

しかし、教育的な観点からこれらの学習形態を意図的に組織していない授業も見受けられる

ことがある。子どもの学習状況に応じて学習は集団で行われることが多く、音楽の学習活動は子どもの社会性をはぐくむ契機ともなりうる。このような音楽科の特性を生かして、子どもの個性と社会性の育成を考えた学習形態も考えられる。

ことにこれらの学習形態を組織していく際に、友達関係等を十分配慮して、小集団による活動を考えたい。小集団で活動する教育的意義・機能の主なものを3点を次に挙げる。

- ① 全員が参加し発言しなければならない状況がえられる。
- ② 全員が本音など率直な意見や思いを出し合い、かかわり合う場が作られる。
- ③ 「わからない」、「待って」といった学習要求が出しやすくなる。

このような小集団の機能は、教員がリーダー育成や子どもの主体的・自治的な意識を育てることによって生まれてくる。

ウ 見通しをもった計画

音楽科の年間授業時数は、低学年70時間、中学年60時間、高学年50時間と学年が上がるにつれ減少するピラミッド型になっている。このことは、取りも直さず低学年から見通しをもって計画的に学習内容を積み重ねていく重要性を示している。

しかし、音楽の授業は、学習指導要領に記載されている内容を、それぞれの教員が目の前にいる子どもたちの実態や学習状況に照らし合わせて題材を設定し、教材を選択したり教材の開発を行ったりしなければならないという難しさがあり、そのためには膨大な時間と手間がかかる。

しかし、だからこそ計画的、組織的な学習指導計画の立案が重要となってくる。言い換えれば、低・中・高学年それぞれ2学年でのカリキュラム作成や、第1学年から第6学年までを見通したカリキュラム作成により、各学年における指導のねらいや指導内容が一層明確になり、子どもたちにどの段階でどのような力を付けていけばよいのか、どのような力が不足していて、どのような力を補ってやらなければならないか等が見えてくる。

(3) 学ぶことへの関心・意欲を高めるための評価の在り方

ア 年間指導計画の作成及び題材構成

年間指導計画を立てる際に、音楽科の場合においても、年間を見通した題材構成とその配列を行う必要がある。題材構成の方法については、「主題による題材構成」と「楽曲による題材構成」があるが、子どもに育成する資質・能力をあらかじめ明確にして、その育成のために教材を選択、配列する「主題による題材構成」を採ることが望ましい。

また、題材構成については教科書の内容配列を参考としながら教員各自が自分の目の前の子どもの実態をきちんととらえ、作成しなければならない。更にいうならば、個々の子どもの顔を思い浮かべて「あの子にこういう授業をしていったらどのように変わっていくだろう」、「このような授業では子どもに大きな負担をかけることになりはしないか」といった子どものリアルな姿を想定する必要がある。

なお、学習内容の焦点化、学習内容の拡散を防ぐためにも長時間にわたる題材構成は避けたい。

イ 題材ごとの評価規準の作成

年間指導計画を作成する際、その中で題材ごとの評価規準を作成することが必要である（事例として資料1参照）。その大きな理由として次の3点が挙げられる。

- ① 学習によって子どもが何をどのように身に付けたかを明らかにする。

② 題材ごとの評価規準は、子どもが何をどのように身に付けたのかという定着度を見る「めやす」となる。

③ 評価規準を設けて題材ごとの実現状況を把握しようとすることは、教員の題材や授業での指導助言をいっそう目的あるものにする。

音楽科の評価の観点とは、「音楽への関心・意欲・態度」、「音楽的な感受や表現の工夫」、「表現の技能」、「鑑賞の能力」の4観点から成っている。

とりわけ「音楽的な感受」と「鑑賞の能力」との違いについての先生方からの質問等は多く、事実、「音楽的な感受や表現の工夫」と「鑑賞の能力」の評価規準をきちんと分けて作成できていない取組も見られる。授業の中で、子どもたちがある音楽と出会い、その音楽の雰囲気や様子を感じ取ったり、楽しんで聴いたりする段階と、学習を通してその音楽のもつよさや美しさといったものの価値を認め、自己のものとして「受容」する段階とは違いがある。前者の段階が「音楽的な感受や表現の工夫」として評価される資質・能力と捉えられるであろうし、後者の段階が「鑑賞の能力」と捉えられる。

よりよい学習指導を進めていくためには、Plan（計画）－Do（実施・実行）－Check（点検・評価）－Action（処置・改善）というサイクルのPlan からのみ題材や授業を構想するのではなく、Checkの視点からの構想も考えたいものである。

資料1

学期	題材名	題材のねらい	題材の評価規準			
			ア 音楽への関心・意欲・態度	イ 音楽的な感受や表現の工夫	ウ 表現の技能	エ 鑑賞の能力
一 学 期	曲のまとまりを感じて歌おう	・旋律のまとまりを感じ取ったり旋律の繰り返しや変化に気付いたりして、工夫して表現できるようにする。	曲想を感じ取り、友達と気持ちを合わせて歌うことを楽しんでいる。	旋律の繰り返しや変化に気付いて、歌い方を工夫している。	曲想を生かして表情豊かに二部合唱している。	
	曲の重なりを楽しもう	・いろいろな楽器の重なり合うオーケストラの響きを味わって聴くようにする。 ・曲想を感じ取って、想像豊かに聴いたり、アンサンブルしたりして楽しむようにする。	想像豊かに聴いたり、主旋律を楽器で演奏したりして楽しんでいる。	楽器の重なり合う響きを感じ取って聴くとともに、それぞれのパートに合う楽器を選んで演奏の工夫をしている。	音量のバランスを考えて、楽器でアンサンブルができる。	オーケストラの響きを味わって聴く。
	音を聴こう育てよう	・音と響きのすばらしさや不思議さを体感し、音を育てる工夫をする。 ・石の質感を大切に、音の組み合わせを工夫し、アンサンブルをして楽しむ。	石の音の響きに関心を示し、石の音の組み合わせでできる音楽を楽しんでいる。	石の音の不思議さを感じ取り、音を育てる工夫をしている。	音の組み合わせを工夫してアンサンブルをしている。	石の音と響きの不思議さや素晴らしさを味わって聴いている。

(小学校音楽科 題材の評価規準作成例 第6学年 抜粋)

参考・引用文献

- | | | | |
|----------------------|-----------|-------|-----|
| (1) 小学校学習指導要領解説－音楽編－ | | 文部省 | 平11 |
| (2) 初等教育資料 | 平成16年6月号 | 文部科学省 | |
| (3) 初等教育資料 | 平成16年8月号 | 文部科学省 | |
| (4) 初等教育資料 | 平成16年11月号 | 文部科学省 | |

- | | | |
|------------------|-----------|-----------|
| (5) 音楽鑑賞教育 | 2004年10月号 | 音楽鑑賞教育振興会 |
| (6) 音楽鑑賞教育 | 2005年2月号 | 音楽鑑賞教育振興会 |
| (7) 小学校音楽科の指導と評価 | | 暁教育図書 |

2 事例（学ぶことの関心・意欲を高める指導事例）

(1) 題材の構想

本学年の子どもたちは、とても元気がよく、表現活動や鑑賞活動で学習する様々なことに強い興味や関心を示し、意欲をもって取り組んでいる。感受性の強い子どもたちが多く、様々な学習に、興味をもって積極的に取り組み、捉えた事柄を自分のものとして次の学習や活動に生かしていこうとする姿勢が多く見られる。

2年生時においては、楽しみながらリズム遊びやふし遊びを表現させたり、音遊びを楽しませたりしてきた。歌唱では、美しい大きな声で歌ったり、リズムにのって体を動かしたりして、元気に楽しみながら学習させてきた。元気に歌わせることは大切であるが、ときとして地声になったりするため、自然で無理のない発声を心がけてきた。器楽では、鍵盤ハーモニカに取り組むほか、トライアングルやタンブリンといった打楽器の演奏にもチャレンジさせてきた。鑑賞では、CDやDVD等の視聴のほかに、音楽を聴きながら体を動かしたり身体表現を楽しませたりした。

3年生になってからは、元気に、美しく大きな声で歌うことに加え、歌詞の意味についても考えさせたり、表情豊かに歌うにはどのようにしたらよいかということについて考えさせたりすることに力を注いできた。

また、リズムに乗って体を動かしたり、手遊びをしたりすることが好きな子どもたちが多いため、必要に応じて身体表現も取り入れている。

そのほか本校では、3年生からソプラノリコーダーに取り組ませている。子どもたちは、器楽、とりわけソプラノリコーダーに興味や関心を示し、積極的に取り組んでいる。

しかし、ふしの特徴を感じ取ったり、曲全体の雰囲気を生かしたりして、自分の演奏につなげるまでには至っていない。子どもたちの主体的で活発な音楽活動を目指し、取り組んでいきたいと考えているが、今後子どもたちが、周りの達の活動の様子をじっくりと観察したり、観察した友達の演奏と自分の演奏とを比較してその違いを見付けたり、学んだことを自分の演奏に生かしたり、友達の演奏のよさを取り入れたりする中から、さらに意欲的で活発な授業展開ができないものかと考えた

そこで、本研究テーマを踏まえ、子どもの実態に合わせた題材設定や選曲、選曲した楽曲の組合せ等を模索する中から、より学習効果を上げられるよう取組を進めることとした。

従来3年生で扱ってきたのは「ふじ山」や「バードウォッチング」といった歌唱教材、「ねむたいいこねこ」といった器楽教材、「馬にのって」といった鑑賞教材であったが、これらの教材を見直し、歌唱教材では「ふじ山」に加え、「七つの子」を取り上げることとした。

また、従来取り組んできた共通教材「ふじ山」を効果的に指導するために、器楽教材では「エーデルワイス」のリコーダー奏を取り上げることとし、曲の起伏や流れるような曲想を生かして想像豊かに演奏させ、それを生かして「ふじ山」の情景を思い浮かべながら楽曲の特徴を生かして想像豊かに歌うという活動につなげていきたいと考えた。よりイメージをふくらませるために、視聴覚教材の活用を考えた。

「エーデルワイス」ではサウンドオブミュージックも視聴させ、「エーデルワイス」を取り巻く様々な曲にふれさせることにより、さらに意欲を出させたいと考えた。

また、「ふじ山」では富士山の美しい映像をDVDやグラビアで見せ、情景を思い浮かべやすいようにしたいと考えた。楽曲の特徴をしっかりととらえ、自分の表現に結び付けられたらとの願

いからである。

次に3つの楽曲の教材観を示す。

①「エーデルワイス」 リチャードロジャーズ 作曲

ミュージカル「サウンドオブミュージック」の中の一曲である。リコーダーの独奏教材として編曲され、ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ド・レの7音で演奏することができる。4度、5度といった跳躍進行が時折現れることも特徴である。

②「七つの子」 野口雨情 作詞 本居長世 作曲

からすの鳴き声から巣にいる子どもを思う親の気持ちを感じ取った童謡の名作である。曲全体の雰囲気や親が子どもを思う気持ちなどを考えさせながら、歌詞を読んだり歌ったりするようにさせたい。

③「ふじ山」 文部省唱歌 巖谷小波 作詞

歌唱共通教材である。歌詞の意味を理解して歌うことによって、広がりのある堂々とした感じの曲想である。3フレーズ目から4フレーズ目にかけての曲の山に気付いて、歌い方を工夫できる曲である。

(2) 題材の目標と評価規準

① 題材名 「それぞれの楽曲の特徴を感じ取って意欲的に表現しよう」

② 題材目標 楽曲の違いに気づき、特徴を感じ取って鑑賞したり、表現を工夫したりしよう。

③ 評価規準

	ア 音楽への関心・意欲・態度	イ 音楽的な感受や表現の工夫	ウ 表現の技能	エ 鑑賞の能力
題材評価の規準	楽曲の特徴に関心をもって、視聴したり表現したりしようとしている。	楽曲の特徴を感じ取って、歌い方や楽器の演奏の仕方を工夫している。	楽曲の特徴を生かして、歌ったり楽器を演奏したりしている。	楽曲の特徴を感じ取って、情景を想像しながら視聴している。
学習具習体の動評にお規ける	①楽曲の特徴に興味関心をもち、進んで視聴したり表現したりしようとしている。	①それぞれの楽曲の特徴を感じ取りながら、表現の仕方を工夫している。	①滑らかな曲の感じを生かしながら表現している。 ②楽曲の特徴を生かし、情景を思い浮かべながら表現している。	①楽曲の特徴を感じ取って、想像しながら視聴している。

(3) 指導と評価の計画(4時間)


	○ 主な学習活動	☆ 評価方法 A Aと判断する状況 C Cと判断される状況への働きかけ
第1時	○「サウンドオブミュージック」の「ドレミの歌」「エーデルワイス」の映像を見る。 ○「エーデルワイス」をリコーダーで演奏する。	☆エー①観察 A 楽曲の特徴を感じ取りながら、体を動かしたり口ずさんだりして視聴している。 C 映像のみにこだわっている児童には楽曲の特徴を意識するように声をかける。 ☆アー①観察 A 映像と演奏する曲とを比べ、意識して演奏している。 C 視聴した曲の感じを思い出すような声かけをする。
第2時	○「エーデルワイス」をリコーダーで演奏する。 ○「七つの子」を歌う。	☆ウー①聴き取り A 前時の学習を思い出し、なめらかな曲の感じを意識して演奏している。 C 正確な音を演奏するだけで精一杯の児童には、曲の感じを意識するように話す。
第3時 本時	○「エーデルワイス」をリコーダーで演奏する。 ○「七つの子」を歌う。 ○富士山の映像を見てイメージをふくらませる。 ○「ふじ山」を歌う。	☆アー①観察・発言の内容 A 富士山の雄大さや美しさを感じながら映像を見たり、気が付いたこと・感じたことを的確に発言したりしている。 C 次に歌う「ふじ山」につなげられるように富士山の雄大さや美しさを意識できるようにする。 ☆イー①表情の観察・歌声の聴き取り A 映像で見た富士山の偉大さを感じながら、楽曲の特徴を感じ取り、表現の仕方を工夫している。 C 先に見た富士山を思い出し、雄大な感じを表現に生かすように声をかける。
第	○「エーデルワイス」をリコーダーで演奏する。	☆ウー②聴き取り・観察 A 今まで学習してきたことを思い起こし、情景を思

4 時	○「七つの子」を歌う。 ○「ふじ山」を歌う。	い浮かべながら表現している。 C それぞれの曲に合った表現の仕方ができるように、意識させる。
--------	-------------------------------	---

(4)「学ぶことへの意欲」を高める指導の実際

①本時の目標 楽曲の特徴を生かして、想像豊かに表現しよう。

②本時の展開

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	評 価 規 準	備 考
1 既習曲を演奏する。 「エーデルワイス」 「七つの子」	○楽曲の特徴を生かして表現してきたことを思い起こせるように声をかける。 	アー①	DVD
2 富士山の映像を見てイメージをふくらませる。	○教科書の写真や用意した映像資料を見て、イメージをふくらませやすいように配慮する。	イー①	
3 「ふじ山」を歌う。	○歌詞の内容と旋律の抑揚の関係などを考えて、想像豊かに歌えるように声をかける。		
4 次時予告			

○授業を終えて

本時の指導の中では、歌う前に富士山に対するイメージをふくらませてから歌唱につなげていきたいと考え、DVDで富士山の映像を見せることから始めた。ダイヤモンド富士や春夏秋冬の富士山の映像を見せると、子どもたちから大きな歓声が洩れた。

また、富士山のグラビアも手に入れ、子どもたちに見せた。筆者自身、とても感動した写真だったので、この感動を伝えたいと願っていたが、子どもたちもとても感動し、感動は子どもたちと共有のものとなった。

改めて、映像やグラビアにふれさせることは必要であり、大切であると感じた。本物ではないが、できる限り本物に近い素晴らしいものにふれさせることは、子どもたちの音楽的な感性をより高めることができる。これからもできる限り本物にふれさせていきたいと考えている。

本時の課題としては、映像や写真を見せる時間を取りすぎた点が上げられる。そのため実際に歌唱にかける時間が少なくなってしまった。時間配分については、前もって指導者側が十分に考え、時間の中で、どの指導にどれだけのウエイトをかけるのかということについて綿密に考えて授業に臨まなければならない。歌唱を中心とした取組をするときにはやはり十分歌い込ませる時間を確保しなければと感じた。歌唱指導の際には、指導者がどの位置に立ち、どのような形をとればよいのか、様々な方法を考えたが、子どもの内面を引き出すためにもピアノ伴奏ばかりにこだわらず、例えば伴奏なしで子どもたちの前に立ち、正面から子どもたちの声を引き出す指導も大切な方法であると再認識させられた。

また、感動したことをどのように歌いたいか、子どもたちに考えさせようと意図して「どんなふうに歌いたい？」という発問を投げかけたが、子どもたちからの答えは出にくかった。やはり「何を感じましたか？」とか「今までのどんなことを思い出しましたか？」など、子どもがイメージや発想を大きくふくらませることができるような発問を心がけなければならない。感動を言葉にしたり、自分の気持ちにして表したりすることは難しく、具体的な発問の仕方をこれからももっと考えていかなければいけないと痛感した。

そのほか、発問に対して言葉で答えさせる方法以外に子どもが思い描いたことや考えたことをじっくりと自分の中でまとめさせるには、ワークシートなどを使って書かせ、書かせてから内容を発表させる方法も臨機応変に取り入れたい。この方法だと書いた内容がいつまでも残り、子どもが後から読むことによって、感じた内容をフィードバックして考えたり、再び感動をよみがえらせたりすることもできる。



(5)「学ぶことへの意欲」を高めるための指導と評価の工夫

【音楽への関心・意欲・態度】

学習活動における具体の評価規準		具体の評価方法
アの①	楽曲の特徴に興味関心をもち、視聴したり表現したりしようとしている。	<p>〈評価方法〉 楽曲の特徴を意識しながら視聴している様子や表現している様子を観察する。</p> <p>〈Aと判断する状況〉 楽曲の特徴に興味をもち視聴している。 映像と演奏する曲とを比べ、意識して演奏している。 富士山の雄大さや美しさを感じながら映像を見たり、気が付いたこと・感じたことを的確に発言したりしている。</p> <p>〈Cと判断される児童への働きかけ〉 視聴した曲の感じを思い出すような声かけをする。 次に歌う「ふじ山」につなげられるように、富士山の雄大さや美しさを意識できるようにする。</p>

【音楽的な感受や表現の工夫】

学習活動における具体の評価規準		具体の評価方法
イの①	それぞれの楽曲の特徴を感じ取りながら、表現の仕方を工夫している。	<p>〈評価方法〉 表情を観察したり、歌声を聴き取ったりして判断する。 どんなふう感じたか、どんなふうに歌いたいかを発表させ、発言内容から判断する。</p> <p>〈Aと判断する状況〉 映像で見た富士山の雄大さを感じながら、楽曲の特徴を感じ取り、表現の仕方を工夫している。</p> <p>〈Cと判断される児童への働きかけ〉 先に見た富士山を思い出し、雄大な感じを表現に生かすように声をかける。</p>

【表現の技能】

学習活動における具体の評価規準		具体の評価方法
ウの①	なめらかな曲の感じを生かしながら表現している。	<p>〈評価方法〉 なめらかな曲の感じを生かし表現しているかどうか、演奏を聴き取る。</p> <p>〈Aと判断する状況〉 前時の学習を思い出し、滑らかな曲の感じを生かして演奏している。</p> <p>〈Cと判断される児童への働きかけ〉 正確な音を演奏するだけで精一杯の児童には、曲の感じを意識するように話す。</p>
ウの②	楽曲の特徴を生かし、情景を思い浮かべながら表現している。	<p>〈評価方法〉 今まで学習してきたことを表現に生かしているか歌声や演奏を聴き取ったり、様子を観察して判断する。</p> <p>〈Aと判断する状況〉 今まで学習してきたことを思い起こし、情景を思い浮かべながら表現している。</p> <p>〈Cと判断される児童への働きかけ〉 それぞれの曲に合った表現の仕方ができるように、意識させる。</p>

【鑑賞の能力】

学習活動における具体的評価規準		具体的評価方法
エの①	楽曲の特徴を感じ取って、想像しながら視聴している。	<p>〈評価方法〉 映像に興味をもち、楽曲の特徴を感じ取りながら視聴している様子を観察して判断する。</p> <p>〈Aと判断する状況〉 楽曲の特徴を感じ取りながら、体を動かしたり口ずさんだりしながら視聴している。</p> <p>〈Cと判断される児童への働きかけ〉 映像のみにこだわっている児童には、楽曲の特徴を意識するように声をかける。</p>

(6)成果と課題

今回の研究を通して、題材を吟味し、楽曲構成を工夫することにより、子どもの意欲は、より高められると感じた。

私たち大人が普段古い曲だと感じている楽曲でも、学校で習ったり、テレビのコマーシャルで流れていたり、ドラマの主題歌で使われたりするのを耳にすることで、子どもにとっては意外に新しく感じられるようである。それどころか、巷で流れている同世代ちまたに近いような歌手が歌う曲よりも親しみを感じたり、懐かしく思ったりすることが多いようである。

最近、子どもたちがあまり興味や関心を示さなくなったと思われる童謡や文部省唱歌（例：夕やけこやけ、春の小川、さくらさくら、こいのぼり、おぼろ月夜、ふるさとなど）にとっても興味を示す児童が増えているように思うのは前述のとおりである。

しかし、このような楽曲を子どもたちは好んで歌いたがるものの、積極的で意欲的な表現にまで高めることは難しい。

今回、いかに子どもたちのイメージをふくらませるのか、ふくらませたイメージを意欲的に表現させるにはどのような工夫があるのかということにスポットを当てて研究を行った。

例えば、この楽曲のこのメロディーが美しいから、なめらかにきれいに、美しく歌いたい、この部分ではこんな風に感情を込めて歌ってみたい……というように、子どもたちがイメージをふくらませたり、積極的に考えたりできるような情意的な部分の指導に踏み込めたことは大きな喜びであり、文部省唱歌のように子どもたちの身近にある教材を通して、子どもたちの関心・意欲をこれまで以上に高めることができたのは大きな収穫だった。

そのほか、歌唱教材を効果的に使い、学習意欲を高めるためにはどのような取組をすればよいかと考えたとき、従来から行ってきてはいるものの、やはりその年々の子どもの実態に合わせての選曲や、教材の組み替えをしなければ効果的に進まないことも実感した。

今回のように、3年生の2学期に扱う「ふじ山」の指導を効果的にするために、「エーデルワイス」のリコーダー奏を取り入れた。「エーデルワイス」は、以前から3年生でリコーダー奏のみに取り組むことがほとんどであったが、イメージをふくらませ、曲想を感じ取りやすくするためにリコーダー奏をするほかに、「サウンドオブミュージック」のようなDVD教材を活用し、

使用する楽曲を取り巻く他の楽曲にもふれることが、よりいっそう効果的であることが分かった。DVDや映像、グラビアを活用することで、子どもたちの活動はより効果的なものとなり、親しみをもって取り組み、より深く曲想を感じ取ることができ、曲の山場等を把握して、のびのびと歌う姿が見られた。DVD等の教材を視聴することにより、曲想を感じ取ったり、雰囲気を感じたりすることが大切であるということも再認識できた。

単に歌を上手に歌わせる、リコーダーを演奏させるというのではなく、演奏に取り組む以前の段階から子どもたちの心情を高めていくことが大切であり、楽曲に取り組んだ際に効果的であることが分かった。

また、子どもたちが幼い頃に聞いたことのある「七つの子」に取り組んだ際には、過去の出来事で印象に残った場面を回想したり、逆に今の思いを投影させたりしていた。「ふじ山」では、自分の抱いた富士山のイメージと映像で見た豪快な富士山、優しい感じの富士山のイメージをどう楽曲の演奏に繋げるのか、各自の思いを表現に生かすにはどうしたらよいのかということも子どもたちに考えさせることができた。

教科書に掲載されている楽曲についても、ただ古いと一蹴せず、いかに子どもたちのイメージをふくらませられるか、そしてどのような工夫でそのイメージの拡大が可能か等、工夫できる点にスポットを当てて取り組むことが大切であるかが分かった。

教材を選んでいく際の留意点として、身近にある楽曲では、どの点にポイントを置き、深く迫っていくのかについて考え、子どもたちの関心・意欲を高めていけるような取組を進め、今後も続けていきたい。

課題としては、これまでからも楽曲の組み替えは行ってきたが、必ずしも効果的に進められてはいなかったように思われるため、子どもの実態に適した指導を考え、進めていくことが大切であると感じた。今回の取組は、子どもの実態に合わせて、題材設定をし、楽曲の組み替えをして効果を上げられるようにと考えたが、実際に取組を進めると、一つ一つの楽曲にかける時間が不十分であったり、子どもたちから出てきた意見や感想を交流する場があまりもてなけなかったりしたことが反省点である。

また、書くことを取り入れ、自分の考えを発表しやすくする雰囲気をうまく作り、十分時間をかけて、自分たちで音楽を作り上げていく取組についても今後さらに継続したいと思っている。各自が、イメージをふくらませ、それをみんなで共有できれば、目標により近付けたのではないかと思う。それによって、「もっと歌いたい」「もっと演奏したい」という意欲にもつなげられたものと推察できる。

ほかに、すべての基本となることであるが、基本的な学習態度は普段から折にふれて身に付けられるよう、取り組んでいくべきである。筆者自身、普段からこのような取組を大切にしているが、歌うときの姿勢、座って話を聞く態度、リコーダーを吹く姿勢など、きちんと教員が指導し、低学年から日々根気よく積み上げをしていかなければならない。そのような積み重ねが、1時間の学習活動を有意義に進めていく基礎であるようにも思う。本研究では、学習の最後に自分たちの歌声が変わってきたことに気付いて、次の学習の意欲につながりつつある姿が多く見られた。

今後は、子どもたちに「成長した」「上手になった」ということを実感させるために、よりよい教材選択をしていくことが必要であると考えている。そして、自分から進んで取り組み、「やってみよう」と思えるような自発的な活動ができるようにしていきたい。そのために、更に教材研究

を進めたい。

また、各学級の交流も進めたいと考えている。現在も学期末などで、学習してきたことの交流をしているが、交流の方法を考え、益々お互いが高め合えるような取組をしていきたい。歌唱教材は今後も大切にしていきたいが、並行して器楽合奏にも取り組ませたり、総合的な学習の時間と関連させて英語の歌やアジアの曲にもめぐり合わせていったりすることがより豊かな音楽表現を培っていくことにつながると考えている。

子どもたちの感想

- ・ふじ山の歌を歌いました。ふじ山のビデオを見たから思い出しながら歌いました。ダイヤモンドふじがきれいでした。
- ・ふじ山の歌を歌ったら、新かん線からふじ山を見たことを思い出しました。高い音がむずかしいでした。
- ・この前ディーブイディーでみたダイヤモンドふじが本にのっていました。おんなじでした。びっくりしました。
- ・エーデルワイスは、いつもお昼の12時に鳴っているけれど、自分でふいたらいい気分でした。のばすところがうまくできてうれしいでした。

第5節 図画工作

1 基本的な考え方（図画工作科における学ぶことへの意欲を育てる指導の実際）

(1) 学習指導要領における図画工作科の目標及び内容について

図画工作科の目標は、「表現及び鑑賞の活動を通して、つくりだす喜びを味わうようにするとともに造形的な創造活動の基礎的な能力を育て、豊かな情操を養う。」である。ここでいう「表現及び鑑賞の活動を通して」とは、図画工作科が児童一人一人の感じたことや想像したことを造形的に豊かに表す表現と、身近なものや作品などからそのよさや美しさなどを感じ取り、見方を深める鑑賞を基にする学習活動を示している。また、「つくりだす喜びを味わうようにする」とは、一人一人が形や色などに働きかけながら発想を広げ、自分らしい表し方で思いを実現していく楽しさや喜びを味わうことであり、それが、表し方を工夫するなど造形感覚や創造的な技能などの「造形的な創造活動の基礎的な能力」を育てることと一体となって「豊かな情操を養う」ことができるのである。ここでいう「豊かな情操」とは、よさや美しさ、優しさなどの価値に向かう傾向をもつ心情のことであり、もっとも人間らしい意思や感情のことであると言われる。

図画工作科で身に付ける能力は、「造形への関心・意欲・態度」、「発想や構想の能力」、「創造的な技能」、「鑑賞の能力」の四つの観点で示される。それらの観点はそれぞれが独立したものでなく、互に関連し合っより効果的に働くものである。その中でも「造形への関心・意欲・態度」は他の三つの能力を身に付けるための基礎となるものであり、それらとより密接に関連し合っているといえる。（図1）

児童は、自分の思いや願いを絵にしたり、形に表したりする人としての根源的な表現の欲求をもっていると考える。この欲求を満足させ、表現の喜びを味わわせることが図画工作科の重要なねらいであり、「造形への関心・意欲・態度」がこの基盤となる重要な観点であるといえるだろう。

図画工作科の目標を受けた内容は、創造的な想像力などを働かせ、かいたりつくったりする表現活動を行う「A表現」と、作品や表現活動の過程などを自分らしい感じ方や見方によって、そのよさや美しさなどを味わう「B鑑賞」の二つの領域で表されている。更に、「A表現」は(1)材料などをもとにして、楽しい造形活動をする（通称：造形遊び）内容と、(2)感じたことや想像したことなどを基にして、絵や立体に表したり、つくりたいものをつくったりする内容に分けて表されてる。A表現(1)は、身近な材料の形や色などから楽しい造形活動を思い付き、体全体で材料を並べたり、積んだりしながら、思いのままに表すことを楽しみ、もてる力を働かせるようにすることである。また、A表現(2)は、児童が自分の表したいことを進んで見付け、その思いをふくらませ、形や色、材料などを選び、表し方をいろいろ試しながら思いのままに表すことがで

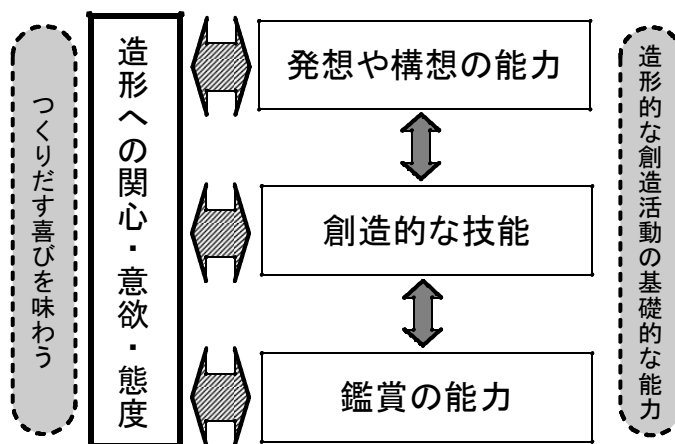


図1 四つの観点の関連

きるようにすることである。自分の表したいことを進んで見付けたりいろいろ試しながら思いのままに表したりすることや、自分らしい感じ方や見方をもつことも、すべて子どもの関心・意欲の高まりによって支えられる主体的な活動である。また、学習指導要領の各学年の目標は(1)造形への関心・意欲・態度に関する目標と、(2)A表現に関する目標、(3)B鑑賞に関する目標の3点にまとめて示されている。(1)の目標は(2)と(3)の目標のそれぞれに関連しており、(2)と(3)の目標は互いに働き合う関係にある。学年目標を実現するに当たっては、それぞれが相互に関連し、働き合って造形的な創造活動の基礎的な能力の育成を目指すように内容を選択し、構成することが大切である。

(2) 学ぶことへの関心・意欲を高める指導方法の工夫

近年、全国的に広がりを見せている「～式」などのマニュアル化された製作方法では、見ただけには高いレベルの作品ができる。しかし、技術的に高度な作品をかかせることのみが図画工作科の目的ではない。製作活動を通して子どもの「豊かな感性や情操を養う」と目標にあるように、一人一人が思いをもって表現方法を探り、失敗しながら試行錯誤を続け、自分らしい表現を求めていくところに意味がある。その過程で、子どもはかけがえのない自分を見付け、自分の表現や存在を肯定的に受け止められると考える。そして、同じ取組を通して見付け出した友達の表現や存在をもまた肯定的に受け止められることにつながる。これこそが創造的な姿勢であり、生きる力をはぐくむことになると考える。試行錯誤の結果、自分の表現方法を見付け、思いを表現できたときに得られる達成感や満足感が、次の活動への意欲となるのである。

そのためには、まず個々の思いを的確に把握することが大切である。個々に声かけしたり、製作カードを活用したりしながら、一人一人の思いを肯定的に受け止め、それを実現させるための適切な支援を工夫する。活動の途中で困っている子どもには、その子どもの思いに寄り添い、その解決のために有効なアドバイスや素材・用具等の物的支援を必要に応じて与えるようにし、指導者が事前に想定した形に引っ張ろうとしないことが大切である。ただし、子どもの活動が学習のねらいや目標から逸脱しそうな場合は、子どもと話をしながら軌道修正することは必要である。指導者は題材を設定するとき、子どもが行うと思われるあらゆる活動内容を事前に予測し、柔軟に対応できるようにすることが、子ども一人一人の活動意欲を高め持続させることにつながると思う。

(3) 学ぶことへの関心・意欲を高めるための題材開発の在り方

子どもの関心・意欲と大きく関連するのは題材設定である。子どもにとって魅力ある題材は、提示するだけで目が輝き、早くやりたい、つくりたいという思いでいっぱいになる。そのとき子どもは早くも頭の中で自分の活動している様子を思い浮かべ、表現方法や使用する材料までどんどん思いを広げていくようになる。子どものやる気を引き出し、意欲的に活動する題材開発のポイントとして、次の点があげられる。

- ① 子どもにとって魅力的な素材や用具を活用する題材
- ② 活動内容が楽しく、できそう、やってみたいという思いがもてる題材
- ③ 個々の能力に応じて達成感を得られる題材
- ④ 試行錯誤をしながら何度もやり直しができる題材
- ⑤ 自分で材料や用具を選び多様な表現が可能な題材

子どもがパスやクレヨンに初めて出会ったとき、喜んで自由にかいたり塗ったりして、その色や感触を楽しむように、初めての素材や用具を使用した題材に出会ったときにも、大変興味をもって意欲的に活動できる。また、新聞紙を使って全身を飾り付ける造形遊びなど、活動内容が楽しく全身を使って様々な工夫ができる題材を取り上げるのも効果的である。自分でテーマを決めてそれに向かって材料や用具、表現方法を自由に選んで製作する題材は、一人一人が意欲的、主体的に取り組むことができる。また、個々に到達目標があるため、それぞれの能力に応じて達成感が得られる。さらに、製作過程で何度でも形をつくりかえることができる粘土のような可塑性のある素材は、試行錯誤しながら意欲的に自分の表現を追求することができる。

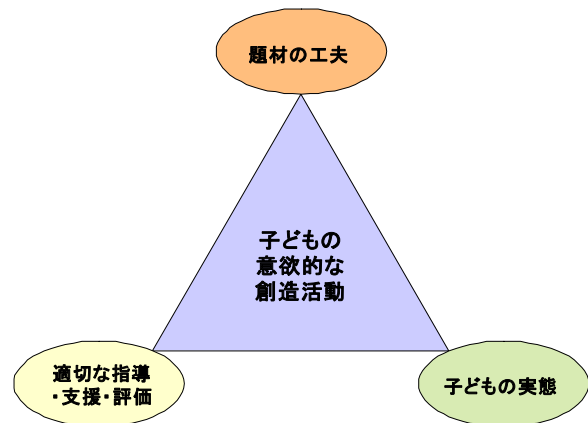


図2 意欲的な創造活動のための三つの要素

(4) 学ぶことへの関心・意欲を高めるための評価の在り方

評価もまた学習意欲の高揚に大きく影響を与えることは、周知の通りである。評価には大きく次の三つが考えられる。

○自分の評価

活動途中又は活動後に、自分で自分の表現をめあてに照らして表現内容や作品の完成度等について、製作カード等を活用して振り返り、その後の活動に生かす。

○友達等による評価

活動中の自然な友達との会話や活動後の意見交流等で、友達のがんばりや表現のよさ、工夫点等について相互に認め合い、アドバイスし合い、その後の活動に生かす。

○指導者による評価

指導者が個々の子どもの活動を評価規準に基づいて評価し、それをもとに一人一人のがんばりや活動内容に見られる工夫を認めるとともに改善点について指導する。

「指導と評価の一体化」が叫ばれているが、指導者の評価が未だに完成作品を見ての評定のみに終わっていることも少なくない。評価カード等を活用する等、個々の活動全体を常に見る手だてを講じ、タイミングよくアドバイスしたり、活動意欲や表現の工夫をほめたりすることで個々の活動が認められ、意欲が高められるのである。また、表現と鑑賞を効果的に取り入れた展開を工夫することにより、表現活動の合間に自分や友達の作品を鑑賞し、意見交流することで自己評価や友達の評価がその後の表現活動に生かされ、表現の方向性が明確になる。

子どもの学ぶことへの意欲を高めるためには、まず子どもの発達段階や欲求を把握し、それに基づいて魅力的な題材を提示し、子どもの主体的な創造活動を促す。そして、そこには活動を通して育てたい資質や能力が明確にされていることが必要であり、その達成に向けて子ども一人一人の活動に合わせた適切な指導・支援・評価を行うことにより、成就感や満足感を得られるようにすることが大切である。(図2)

2 事例（学ぶことへの関心・意欲を高める学習の指導事例）

(1) 題材の構想

指導観・題材観・評価観

—「A表現(1)材料などをもとにして、楽しい造形活動をする」について—

(第4学年)

子どもは、何か物をつくりだすことを素直に喜ぶ。その喜びは次の目標につながり、そこから知恵を働かせたり、さらに工夫したりして、自分の思いを表現しようとする。自分が納得する表現になれば、その結果に子どもは満足し、もっと学習を続けたいという意欲をもつことになる。学ぶ意欲をもって取り組める図画工作の在り方について、題材の設定・指導・評価の面から研究を進めた。

学ぶことに対する意欲を育てるポイントとして以下の4点があげられる。

- ・素材そのものが、子どもの興味・関心を湧き立たせるものであり、更に意欲を高める指導が伴うこと。
- ・子どもの活動に応じて、意欲が高まる指導・支援が適切に行われること。
- ・試したり、やり直したりできるような余裕のある時間設定であること。
- ・子どものやる気を生み出す評価であること。

(2) 単元の目標と評価規準

ア 題材名 「どんなかたち？どんな音？ ～オリジナル土鈴をつくろう～」

イ 題材について

粘土を使った学習については、子どもは今までに何度か経験してきている。油粘土、紙粘土が主なものである。初めて油粘土に触れたときの、やわらかい感触と粘土に残る自分の手形に喜びを覚え、またなんとも言えない独特のにおいに戸惑った子どもも多い。

粘土には、切る、つなぐ、曲げる、伸ばすなど自由に形が変えられることや、途中での変更ややり直しが何度でもできるという長所がある。この点を前面に押し出し、子どもの意欲を引き出せる要素としていきたい。ただ、紙粘土や粘土などは時間が経つと乾燥し硬くなる。ひびや硬化を防ぐ方法を工夫することや、失敗しても何度でもやり直すことのできる時間を確保することによって、子どもが安心して作業に取り組むことができるようにしたい。

鈴は小さいころから何度となく目にしたり耳にしている身近なものである。髪留めについている小さな鈴や、神社の大きな鈴まで、一度は鳴らしたことがある子どもも多い。

今回の学習では、まず丸く細長い穴が開いているといったような鈴に対する既成概念を払拭し、「ここにこんな土鈴を置きたい、吊り下げたい。」という目的意識と自由な発想を大切にしたい。そのために、発想・構想・デザインを通して、丸い形ばかりではなく個性あふれる形の土鈴をつくっていけるようアドバイスしながら活動させることを心掛けていくようにした。

本校の子どもたちは、図画工作が大変好きで意欲的に取り組む。1学期の「住んでみたい家」では、校内で剪定せんていされたり伐採されたりした木の枝や、学校の「材料銀行」や家から持ってきた様々な材料を使って、自分が住んでみたい家を自由な発想で作りあげ、個性あふれる作品ができた。

今回の題材では、粘土という新しい素材との出会いを導入時に取り入れ、新鮮な感触と自由に創作できる楽しさを味わわせたい。そこから生まれてくる創作に対する意欲を、目的に応じた形大きさなどを構想し製作していく原動力としたい。

そのために個々の自由・柔軟な発想を大切に、楽しく活動できるように指導・支援していきたい。

また、本校では12月に児童作品展を開催し全校の子どもたちだけでなく、保護者にも鑑賞の機会も設けている。自分たちの作品がたくさんの人に見てもらえることは子どもにとっても励みになると考える。

ウ 題材の目標

- 土鈴に関心をもち、意欲的に活動する。 〈関心・意欲・態度〉
- 用途に応じて大きさや形、デザインを工夫して土鈴をつくる。 〈発想・構想の能力〉
- 目的に応じて製作に必要な道具を使う。 〈創造的スキル〉
- 自他の作品について、発想や製作の工夫を認め合う。 〈鑑賞〉

エ 題材の評価規準等

【A表現（1）の評価規準】

造形への関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能
・材料や場所をもとに楽しく表しながら、自ら作り出す造形活動を楽しもうとする。	・材料や場所の特徴を見付け、物をつくった経験をもとに作り出す能力などを働かせて考える。	・材料や場所の特徴をもとに、形を変えて作りながら、それらの美しさや面白さ、表し方の感じの違いに関心を持ち、体全体の感覚や作り出す能力、デザインの能力などを働かせて表し方を工夫する。

学習活動における具体的評価規準

造形への関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能
・粘土の美しさ、楽しさなどを表そうとする。 ・目的や面白さ、楽しさを共有しながら、造形活動を楽しもうとする。 ・手や体全体を働かせて、粘土にかかわろうとする。	・粘土にかかわり、自分なりの発想をする。 ・よさや美しさなど自分の感じ方を大切に、想像をふくらませる。 ・友達の表し方に刺激されたり、偶然見付けたことから新たに発想したりする。	・粘土を使い、伸ばす、つなぐ、丸める、削るなどしながら自分らしい表し方をする。 ・試行錯誤しながら、粘土の特徴を生かしてつくる。

【B鑑賞（1）の評価規準】

造形への関心・意欲・態度	鑑賞の能力
<ul style="list-style-type: none"> 自分たちの作品や身近な造形品などの表し方や材料による感じの違い、よさや面白さなどに関心をもとうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 表し方や材料の感じの違いが分かり、親しみのある美術作品やその製作の過程などのよさや面白さなどについて、話し合うなど関心をもって見る。

具体の評価規準

造形への関心・意欲・態度	鑑賞の能力
<ul style="list-style-type: none"> 話したり、聞いたりして、自分の感じ方や見方を広げようとする 感じるままに見たり、自分でも試したいと思ったりするなど関心をもっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 製作の過程を見ながら、材料や用具の生かし方、思いや意図を実現する工夫などに関心をもって見る。 友達の作品と自分の表し方の共通点や違いを見付けたり、美しさや面白さの感じに共感したりしたことを話し合う。

(3) 指導と評価の計画

(事前準備)… 材料に関する関心をもたせる。

- 粘土で遊んだ経験などについてアンケートを行う。(資料1参照)
- 2色の粘土から自由を選ぶ。

(導入時)… 粘土を自由に触って遊ぶ。伸ばしたり、丸めたりする中で、粘土という素材の感触や可塑性を楽しみ、本題材に対する意欲付けとする。

世界に一つしかない自分だけの土鈴を考え、発想・構想における工夫やがんばりを紹介する。

(製作時)… 大きさや形、デザイン、用途などよく考え工夫している点を見付けて全体に紹介する。

子ども自身の前向きな考えや活動、がんばりを中心に紹介するようにする。

3時間連続で実施し、余裕をもって完成まで一連の学習活動で行えるようにする。

(鑑賞時)… 乾燥が終わった時点で、プレ鑑賞会を行い、がんばったところをほめるようにする。

焼成後の着色に向けての意欲付けとする。完成後は、校内作品展に展示し、子ども相互の認め合いだけでなく、保護者からの感想を紹介することで、次の題材やこれからの図画工作に対する意欲付けとする。

鑑賞は2回に分けて、「きらきらカード」(鑑賞カード)を使って行う。

(プレ鑑賞会)… 形ができあがり乾燥がすんだ時点で行う。全員が作品を見て回り発想

・構想から製作中における友達のがんばりを「きらきらカード」に書き、発表する。

(校内作品展)… 全校の子どもたちの平面作品・立体作品が展示され、保護者も来校し鑑賞する作品展である。友達の作品を見たり、音を楽しんだりする中で、新たな粘土の魅力に触れ、がんばりを作品展用の「きらきらカード」に記入し全体に紹介する。

指導と評価の計画の概要

時	ねらいと学習活動	評 価
1	○ねらい：材料に対する関心をもつ。 ・粘土をさわってみる。 ・土玉をつくる。 ・土鈴のつくりかたを知る。 ○ねらい：用途に応じて構想を練る。 ・アイデアスケッチをする。	・粘土を自由に使って遊ぶ中で、素材の楽しさやよさを味わい、自分なりに意欲をもって取り組むことができる。 ・いつ、どこで、どのように使いたいかを考え、形や大きさを考えながらアイデアスケッチをする。
2 3 4	○ねらい：使用する場所や目的に応じた作品を作る。 ・土鈴をつくる。	・置く、吊り下げるなどの使い方を考えながら大きさや形に注意して土鈴をつくる。 ・伸ばす・つなぐ・削る・ならすなど粘土の特徴を生かしながらつくる。
5	○ねらい：筆や道具を使い工夫して着色する。 ・焼きあがった土鈴に色をつける。	・自分なりに筆や道具を使い工夫して着色できる。
6	○ねらい：自分と友達の作品の違いやよさに気付く。 ・土鈴発表会をする。	・友達の表現の工夫や、自分の作品との違いを見付けることができる。

(4) 学ぶことの関心・意欲を高めるための指導と評価の工夫

ア 題材設定の理由－魅力ある素材との出会い

図画工作で扱う素材は多種多様にわたっている。最も身近な紙を取り上げても厚さ、形状、材質など種類が豊富である。その他にも、木材、布、金属、粘土など数え切れないくらいの素材があるが、子どもは、授業で手にした素材に好奇心をもちながら興味・意欲をもって活動に取り組んでいく。その素材そのものの魅力を子どもに感じとらせることによって意欲をもたせ、更に効果的な支援・指導を通して学ぶ意欲を育てていくことのできる取組が必要である。

イ 時間設定の工夫－製作活動の時間を柔軟に

3時間（業間休みも含む）をあて、完成まで一気にやるという学習計画が、子どもの学習に対する意欲の高まりに資するであろうという仮定のもとに行った。A児のように、「ゆっくりいろいろ考えながらつくるのが楽しかった。」「つくってはつぶして、つくってはつぶして、いろいろな形をためしながらつくって楽しかった。」といった感想が出てきたのは成果の一つと考えられる。

ウ 導入の工夫－粘土遊びによる意欲付けと土玉づくり

導入に1時間を当て自由に粘土遊びをすることで、粘土という素材のよさに触れる機会を設けた。構想や制作方法について知る前に、まず、粘土という素材そのものに触れ心地よい感触や何度でもつくり直せるといった安心感を得ることができた。

粘土遊びの終わりに数種類の大きさに土玉をつくり、乾燥させておいた。これは次時で使う土鈴の土玉になる。（図3）



（図3）

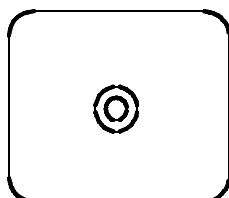
エ 用具の工夫－思いを実現するための用具の開発

穴を開けるのに、普通はかきだしべら等を使うのが一般的であるが、今回は朝顔などを育てるときに使う支柱を適当な大きさに切断し、バリをとった上で穴あけ具として使ってみた。支柱は適度な硬さがある上、中が空洞になっているので粘土に差し込んだ際に余計な部分が空洞に残りきれいに取り去ることができる。反対側も使って2箇所、また2本使って3箇所、4箇所と自由に穴を増やすことができる。さらに、中の土玉を包んだ新聞紙に支柱が当たることによって確実に貫通させることができる。

支柱に限らずパイプ状のものがあれば、土玉の大きさを確認しながら使ってみるとよい。

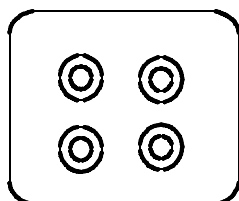
新聞紙が、端に寄っている場合でも間違えて開けた部分を埋め戻すことも容易にできる。横長の穴を開けたい場合も、へらを使い時に比べて非常に短時間で美しく仕上げることができる。（図4）

支柱を使って穴を開ける



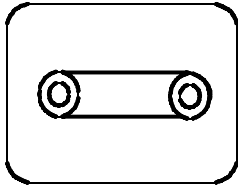
1箇所開ける。

小さい穴は灰が出しにくく、音も出にくい。土玉より大きい穴は焼きあがった後、土玉が落ちる。



数箇所開ける。

1箇所よりは灰が出しやすくなり、音も出やすくなる。作品の形によっては包んだ新聞紙まですべて穴を通すことが少し困難。



(図 4)

2箇所の間をへらなどでかきだす。

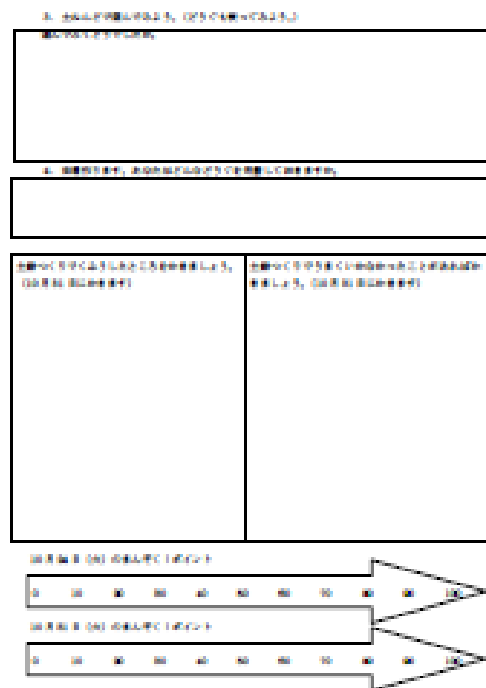
土鈴の穴としては一般的な形であるが、へらだけで開けるよりは作業がしやすい。また、穴を連続させることで大きな穴を開けることも可能。

オ 評価

子ども自身が自分の学習について振り返る活動を取り入れることは、非常に大切である。今回「オリジナル土鈴カード」を使い、各段階の最後に自分の活動を振り返り、子ども自身が今日の学習について満足感や達成感を味わうことができた。(図 5)

また、子どもが相互に評価し合い、認め合うことによって、更に次時への意欲が高まった。



教員は、子どもが自分や友達のがんばりや工夫を見付け合ったり、認め合ったりできるように、支援しなくてはならない。個性あふれるアイデアや工夫があれば全員の前で紹介したり、できあがった作品について感想を出し合ったり、認め合ったりする場を設定する機会をもつことが、学ぶことへの関心・意欲を高めることになる。





(図 5)

(5) 指導の実際

ア 本時の目標 粘土のよさを感じながら、自分なりに工夫して土鈴をつくる。

	児童の活動	指導上の留意点	評価
〈事前〉	・粘土を選ぶ	○焼成した2種類(赤・白)の粘土を見せ、焼き上がりのイメージがわかるようにする。	
〈導入〉	1 粘土をさわる。 2 大きさや形の違う土玉をいくつかつくる。	○粘土に関心をもてるようにする。  ○土鈴の中の土玉になることを伝える。	(関心・意欲・態度) 粘土に関心をもち、楽しみながら粘土の特性を利用して活動している。
〈発想〉	3 土鈴の製作方法について理解する。	・掲示物や土鈴の写真を使い、製作のポイントがわかるようにする。	
〈製作〉	4 アイデアスケッチをする。 ・飾る場所を考えながら自分の発想を形にしていく。 5 アイデアスケッチを基に製作する。 ・友達の工夫点を参考にする。 ・自分の工夫点を紹介する。	・具現化が可能かどうか、アドバイスする。 ・土鈴の接地面を平らにしたり、紐つけ部分の厚さ穴の大きさについてアドバイスする。 ・発想が広がりにくい子どもや構想につながっていきにくい子どもについては、個別に声かけをするようにする。 ・アイデアスケッチに朱でアドバイスを書き込み、製作時に参考にできるよう支援する。 ・割れやひびがないか教師が点検する。 ・粘土の乾燥によるひび等が現れた作品には、水やどべで適宜補修してい	(発想・構想の能力) 用途に応じて大きさや形を考えることができる。  (創造的技能) 伸ばす・つなぐ・削る・ならすなど目的に応じた製作方法を使うことができる。

	<p>6 焼きあがった土鈴に着色し、必要に応じて紐をつける。</p>	<p>くようアドバイスする。</p> <ul style="list-style-type: none"> 途中でよいアイデアが浮かび変更したり、技能面で工夫が見られたりした子どもや作品は紹介する。 焼きあがりの色に応じて自由に色を変えられることを紹介する。 色を決める際は試し板を利用するなどして色を決めるようアドバイスする。 <p>(試し板は教師が余った粘土で作成しておく。)</p>	 <p>(技能)</p> <p>自分なりに筆や道具を使い工夫して着色できる。</p> 
<p><鑑賞></p>	<p>7 作品を展示し鑑賞する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 実際に音を鳴らしてみ、音色を楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> 据え置き型や吊り下げ型などに応じて展示方法を工夫する。 4、5人の人に発表してもらう。 	<p>(鑑賞)</p> <p>友達の表現の工夫を見付け、自分の作品との違いを見付けることができる。</p>

(6) 活動内容の分析

学ぶ意欲が高まった子どもの活動内容をパターン別に分析する。

◎ 時間の余裕が学ぶことへの意欲を高めた事例

～過去の経験や前時の粘土遊びから、粘土の特性を生かしてつくっていった子ども～

(A児) 粘土遊びの感想

「こねたり、のぼしたり形をつくってみたりしてとても楽しかった。」

6つの候補をかき、最終的に土鈴にふさわしいものを選んでいった。リングにしなかったのは、A児の思い(自分だけの土鈴にしたい。)と時間に余裕があったからである。

後日、A児に「2時間の図工だったら、この作品をつくっていたかな。」と聞いたところ「うーん。ちょっと難しかったかも。」という返答であった。

あえて、豊かな発想力のあるA児には発想、構想段階時の支援は少なくし、製作段

階において作品が平面化する恐れのあるときの助言を中心に行う計画であった。特に、この学級のアイデアスケッチの時点で、作品が平面化する可能性のあるものがかなりあったが、A児についても製作初期段階で助言が必要と思われた。

A児にとって（4年生にとって）、決して容易ではない形の作品に挑戦できたことは、これからの図画工作の学習に対しての新たな意欲となっていくと考える。

作品は安定した据え置き型のクマの土鈴になり、「きらきらカード」でも友達から高い評価を受けた。



ゆきり、いろいろかんがえながらつくるのがとても
たのしかったです。つくってはつぶして、つくってはつぶして...
いろいろな形をためしながらつくって、よかったです。
ほのかあや、玉をねん土でつくつものがむすか
しかったです。耳もむすかしかったです。

- ◎ 自分のつくりたいものが、粘土でできるかどうか失敗を恐れずチャレンジした事例
～途中でより高度な作品に変更していった子ども～

(B児)

図工室の展示棚に飾られているイルカ型の土鈴が印象的であったが、さくらんぼの土鈴を第1候補に挙げたB児。土鈴の参考画像で鈴の部分が複数ある作品を目にしたことで更につくってみたくなったようである。

アイデアスケッチに強度を付けるためのアドバイスを事前にいくつかメモしておいた。自分がつくろうとする作品について、つくる前にアイデアスケッチに目を通した際、アドバイスが朱書きされていれば目に留まりやすく、安心して作り始めることができる。

B児は初め、りんごの土鈴をつくり始めた。ある程度の形になったところで、時間に余裕もあったことで気になっていたさくらんぼをつくり始めた。（基本は球形なのでりんごの部分が共用できた。）

製作段階でもう一度助言をした。

T：「さくらんぼの実どうしを、つけておくと強くなるんじゃないかな。」

B：(納得)

T：「茎の部分も少し太めにつくっておくと、安心だね。」

B：(太くなるのは仕方ないと納得)

T：「つり下げて使うのかな。」



B：「置いて使います。」

T：「じゃあ、倒れないようにしておく必要があるね。底を平たくしておくといいよ。」

最後に実の部分、軽くぬらした手で磨き満足いく作品に仕上がったようである。できあがったときの感想をカードに書ききれないくらい楽しそうに書き込んだ姿も印象的であった。

◎ 粘土遊びを通して意欲が高まった事例

(C児)

導入段階で詳しく構想が立てられず、次時の製作段階に入ったC児。粘土で遊ぶのはとても面白いようで、感触を楽しみながら粘土遊びをしていた。「まず、土鈴の本体をつくってみよう。」とアドバイスすると、土玉を新聞紙でくるみ、周りを粘土で包むことができた。



次の段階として、できあがった土鈴の本体を見て、「何に見えるかな?」「これに何か付けてつくれないかな。」とアドバイスをし、具体物を目の前にして発想・構想を支援する形をとった。

最後は、球形の本体に丸い粘土をかぶせたカップの顔が時間内にできあがり、本人も満足げであった。

(7) 成果と今後の展望

今回の研究で、身の回りにある様々な素材に教員が目を向け、素材の魅力を感じた子どもが「やってみたい」「楽しそう」と思うような題材を取り入れていく必要性を感じた。また、導入段階で、素材を一度自由に触らせるような展開を取り入れて、自分の作品に対するイメージを膨らませることによって製作意欲が高まり、次の時間が待ち遠しくなるようになることも分かった。また、学習活動全体を通して、子どもの活動を認めた上で、個々に応じた適切なアドバイスをすることが一人一人が最後まで意欲をもって活動するために大変重要であることを改めて感じた。更に教員からのアドバイスばかりでなく、学習プリントを使い、子どもが相互に情報交換したり、認め合ったりするような活動を取り入れることで、更に発想が高まり、製作意欲が高まっていくと考える。

今後、様々な素材の魅力を感じ、一連の学習活動の中での学ぶことへの関心・意欲が高まるよう題材を工夫していく必要がある。

また、発想・構想段階でキャラクター等しか思い付かない子どもに対し、学習カードの工夫や題材提示の工夫等、子どもの一人一人の自分らしい豊かな発想を広げるための指導の在り方についても、更に研究を進めていきたい。

第6節 家庭

1 基本的な考え方（家庭科における学ぶことへの関心・意欲を高める指導の実際）

(1) 学習指導要領の基本概念

学習指導要領において小学校家庭科の目標は次のとおり示されている。

衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、家庭生活への関心を高めるとともに日常生活に必要な基礎的な知識と技能を身に付け、家族の一員として生活を工夫しようとする実践的な態度を育てる。

この目標にある「実践的な態度」をはぐくむために、家庭科では実践的・体験的な学習活動を重視するとともに、子ども自身の身近な実生活とのかかわりや家庭との連携を重視している。例えば、学習内容として主に家庭生活に焦点を当て、調理や製作などの直接体験による具体的な学習を展開し、家庭生活への関心を高めるとともに、必要な基礎的な知識と技能を身に付け、それらを活用して、家族の一員として家庭での実践が無理なく行われるように題材の構成や家庭との連携を工夫するということである。

平成17年10月の中央教育審議会答申「新しい時代の義務教育を創造する」では、学力については、基本的な理念・目標に次のように示されている。

現行の学習指導要領の学力観について、様々な議論が提案されているが、基礎的な知識・技能の育成（いわゆる習得型の教育）と、自ら学び自ら考える力の育成（いわゆる探求型の教育）とは、対立的あるいは二者択一的にとらえるべきものではなく、この両方を総合的に育成することが必要である。

まず第1に、ここで示されている基礎的な知識・技能の育成と、自ら学び自ら考える力の育成の関係を明確化することが大切である。（図1）

例えば、「食事づくりを学ぶ」という題材でも、食事づくりをそのまま学ぶということと、考える力を対応させて、食事づくりを通して、どういう力を身に付けさせるのかを明確にすることが大切である。基礎的な知識・技能の育成とともに、自ら学び自ら考える力の育成につながる力を明確にして、一つの題材の中で、習得型の教育と探求型の教育を、

全体的にどういうバランスで組み合わせていけばよいかということ、明確にしながら題材を構成していくということが大切といえる。

第2に、家庭科の学力の育成は、図2に示されている「基礎的・基本的な知識・技能」「知識・技能を生活に活用」「課題を探究する活動」の三つの要素が、双方向に関連していると考えられる。

「基礎的・基本的な知識・技能」を確実に身に付けることで、それを「生活に活用する力」やもっと学習してみたいという意欲につながる。実際に家庭生活上で学んだ力を活用して「課題を探究する活動」を行うことで、基礎・基本が定着したり、あるいは、もっとやってみようという学ぶ意欲の向上につながったりする。双方向の関係を明確にしながら、学習指導を工夫していく必要がある。

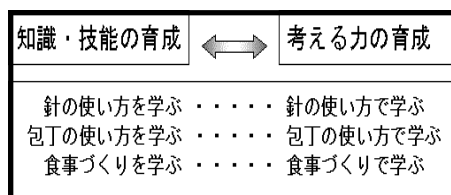


図1 関係の明確化

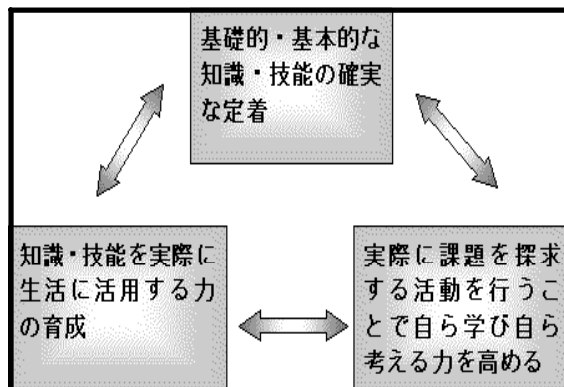


図2 確かな学力の育成

図3は家庭科の学力を示したものである。家庭科における学力とは、生活と結び付いた資質・能力を様々な生活場面に応用できる力である。それは、どれだけたくさんの知識・技能を身に付けているかということではなく、それを生かして何ができるかということが重要なポイントになってくる。

家庭科で育てる資質・能力を観点別にとらえると、「家庭生活への関心・意欲・態度」「生活を創意工夫する能力」「生活の技能」「家庭生活についての知識・理解」の四つである。衣食住などに関する実践的な態度を育てるための基盤としての「知識・理解」「技能」と、家庭生活への関心を高めて、

家族の一員として生活を工夫しようとする「創意工夫する能力」について、内容のまとめりと具体的な評価規準で、相互の関連性や順序性を明確にすることが「習得型の教育」と「探求型の教育」のバランスを図り、総合的に力を高めていくことにつながると考えられる。

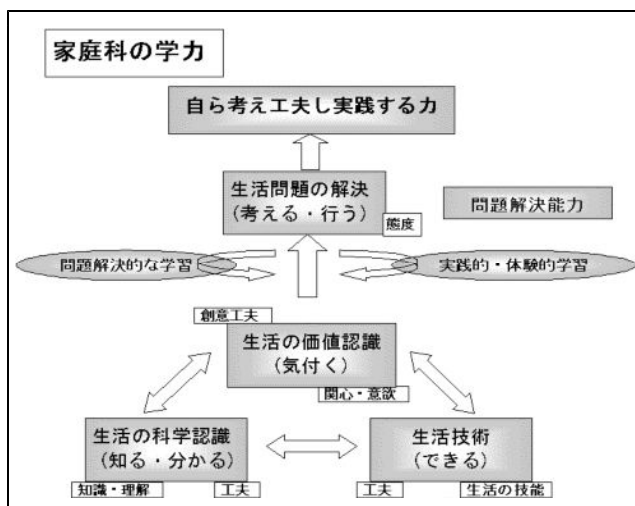


図3 家庭科の学力

(2) 学ぶことへの関心・意欲を高める指導方法の工夫

ア 子どもが自ら学習の主体となる指導の工夫

学ぶことへの関心・意欲を高めるためには、子どもが自ら学習の主体となる指導を工夫することが大切である。「押し付けられたものではなく、自らが必要とするものだ。」という認識をもつことができれば、学ぶ意欲が持続する。その後、更に満足感や充実感が得られ、次の学習への意欲付けになる。主体的に学ぶ姿勢こそが、実生活において生活を工夫しようとする意欲や実践的な態度へとつながっていくと考えられる。

イ 家庭生活や家族への関心を高める指導の工夫

家庭科は家庭生活を主な学習対象としていることから、家庭科の学習に関心をもつようになるためには、家庭生活や家族に関心をもたせるようにすることが第一である。子どもの生活体験や家庭生活の在り方、またそれらに対する考え方は一人一人異なるものである。子どもの実態を把握し、学習と家庭生活の実際を関連付けて、題材を設定する。更に、個に応じた指導の一層の充実を図り、子どもが生活を見つめて課題を見付け、問題解決のために実践的・体験的な学習を通して学んでいけるように、子ども自身が見通しをもって学習できる工夫が必要である。

ウ 問題解決的な学習、実践的・体験的な学習活動を重視する指導の工夫

図3で示したように、家庭科では問題解決的な学習や実践的・体験的な学習活動を繰り返して行うことを重視している。学習活動としては、「人に教えることのできる活動」「自分でできる体験的な活動」「友達と交流して学べる活動(グループ活動)」などがあり、製作や調理などの実習だけでなく、学習の一部分を実験的に試してみる、聞き取り調査を行う、観察するなど、学習活動を広げるようにする。しかし、問題解決的な学習を中心に据えた授業の中で、調べたり発表したりする時間を重視するあまり、身に付けるべき基礎的な知識・技能の習得のための時間が十分に確保できていない場合がある。学習が単に活動することに終わらないよう、学習のねらいを明確にしておく必要がある。

(3) 学ぶことへの関心・意欲を高めるための教材開発の在り方

家庭科の学力を高めていくためには、子どもの学習に対する興味・関心が高まるような題材設定が必要である。そのためには、実生活に関連し、実践的・体験的な学習活動を多く取り入れた題材を設定し、自分の生活に生かそうとする意欲や態度を育てることが大切である。

ア 子どもの日常生活との関連に配慮

前述したように、家庭科の目標である「家族の一員として生活を工夫しようとする実践的な態度をはぐくむ」ためには、一人一人の子どもの日常生活と密接にかかわっている題材を構成していくことが大切である。学習を通して「自分のためになる」「すぐに役に立つ」「将来の生活に役立つ」といった自己有用感などの学びの意義を実感できることが、子どもの学ぶことへの関心・意欲を高め、主体的な学び（問題解決的な学習）へとつながっていく。学びを高め、持続させるためには、学校で学んだことを、適切な時期に家庭生活等で実践できる機会を組み込み、学習が実際の生活の場面で生かせるようにすることが重要である。

イ 達成感が得られる題材の工夫

「できる」「分かる」「生活に役に立つ」といった達成感を得ることが、学ぶことへの関心・意欲を高めるためには大切である。基本的な知識・技能などの習得とともに達成感を得られる題材を工夫することが大切である。

ウ 家庭と連携を図ること

学校で学習したことを家庭で実践することは、学習したことをその場限りで終わらせず、主体的に学ぶ意欲を継続させるという意味で、大変重要である。そのためには、学校での学習状況を絶えず家庭に伝え、家庭での実践状況を学校に伝えてもらうなど、家庭との連携を密に行い、子どもに家族の一員としての実感をもたせることが、更に学ぶ意欲の向上につながるものと考えられる。

(4) 学ぶことへの関心・意欲を高めるための評価の在り方

学力については知識の量のみでとらえるのではなく、学習指導要領に示された基礎的・基本的な内容を確実に身に付け、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」がはぐくまれているかどうかを、とらえていかなければならない。このため、評価は学習指導要領が示す目標に照らしてその実現状況を見る「目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）」（参考：国立教育政策研究所『評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料』）を一層重視することが大切である。更に、子どものよい点や可能性、進歩の状況などを評価する個人内評価を工夫することが重要である。

家庭科では、学習活動として実験・実習が重視されている。こうした学習における子ども一人一人の的確な到達状況の把握が必要不可欠である。自己評価、相互評価、指導者による評価等、多様な評価方法を組み合わせて客観的な評価を工夫することが必要である。

指導者は、子どもの一人一人のよい点や進歩の状況などを共感的にとらえながら、積極的に認め、更に励ましたり支援したりする、いわゆる指導と評価の一体化が重要である。また、子どもが改善を図ろうと意欲を喚起できるように、評価の結果を分かりやすく伝えることが大切である。そのことが、子どもたちの学ぶ意欲が高まり、個性の伸長を図ることにつながると思われる。更に、指導の過程や成果を評価し、指導の改善を行い、学習意欲の向上に生かすようにしたい。

家庭科における評価は、家庭科の目指す目標を家庭での実践にまで広げていることもあり、家庭における実践状況も評価する必要がある。家庭との連携の中で、家庭における実践に対する評価の在り方は今後の課題といえる。

参考・引用文献

- | | | |
|------------------------------------|-------|-----|
| (1) 小学校学習指導要領解説 家庭編 | 文部省 | 平11 |
| (2) 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「審議経過報告」 | | 平18 |
| (3) 中等教育資料（平成18年11月号） | 文部科学省 | |
| (4) 中等教育資料（平成19年1月号） | 文部科学省 | |

2 事例 (学ぶことへの関心・意欲を高める学習の指導事例)

事例 第6学年「物や金銭の使い方と買物」

1 単元の構想

子どもも一人の消費者である。生活が多様化・複雑化する中で、消費生活をめぐる環境は、児童にも大きく影響しており、彼らをターゲットにした産業も盛んになってきている。児童の周辺には、商品があふれ、必要な品物を選ぶのに苦労することも少なくない。買いやすい価格の100円ショップやかわいい商品が並ぶファンシーショップなど、児童にとって魅力のある店が多くある。このような状況の中で、買物の仕方に関心を持ち、自分にとって必要な物かどうかを判断し、よりよい買物ができる力を身に付けさせたいと思う。

家庭科は、家庭生活への関心を高めるとともに、日常生活に必要な基礎的な知識と技能を身に付け、家族の一員として生活を工夫しようとする実践的な態度を育てることを目指している。学習への関心・意欲を高め、自ら学び自ら考える力を育てるには、生活に結び付いた実践的・体験的な活動を通して学ぶことが効果的であると考え。

本校6年生は、56%の児童が一定の金額の小遣いをもらっている。しかし使い方については、ほとんどが親と相談してから購入しており、自分で判断して小遣いの使い道を決めている児童は少ない。残りの児童は、小遣いをもらっていない、又は、もらっているが額が決まっていない。これらの児童は、自分が必要とする物については、家族と一緒に買いに行ったり、頼んで買ってもらう場合が多い。小遣いを「もらっている」「もらっていない」にかかわらず、自分で必要な物を選んで購入するという経験のある児童は少ないといえる。

学習指導要領の内容(7)「物や金銭の使い方と買物」の学習では、身の回りの物や金銭の計画的な使い方を考え、適切に買物ができるようにする。更に、消費者として主体的に日常生活で実践できるようにするための素地を育てておくようにする。また、内容の取扱いについては、「買物の学習は、実際に、物を選んだり買ったりする体験が効果的である。」としている。

そこで、児童にとって大変楽しみにしている学校行事の一つである修学旅行の費用や小遣いを題材に、本単元を展開しようと考えた。実際に、児童が自由に使うことのできる3,000円の修学旅行の小遣いをどのように使うか計画を立て、旅行先で品物を選んで購入し、旅行後に、買物についての振り返りを行うという指導計画を立てた。振り返りの中で出てきた様々な課題は、今後の生活の中で購入の際に生かすことができるような力を育てたい。

また、児童の身の回りにある物を見直し、使われていない物や不要になった物について、工夫して計画的に使うことができる力を身に付けさせたい。

物や金銭の使い方と買物についての学習は、児童の生活に密着していて大切な内容であるが、学校生活の中において実際に商品を購入するなど体験的な活動はできない。しかし、計画したことを実際に体験することで、児童たちの学ぶ意欲を高め、実践力を身に付けることができる。修学旅行を家庭科の学習の一部に位置付け、身近な実践を通して、金銭や物の使い方について学習を深めたい。

2 題材の目標

- 金銭や身の回りの物の使い方を見直し、計画的によりよい買物をしようとする態度を育てる。
- 金銭や物の使い方を自分の生活とのかかわりで考えたり、工夫したりする。
- 購入しようとする物の品質や価格などを調べて、目的に合った物を選んで適切に購入したり、身の回りの物を有効に活用したりすることができる。
- 金銭や物を計画的に使う大切さや適切な購入の仕方が分かる。

3 題材の評価規準及び具体例

学習指導要領の内容

(7) 身の回りの物や金銭の計画的な使い方を考え、適切に買物ができるようにする。

ア 物や金銭の使い方を自分の生活とのかかわりで考えること。

イ 身の回りの物の選び方や買い方を考え、購入することができること。

評価規準

		ア 家庭生活への 関心・意欲・態度	イ 生活を創意工夫 する能力	ウ 生活の技能	エ 家庭生活につ いての知識・理解
題 材 の 評 価 規 準		身の回りの物や金 銭の計画的な使い 方に関心をもち、 適切に買物をしよ うとしている。	身の回りの物や金銭 の使い方を見直し、 計画的な使い方と適 切な買物について考 えたり、自分なりに 工夫したりしている。	身の回りの物や金 銭の計画的な使い 方と適切な買物に 関する基礎的な技 能を身に付けてい る。	身の回りの物や金 銭の計画的な使い 方と適切な買物に ついて理解してい る。
学 習 活 動 に お け る 評 価 規 準	お 金 の 使 い 方 を 考 え よ う	①自分の生活とのか かわりから、物や 金銭の使い方に関 心をもち、 ②身の回りの物の 選び方や買い方 に関心をもち、 適切に買物をし ようとしている。	①自分の生活とのか かわりから、物や 金銭の使い方考 えたり自分なりに 工夫したりしている。 ②購入しようとする ものの品質や価格 などを調べて、目 的に合った適切な 買物ができるよう に自分なりに工夫 している。	①目的に合った品 物を選んで計画 を立て、適切な 買物ができるこ とができる。	①目的に合った物 の選び方や金銭 の計画的な使い 方と適切な買物 の仕方が分かる。
	物 の 使 い 方 を 見 直 そ う	③身の回りの物の 使い方に関心を もち、計画的に 使おうとしてい る。	③不要になった物を 再利用するなど、 身の回りの物の使 い方を考えたり工 夫したりしている。	②身の回りの物を 有効に活用する ことができる。	②身の回りの物の 有効な活用の仕 方が分かる。

4 指導と評価の計画

時	学習内容	評価規準との関連			評価の方法	
		ア 家庭生活への関心・意欲・態度	イ 生活を創意工夫する能力	ウ 生活の技能		エ 家庭生活についての知識・理解
お金の使い方を考えよう	日常生活におけるお金の使い方 ○児童が使っているお金の、何を買っているか話合おう。ためには、どんなことにお金を使っているか考える。 ○家族の生活の時間を考える。 ○物を買う時、どのように購入までの意思決定するか、買い物シミュレーションをして考える。	① 自分の生活とのかかわりから、物や金銭の使い方に関心をもっている。				発表内容 ワークシート
	計画的なお金の使い方 ○家庭生活で、どのようなことにお金を使っているか、まとめる。 ○生活を支えるお金の、どのようにして得ているのかを調べる。 ○これまでの買い物の仕方を振り返る。 ○計画的なお金の使い方について考える。 (本時)	① 自分の生活とのかかわりから、物や金銭の使い方に関心をもっている。 ② 身の回りの物の選び方や買い方に関心を持ち、適切に買物をしようとしている。	① 自分の生活とのかかわりから、物や金銭の使い方について工夫したりする。			ノートの記入 発表内容 行動観察 ワークシート
	買物の計画 ○お土産リストとパネルを見て、買いたい品物を選び、値段を調べる。 ○お金を計画的に使う買い物の仕方について考える。 ※修学旅行の小遣い(3,000円)の使い方について考え、計画を立てる。	② 身の回りの物の選び方や買い方に関心を持ち、適切に買物をしようとしている。	② 購入しよとす品物の価格を調べる。適切な工夫をしようとする。	① 目的に合った品物と購入の計画を立てることができる。		行動観察 ワークシート
	目指せ！買物名人 ○修学旅行で買物をする。 [課外]					
	修学旅行の買物を振り返って ○購入した品物について、計画的に買物ができたかを振り返る。 ○購入予定を変更した品物については、その理由も考えながら振り返る。 ○残金の使い道を出し合い、日常生活でお金を計画的に使う買い物の仕方について考える。			① 目的に合った品物を選ぶことができる。	① 目的に合った物の選び方や金銭の計画的な使い方が分かる。	ワークシート 発表内容
	身の回りの物の使い方 ○自分の持ち物を調べて、気付いたことを発表する。 ○持ち物を見直し、問題点を話し合う。 ○物の一生について考える。 ○物の使い方を見直し、これからの生活に生かしていくことを考え、発表する。	③ 身の回りの物の使い方に関心を持ち、計画的に使おうとしている。	③ 不要になった物を再利用するなど、身の回りの物の使い方を考えた工夫したりしている。	② 身の回りの物を有効に活用することができる。	② 身の回りの物の有効な活用の仕方が分かる。	発表内容 ノート

(3) 学校生活における買物の学習

買物を体験させるには、製作用の布の購入、調理に用いる食品の購入など、幾度かの機会がある。しかし、今回は、修学旅行の買物を教科の学習に位置付け、展開することを試みた。それによって、児童はより主体的・意欲的に適切な買物をすることができると考えた。

(4) 家庭との連携

日常生活でのお金の使い方については、様々なところにお金が必要だということをより理解させたいと考え、家庭での聞き取り調査を取り入れた。また、自分の日常生活とのかかわりの中でお金の使い方を知ることで、お金の大切さや家族の役割、児童もその一員であるということをより明確にすることができると考えた。また、修学旅行前には、家族の意見を参考にすることができると考え、買物計画とお土産リストを家庭に持ち帰らせた。

(5) 学校長、担任教員の協力と連携

修学旅行下見の折、6年担任教員に、商品の写真と、お土産リストを依頼し、買物計画の資料として使用した。(表1)(図3)(図4)

また、児童が書き込んだ修学旅行の買物計画のプリントや、修学旅行の買物の様子を校長通信(前栽ステップ・アップ・ジャンプニュース)や学級通信に取り上げてもらい、家庭科での取組や児童の様子を家庭に知らせた。(図5)(図6)

表1 お土産リスト

商品名	定価	割引後	
鶴餅 せんべい (10枚入)	320	290	
〃 (5枚・7枚)	530	490	
ふく 饅頭	690	570	
ふくふく フォコランド (5個入)	590	490	
やまぼう パネー フォー (12枚)	320	290	
〃 (40枚)	530	490	
山姥 だんご (5串)	250	230	
〃 (12串)	630	570	
ふくふく あわせたはご (9個)	690	570	
ふくふく 味郎 (6個)	390	350	
月まわり 玉卵 (4個)	550	500	
夏みかん ちりメル	150	140	
夏みかん ぶらっ	250	230	
もみじまんじゅう (10個)	530	450	売店
〃 (5個)	1050	900	売店
きーホルダー	350	320	
〃	370	330	
〃	420	380	
〃	450	410	




図3 お土産 写真



図4 授業の様子

(4) 本時の展開

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	評 価 規 準	評 価 の 方 法 等
<ul style="list-style-type: none"> 家庭生活に必要な支出についてまとめる。 生活を支えるお金は、どのように手に入れているのかを考える。 これまでのお金の使い方振り返り、よかったことやよくなかったことを話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> 家庭生活に必要な支出について、家族に聞いたことを発表させ、確認させる。 日常生活でお金がいろいろなところに使われていることに気付かせる。 家族が働いて得たお金は、大切に使うわけにはいけないことをおさえる。 児童の家庭が様々であることを踏まえ、慎重に扱うようにする。 まとめ買いや無駄、賞味期限切れなど、買物での成功例や失敗例、その理由について具体的に思い出させる。 意見が出ないときは、バーゲンやまとめ買いなどの例を挙げ、自分の家でどうか振り返らせる。 	<p>自分の生活とのかかわりから、物や金銭の使い方に関心をもっている。</p> <p>(関心・意欲・態度ア-①)</p>  <p>自分の生活とのかかわりから、物や金銭の使い方を考えたり自分なりに工夫したりしている。</p> <p>(生活を創意工夫する能力イ-①)</p>	<p>ノートの記入 発言 活動の様子</p> <p>話し合いの様子 ワークシート</p>
<ul style="list-style-type: none"> 計画的なお金の使い方について考え、発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> お金を計画的に使うことができるよう考えさせる。 必要度や品物の選び方、買い物の方法、支払いの仕方なども具体的に知らせる。 	<p>身の回りの物の選び方や買い方に関心をもち、適切に買物しようとしている。</p> <p>(関心・意欲・態度ア-①)</p>	<p>活動の様子 発言</p>



(5) 授業を終えて

児童が意欲的に学習を進められるように、家庭生活に必要なお金について、家庭での聞き取りをさせ、積極的に発言できるようにした。学級の全員が発表できるよう、十分時間をとった。児童は、家庭で聞いてきたことや、自分の考えたことをしっかり発表できた。その中で、保険、ローン、電気代、水道代、ガス代、通信費などがあげられ、家庭で必要なお金には、実際に物を購入する以外

にも使われていることが確認できた。また、生活を支えるお金は、どのようにして手に入れているかを考える活動では、収入を得る人とそれを支える家族、それぞれの役割について触れ、児童もその一員であることを押さえることで、家での自分の役割を自覚させたいと考えた。

買物の成功例や失敗例は、指導者の体験を話したが、家庭からの情報を集めておくと話合いがよりスムーズに進行したのではないかと思う。また、お金の使い方を振り返る活動では、品物の値段（安さ）に話が集中してしまった。あらかじめ、新聞広告やカタログショッピング、インターネットなど、いろいろな買物の方法を知らせておく、更に話合いが深まったのではないかと思った。

7 成果と課題

学習内容(3)「生活に役立つ物の製作」や(5)「簡単な調理」などの学習には、児童は意欲的に取り組んでいる。それは、主体的に活動できる場面が多く、実習の進度が目に見え、達成感もあるからだと考えられる。一方、(7)「物や金銭の使い方」の学習は、前述したように、学校生活で実際に体験することがあまりなく、知識の習得になりがちである。その中でも、児童の学ぶことへの関心・意欲を高めることができるように、学習内容を分かりやすくし、体験的な活動を取り入れることが必要であると考えた。

第1時「日常生活におけるお金の使い方」、第2時「計画的なお金の使い方」では、小遣いの有無やお金の使い道など、生活に密接した課題を設定した。それにより、児童は日ごろの生活を振り返り、自分の生活とのかかわりから身近なこととして考えることができた。そして、聞き取り調査や発表、話し合い活動など、学習形態の工夫と合わせて、それぞれが自分の意見をしっかりと持ち、活発に発言することができた。また、友達の意見についても、自分の考えと比べながら興味をもって聞くことができた。特に、聞き取り調査では、児童の知っている範囲を超えて、お金の価値観や収入の方法、働く人とそれを支える家族について考えさせ、自分も家族を支える中の一人だということを実感させることができた。また、それぞれの意見をまとめた掲示物(図1)により、児童は、「今、何を学習しているのか」が具体的に分かり、自分の考えがまとめやすくなったと考える。「これ、何組の意見?」「そうそう、めがねもいるなあ」など他のクラスの意見を参考に考えを深めていた。

第3時「買物の計画」では、お土産リスト(表1)と写真パネル(図3)を準備して掲示した。お土産の品物の写真を見ることで、児童は、お土産をイメージだけでなく、より具体的に考えることができたようである。予算を工夫し、友達と意見交流をしながら意欲的に計画することができた。「2人の残金で象のえさを一緒に買って半分ずつにするねん。」とか、「6人でクラブのお土産を買うことにした。」など、相談しながら自分なりに買物を工夫する姿も見られた。また、買物計画とお土産リストを家庭に持ち帰らせたことで、家族と相談し、渡そうとする人の好みなどに合わせて計画を見直す児童もいた。また、第5時の「修学旅行の買い物を振り返って」では、買物に満足していた児童が多く、計画の変更が必要だった場合も、うまく変更できた児童がたくさんおり、自分の買物をしっかりとすることができていた。旅行先では、あまり悩むことなく、短時間でてきぱきと買物ができたようであった。

まとまった金額での買物経験がほとんどない児童であったが、感想には、「おみやげをみんなにわたしたら、よろこんでくれた。」「3,000円でみんなのおみやげを工夫して買うことができた。」「いろいろな思い出に残せるものが買えてよかった。」「計算して予定どおりの買物ができた。」など相手のことを考えて計画した買物に満足感があふれていた。

振り返りシートを家庭に持ち帰らせると、家族の方から丁寧な感想が寄せられた。これも日ごろの家庭との連携の成果であると考えている。

- 「みんなのお土産にいろいろと悩んだようですが、決まったお小遣いの中から、上手に買物できたと思います。これからも買物は計画的にしてほしいと思います。」
- 「みんなのことを考えて上手にお土産を買って帰りました。3,000円という、まとまったお金を計画的に考えて使ういい勉強ができました。中でもちゃんと自分のものが買えてよかったです。」
- 「計画と異なった買物となりましたが、予算どおり残金もなく、しっかり買物ができました。自分の記念になるもの、いつもお世話になっている祖父母、おじへの土産も忘れず購入し、兄に対しても『食べる物』と『飾る物』と、品物選びをしっかりとできたように思います。自分で計算し、支払い、生活の一環である買物が一人でできたと考えます。これからも簡単な買物をしてもらおうと思います。」

このように、これからの生活に生かすことができるという意見もいただいた。家族に励まされ、応援されることで、児童の中には、一層意欲的に買物ができる素地が育っていくと考える。今後も家庭との連携を大切にしていきたい。

以上のように、体験活動の学習への位置付けを工夫し、修学旅行を買物の学習の場に設定して、本単元を展開した結果、児童は、学ぶことへの関心・意欲を高め、主体的に学習を進めることができたと考えられる。

しかし、「あらかじめお土産の品が分かってしまうと、せっかくのお土産選びの楽しさがなくなるのではないか。」という意見も寄せられた。これは、今回の学習の意義や指導者のねらいを家庭へ知らせるのが不十分であったためと思われる。今後は、学習の目的や児童の活動についても、事前に家庭にも知らせる方法を考えていきたい。

児童は、物や金銭を計画的に使う大切さや、適切な購入の仕方が分かり、買物体験を通して、適切な購入をすることができた。しかし、購入する物の品質や価格などを調べて、目的に合った物を選んで適切に購入したり、身の回りの物を有効に活用したりする力を身に付けるためには、今回の学習だけに限らず、繰り返し体験することが必要である。3学期には、児童がお世話になった方への贈り物製作や簡単な会食を計画している。その実習材料を自分たちで購入させ、実際に物を選んだり買ったりする体験をさせ、更に効果をあげていきたい。また、日常生活においても、児童が買物の機会を多くもてるよう、家庭との連携を図りたい。



図7 授業の様子



図8 お金は何に使っているのでしょうか

参考・引用文献

- | | | |
|---------------------|-----------|-----|
| (1) 小学校学習指導要領解説 家庭編 | 文部省 | 平11 |
| (2) 金融教育ガイドブック | 金融広報中央委員会 | 平17 |

第7節 生活

1 基本的な考え方

(1) 生活科における関心・意欲・態度の特質

生活科の学習は、子どもが身近な人、社会、自然と直接かかわる活動や体験を通して行われる。また、生活科の学習は、自分と身近な人、社会、自然とのかかわりに関心をもつようになることを目指して行われる。子どもは、身近な人、社会、自然とのかかわる中で、様々な刺激を受け、「どうして〇〇なのだろう」「すごいね」「もっと〇〇してみたい」など、不思議に思ったり、驚いたり感動したりするなど、その刺激に対して、様々に反応する。この場合に感じる感情が「興味」と言われるものであり、その方向に向かって、対象に自ら積極的に働きかけようとする力が「関心」と言われるものである。更に、その方向に向かって活動に没頭したり、熱中したり、努力したりしてやり遂げようとする力が「意欲」と言われるものである。

子どもは人、社会、自然と直接かかわり合う中で、それらへの興味・関心・意欲を積み重ねながら、次第にそれらに対する「態度」を形成していくのである。つまり、「態度」は、その場限りのものではなく、かなり持続的なものであり、いったん形成されると長期にわたって持続される「対象や自分へのかかわり方」であると言える。

「生活への関心・意欲・態度」にはこのような特質があり、具体的な活動や体験を通すことや自分とのかかわりを重視する生活科では、こうした情意的な働きを大切にすることが必要である。

(2) 生活科における学ぶことへの関心・意欲の現状と課題

生活科における学ぶことへの関心・意欲の現状と課題について、国立教育政策研究所における「全国的かつ総合的な学力調査の実施に係る研究指定校事業（平成15・16年度）」の分析結果には、次のように示されている。

各学年とも、身近な人、社会、自然及び自分自身に関心をもち、進んでそれらとかかわり、楽しく学習や生活をしていると報告されている。「友だちを誘って意欲的に学校探検をする」「家族のために自分でできることを積極的にしようとしている」「地域の人に進んでインタビューしたり、メモをとったりしている」「継続して植物の世話をしたり、家の人に聞いてきたことを世話に生かしている」などの報告がある。「進んで～しようとしている」「意欲的に～している」「繰り返し～している」「夢中になって～している」など、活動に対する関心・意欲に関する報告は多い。

生活科の学習においては、子どもが自ら対象とかかわり、進んで学習しようとしているなど、関心・意欲は高まってきているものと考えられる。

しかし、一部には、「他のことに気持ちが向いて、活動に意欲的に取り組めない」「長期にわたる活動に意欲が持続しなかった」「活動を自分で決められない」などの報告もあり、指導の工夫・改善が求められている。

(3) 学ぶことへの関心・意欲を高める指導の在り方

ア 具体的な活動や体験活動の充実

生活科では具体的な体験や活動を通して学習することが重要である。それは、子どもの学習意欲を高める観点からも重要である。

具体的な活動や体験を通すということは、子どもが体全体で身近な環境に直接働きかけることであり、また、そうした活動の楽しさやそこで気付いたことなどを表現することである。

例えば、身近な自然を対象にした具体的な活動や体験を通した学習では、自然についての直感

的な特徴付け、比較、観察、関係付け等、また、そうして得られた考えを表現するなどの知的な活動が活発に行われる。更に、自然物の不思議さや面白さ、それを活用して遊ぶ楽しさなどに気付いた子どもは、身の回りの自然や自然物を活用した遊びに一層、興味・関心をもち、それらについて調べたり、遊びを工夫して楽しんだり、それらを表現したりする。

このように、学んだことは、子どもの印象に強く残るとともに、学ぶ意欲を高め、その後の学習や生活に生きて働く力を培うことにつながっていく。それゆえ、具体的な活動や体験を通した学習を一層充実させていく必要がある。

イ 学校や地域の特色やよさを生かした授業づくり

生活科は、子どもの生活圏である身近な人、社会、自然を学習の場や対象とする。生活科の教材は、そうした地域にあることや、そこでの子どもの生活の中にあることを取り上げることから、学校の教育環境や地域の特色やよさを生かした授業づくりが大切である。

(ア) 子どもの実態を生かす

子どもの興味・関心の傾向、経験、人間関係、生活習慣や技能などについて、アンケートやウェビング等を活用するなどして、実態を把握する。

(イ) 学校の教育環境を生かす

校内の施設・設備などの教育環境を把握し、有効に活用する。

(ウ) 地域の実態を生かす

地域の自然環境、町や人の様子、公共施設や季節の行事などを幅広く把握し、地域の特色やよさを生かした生活科学習を展開する。

ウ 年間指導計画の工夫

(ア) 2年間を見通したカリキュラム作り

8つの内容をバランスよく配置し、児童の思いを生かした単元構成となるよう時間的なゆとりをもたせるなど、配慮することが重要である。

(イ) 人、社会、自然と繰り返しかわること

子どもが直接対象に働きかけたり、対象から働き返されたりしながら活動が連続していくよう、繰り返し体験を位置付けたり、対象との出会いを工夫したりすることが大切である。

(ウ) 他教科等との関連

他教科等との関連を明らかにし、生活科で学んだことを他教科等で生かせるように、また、他教科等で学んだことを生活科の活動の中で生かせるように、単元構成など年間計画を工夫することが大切である。

エ 学習環境の構成の工夫

生活科においては、「子どもは環境によって学ぶ」という考えを重視し、学習環境の構成を大切にしてきた。多様な素材や道具を準備したり、夢中になって思う存分活動できる空間を確保したり、十分活動にひたることができる時間を設定したりすることが重要である。また、子どもの学びの場は、学校から地域等へと広がっていく。学習環境の構成の工夫が子どもの学ぶ意欲を高めていくことにつながるのである。

オ 教師の働きかけ

子どもが生き生きと主体的に活動しているとき、そこには、様々な気付きがある。人や社会、自然について驚いたり、感動したり、不思議に思ったり、考えたりしている姿である。こうした気付きは、その後の活動を更に広げたり、深めたりしていくきっかけや動機となる。しかし、こうした気付きは直感的に、あるいは、無意識のうちに生まれていることが多い。

生活科における学習活動は、子どもの自主性・能動性を大切にするが、同時に子どもの気付き

を「意味付ける」「価値付ける」「方向付ける」など、教員の働きかけが不可欠である。教員の意図的、計画的な働きかけやしかけによって、子どもの学ぶことへの興味・関心・意欲を高めていくことにつながるのである。

(ア) 意味付け・価値付け・方向付け

具体的な活動や体験を通して、子どもは様々な知的な活動や気付きをしている。しかし、子どもはそれを自覚していないことが多い。そこで、子どもの行為や表現に「そうそう」（共感）「なるほど」（納得）「すごい」（感動）など、対象や自分自身の行為や表現に対して意味付け、価値付け、方向付ける働きかけを工夫し、一層明確に自覚させることが重要である。

(イ) 共同の学びの場の設定

学習過程の中に、対象や環境へのかかわり方の工夫や気付きについて交流し合い、互いによさを認め合う場を設定する。交流を通して、「〇〇さんのおかげで上手にできたよ。」など、互いに認め合うことで、子どもはこれまで気付かなかった互いによさや成長に気付くことができる。自分自身のよさや成長の実感、新たな活動へのやる気と自信につながるのである。

また、友達によさや成長への気付きは、自分自身の活動をもう一度振り返るための情報として生かすことで、更に活動を広げ深めることにもつながる。

(4) 学ぶことへの関心・意欲を高める評価の在り方

生活科は、その目標から子どもの生活する身近な環境、自分自身や自分の生活に関心を持ち、それらに積極的にかかわっていくようにすることが求められる。そこでは、子どもが身近な人、社会、自然、自分自身や自分の生活にどれほどの関心を示し、どれほど意欲的に取り組んでいったか、また、そうした取組を通して、どのような態度を身に付けたかを見取っていくことが大切である。この観点の評価は、一人一人の子どもに意欲と自信をもたせるようにするとともに、継続的に長期にわたって見取るようにすることが重要である。

ア 生活科の評価の観点及びその趣旨

生活科における関心・意欲・態度については、『小学校学習指導要領 生活科 解説編』の学年別の評価の観点の趣旨において次のように示されている。

身近な人、社会、自然及び自分自身に関心を持ち、進んでそれらとかわかり、楽しく学習したり、意欲的に遊びや手伝いなどをしたりしようとする。

これは、生活の知恵を身に付け、自立への基礎を養う生活科にあっては、重要な観点である。生活科は、単に多くの知識を覚えることではなく、学習や生活に生きて働く力を育てることを目的としている。そこで、生活科においても、関心・意欲・態度は、学習の初めはもとより、学習によって作り出していくものととらえることが重要であり、学習の前提としてあるだけでなく、むしろ、学習の成果としてもとらえるようにすることが必要である。

イ 評価規準及び評価の視点の設定

評価規準を設定することは、生活科の評価の観点とその趣旨に基づく学習指導の実現を目指すものである。

子どもの姿を的確に見取るためには、評価規準を設定しなければならない。その際、内容のまとまりごとの評価規準、単元の評価規準、小単元の評価規準、評価の視点のそれぞれについて実際の学習活動とのズレが生じていないかといった整合性を確認し、一貫性が保たれているか見直すことが大切である。具体的には、次のとおりである。

- ① 具体的な子どもの姿をイメージできる評価の視点を設定する。

- ② 互いの視点を出し合い、学習活動を設定し検討する。
- ③ 質的な広がり、深まりについて検討する。
- ④ 評価規準と評価の視点の整合性を検討する。

ウ 指導と評価の一体化を図る工夫

子どもの学びの質的な高まりや深まりを評価するには、評価方法を工夫する必要がある。そこで、次の三つの視点を大切にすることが重要である。

(ア) 「広い目」：多様な評価方法で多面的、総合的に見取る工夫

評価方法を多様化して、学習状況を見取り、それぞれの方法で見取ったことを関連付けて判断するようにする。生活科においては、行動観察、子ども同士の会話やつぶやき、発言、作品の分析、問いかけ、教員と子どもとの対話の分析など、多様な評価方法を活用する必要がある。

(イ) 「長い目」：長期的な展望に立ち、継続的に子どもの変容を見取る工夫

一単位だけではなく、小単位、単元全体、学期、1・2学年と、長期的な視点に立ち、継続的に子どもの変容を見取り、その評価を次の活動や指導に生かすことが重要である。

そのためには、子どもが活動や体験したことについての学習状況を無理なく見取るため、自己評価カードなどを工夫し、効果的に活用することが必要である。

(ウ) 「基本の目」：評価規準の具体化・重点化

評価の観点、評価方法を活動の節目に適切に位置付けるなど、指導計画に基づいた評価計画を設定し、生活科の目標、ねらいを具体化した評価規準に照らした、より客観的な評価を行うことが大切である。

参考・引用文献

- (1) 小学校 生活 指導資料 指導計画の作成と学習指導 文部省 平成2年
- (2) 小学校 生活 指導資料 新しい学力観に立つ生活科の学習指導の創造 文部省 平成5年
- (3) 小学校 生活 指導資料 新しい学力観に立つ生活科の授業の工夫 文部省 平成7年
- (4) 初等教育資料 平成15年2月号（No. 765）指導法研究講座11 [生活] 実りある学習指導の実現をめざしててー評価規準の設定と活用ー
- (5) 初等教育資料 平成15年10月号（No. 773）指導法研究講座19 [生活] 生活科における資質や能力を確かなものにする授業の工夫改善
- (6) 初等教育資料 平成16年6月号（No. 782）特集I「確かな学力」を育てる学習指導の工夫改善ー論説ー生活科における「確かな学力」を育てる学習指導
- (7) 初等教育資料 平成16年11月号（No. 787）指導法研究講座32 [生活] 生活科学習指導のセンスと技術
- (8) 初等教育資料 平成17年7月号（No. 798）特集II 子どもたちのよさを生かす学習指導の創造的展開 [生活] 子どもたちのよさを生かす生活科学習指導の創造的展開
- (9) 初等教育資料 平成18年10月号（No. 813）特集I 学ぶ意欲を高める学習指導の改善ー論説ー学ぶ意欲を高める生活科学習指導の改善

2 事例

(1) 「学ぶことへの関心・意欲」を高めるための指導・評価の工夫

ア 基本的な考え方

生活科においては、身近な環境と直接かかわる活動や体験を通して、子どもが主体的に対象とかかわろうとする力が関心であり、夢中になって思いや願いを自己実現しようとする力が意欲であるにとらえることができる。それらは子どもの思いを生かす学習環境や活動の設定、教員の働きかけなどによって高まり、意欲の高まりは活動において思考や気付きを高める原動力ともなると考える。そこで、以下の四つの視点を工夫することにより、学ぶことへの関心や意欲を高めることにつながるものと考えた。

イ 研究の視点

(ア) 対象との出会いの工夫

学習との出会いやきっかけは、子どもの好奇心をじかに揺さぶるものであり、学習への意欲を高める上で大きな役割を果たす部分である。1学期は、教科と関連をもたせて対象と出会うきっかけをつくる導入を取り入れた。2学期は、内発的な意欲を効果的に高めることが必要だと考え、家族から町の人へと視野を広げる出会い、1学期の体験を生かした対象との出会い、対象から子どもへの働きかけによる出会いという、三つのアプローチを設けることにした。そうすることで、単に探検を楽しむだけでなく、目的意識を明確にし、学習へのモチベーションを高めることができるのではないかと考えた。

(イ) 繰り返し体験を重視した単元構想の工夫

学び方のプロセスを繰り返し経験することは、学習方法が理解でき、自信、更には次の学習意欲につながる。町探検の学習では、基本となる学習プロセスを季節ごとに設定し繰り返し行う。また、繰り返すことにより、新たなめあてをもち、課題の解決に向けて学びを深めたり、広げたりするきっかけとなると考える。

また、1学期にもものや場所との出会いを十分経験した子どもは、2学期、かかわり方を発展させ、より深く追究し、より広く人々と出会い、より質の高い気付きができるのではないかと考える。繰り返し体験を年間計画に位置付け、試行錯誤しながら計画する、調べる、比べる、伝え合うなどの活動をステップアップしながら経験できるようにしたいと考えた。

(ウ) 学びの共有化を図る指導の工夫

学習において友達の存在は大きい。友達と共に学習し、共に成長できる学習環境であれば、子どもの学ぶ意欲はより高まる。そのためには、一人一人のよさを生かせるようなグループ構成を工夫する必要がある。その際、同じめあてをもつ友達との学びは、より効果的であると考え。友達と共に協力し合って学ぶ中で、自分とのかかわりを感じ、友達のよさに気付き、仲間意識の高まりを促すことが、さらに意欲を高めることにつながると考えた。

(エ) 自分の成長への気付きを価値付ける評価の工夫

生活科は、特に自分自身への気付きを大切にする教科である。評価に当たっては、長期的に広い目で評価できるよう、自己評価や相互評価を大切にしながら、自分の成長や友達のよさなどについて振り返らせる。それを教員が意味付け・価値付けることで、自信をもって自分の成長を自覚することができると思う。そこで、様々な対象（身近な家族から地域の人々まで）と出会い、触れ合い、様々な友達との活動を通して違いやよさに気付くことができるよう、話し合う、伝え合う、共に作る、表現する活動を多く取り入れたいと考えた。その中で、自分や友達のよさに気

付く力を身に付けることによって、更に意欲を自ら高めることができると考える。

また、最終的にこの気付きを、それまでに学習してきた単元の振り返りと合わせて内容（８）にかかわる単元で振り返り、総括的な自分の成長への気付きに結び付けたい。

(2) 「学ぶことへの関心・意欲」を高める指導の実際

ア 単元名 第２学年 「もっともっと！町たんけん」

イ 単元の構想

(ア) 教材観

本単元は、学習指導要領の内容（３）「地域と生活」（４）「公共物や公共施設の利用」（５）「季節と生活の変化」に基づいて構成した。また、（６）「自然や身近なものを使って遊びを工夫したり楽しんだりすること」にも関連して学習を進めたいと考える。

子どもにとって、生活の場である地域に、学習の場として繰り返しかかわる町探検は、とても魅力的である。この学習は、１学期の単元「レッツゴー！町たんけん」を受けて、２回目、３回目の町探検に出かける。地域への親しみや愛着を深められるよう、探検、出会い、発見を繰り返すのである。１学期の町探検の経験を生かし、より深くこだわりをもって、人や場所、もののかかわり方を発展させることができると考える。初めはうまく接することができなくても、繰り返し町に向いて地域の人々と出会い、話をするなど試行錯誤の経験を重ねることで、様々な人々と適切にかかわる力が身に付き、自立への基礎を養うことにつながると考える。また、友達と共に学ぶことで、互いのよさに気付き、仲間意識を育てることができると考える。

(イ) 児童観

子どもたちは、１年生で学校探検を、２年生の１学期には初めての町探検を経験している。１学期、１年生を学校案内した自信や喜びの中、「今度は学校から町に飛び出してもっといろいろなことを知りたい」と、同じ興味をもった子ども同士でグループをつくり、忍海の町に繰り出した。未知のものと出会うことやそこで出会う人々の話を聞くことに夢中になり、一人一人が自分なりの発見や驚きがあったことを喜び、探検することの楽しさを十分味わうことができた。そして、発見したこと、調べて分かったこと、友達に知らせたいことを伝え合う報告会を開いた。グループで協力し、見てきたものの模型を作ったり、インタビューの様子を再現したり、自分なりの方法で心に残った「伝えたいこと」を発表し合ったりした。自分が探検した場所のことがよく分かり、自分たちが伝えたことが友達に広まったという満足感は、子どもたちを一段と成長させた。

また、協力して報告し合う中で、忍海の様々な場所に対する興味も広がっている。学習を振り返る中で、「友達が探検した所に自分も行ってみたい」「報告してくれた所に行って自分で確かめたい」という新たなめあてにつながる感想をもつことができた。

また、夏休みの間に「行ってみたい」を家の人と一緒に実行した子どもたちもあり、町探検は子どもにとって興味深く、まだまだ未知の可能性を秘めた存在となっている。

(ウ) 指導観

本単元は、「もっともっと！町たんけん」とあるように、「もっと～したい」という意欲をもって取り組み、それぞれの思いや気付きがより発展的で深いものになるようにしたいと考えた。

そこで、まず家族探検で「うちの人自慢」をして「人」への関心を引き出し、家族から町の人へと視野を広げる。そして、夏の町探検の報告会で芽生えた「まだ気になる」「自分も友達が報告してくれたところに行ってみたい」という気持ちを思い起こさせる。更に、１学期に訪問した

探検先からのお誘いを受けて、探検への気持ちを膨らませる。秋の町探検は、これら三つのアプローチをきっかけとして展開したいと考えた。

探検に際しては、1学期同様、一人一人が「知りたい」「行ってみたい」と思う人や場所を基本にしてグループを再編成し、協力して探検を行う。計画を立てる前に、1学期の振り返りカードを用いて自信をもたせたり、自分の課題に気付かせたりして、一人一人が探検で何をしたいのか、何を頑張りたいのか、明確な目的意識をもたせた上でめあてを立てさせたい。そして、夏の町探検の経験を生かして、自分たちで探検の計画を立てたり役割を決めたりする話し合い活動をじっくり取り組ませたい。道中や探検先では意識して様々な感覚を働かせ、体いっぱい、心いっぱい町を体感し、自分たちが探検してこそ得られるオミヤゲ（感動や発見）をどの子どもも自分のものにできるよう支援していきたい。そうすることで、1学期とはまた違う視点で町の魅力に気付き、親しみから愛着へと感じ方が深まると考える。

更に、友達と協力して報告し合う活動を通して友達の頑張りやよさに気付くとともに、自分の頑張りや成長に気付き、新たな喜びや自信を味わうことができるように支援したい。1学期に自信をもって「学校のことならまかせてね」と1年生を案内した気持ちが、3学期には「町のことならまかせてね」という大きな自信と地域への愛着につながっていく橋渡しとなるような学習を展開していきたい。

(エ) 評価観

評価については、経験の積み重ねや友達との学び合いの中で意欲が高まっていく姿を大切にし、一人一人の表情や発言、行動の変化を長く広い目で見取っていくようにしたい。そこで、随時、活動の振り返りをして、その時々々の気持ちや気付きをカードに書くことを重視し、活動を思い起こしながら自分の考えや気付きを深めさせるようにしたい。そして、教員が一人一人の気付きを確実に把握して評価するとともに、カードに書き入れたり個別に声かけしたりして価値付け、意味付け、方向付けを行い、自分のよさや可能性を自覚できるようにしたい。また、自分の気付きを蓄積していくことで、再度振り返り、次の活動を広げ深めようとするきっかけとし生かせるよう支援したい。あわせて、1学期の自己評価や保護者からの言葉なども、意欲の高まりや自分の成長への気付きを生み出すきっかけとなるよう効果的に生かし、子どもの育ちを見取っていくようにしたい。また、安全確保のため探検に同行してもらう保護者にも、探検先や道中での様子、よかった点を知らせてもらい、自分たちの力で探検することへの自信や次の活動への意欲に結び付けたいと考える。

ウ 単元の目標と評価規準

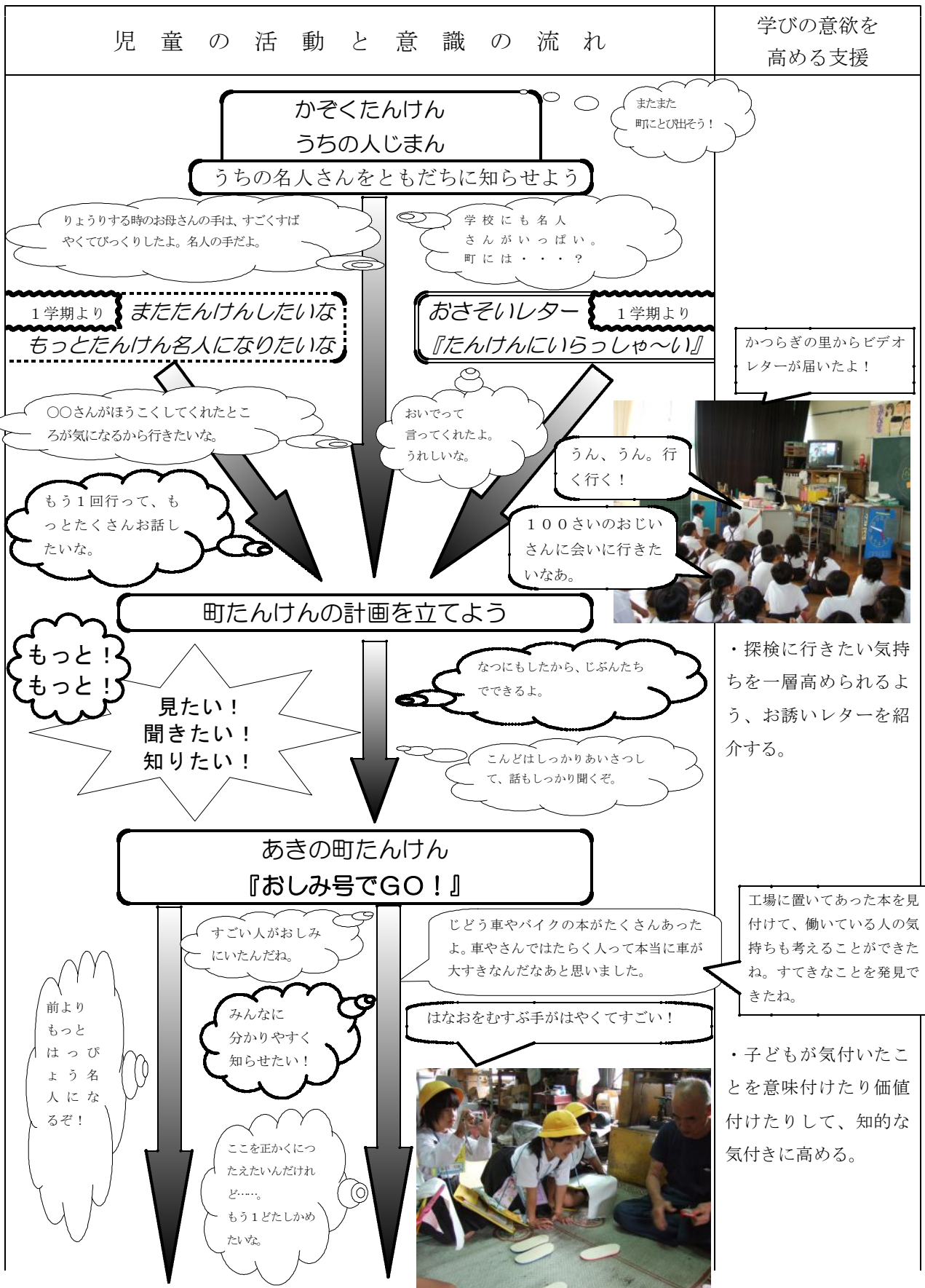
(ア) 単元の目標

- 自分たちが住む忍海の町を自分なりの目的をもって友達と協力して探検し、町の人、社会、自然、公共物、公共施設などに親しみをもってかかわり、愛着をもつことができる。
(関心・意欲・態度)
- めあてをもって町のことを調べたり体験したりして、伝えたいことを自分なりの方法で友達に伝え、広げ合うことができる。
(思考・表現)
- 町には様々な場所や人の姿が多くあることや、春や夏とは様子や生活が違うこと、自分がかかわっている忍海の町がすてきであることに気付くことができる。
(気付き)

(イ)単元の評価規準

【 】は、評価方法

小単元	学習活動	生活への 関心・意欲・態度	活動や体験についての 思考・表現	身近な環境や 自分についての気付き
かぞくたんけん (4)	・うちの人じまんをしよう	・家の人や仕事の様子に興味をもって、観察したり調べたりすることができる。 【観察・探検カード】	・知らせ方を考えたり、友達にたずねたり、振り返ったりすることができる。 【観察・探検カード】	・身近にすてきな家族がいることや、自分が注目した人について調べたり知らせたりすることが楽しいことに気付いている。 【観察・探検カード】
	・気になるところや人をはっぴょうしよう	・自分をもっと探検したい所や人について話したり、秋になって再び探検に行くことを楽しみにしたりしている。 【観察】	・友達の家族自慢、1学期の町探検で行った所や「お誘いレター」で気になった場所や人を、友達に発表し合うことができる。 【観察】	・家族をはじめとして、自分たちの生活にかかわりが深いいろいろな人が身近にいることに気付いている。 【観察・探検カード】
秋の町たんけん (10)	・町たんけんの計画を立てよう	・探検を楽しみにして準備したり計画を立てたりしている。【観察】	・町探検に必要なものを考えて、グループで協力して計画を立てたり準備をしたり、探検のルールを考えたりすることができる。 【観察・探検カード】	・町探検に必要な準備やルール、協力することの大切さなどに気付いている。【観察】
	・秋の町たんけんに出かけよう ・もう1回たんけんに出かけよう	・秋の町に関心を持ち、自分なりのめあてをもって町を探検したり、調べたり、楽しく人々や場所とかかわろうとしたりしている。 【観察・探検カード】 ・安全に気を付けて友達と協力したり適切に行動しようとしたりしている。 【観察・ボランティアカード】	・公共物や公共施設の利用の仕方や町の人々との接し方について考え、正しく適切にかかわることができる。 【観察・ボランティアカード】	・町には公園などみんなです使うもの、自分とつながりのある場所があり、それを支える人々がいることが分かっている。 【観察・探検カード】 ・秋の町の自然や人々のくらしの様子に気付き、夏の様子とは違うことに気付いている。 【観察・探検カード】
もつとすてきな町のことを知らせ合おう (11)	・はっけんしたことをほうこくしあおう	・町探検で発見したことや気付いたことなどを友達に伝えようとしたり、友達の発表を聞こうとしたりしている。 【観察・振り返りカード】	・町探検でかかわった場所や人々、発見したことや気付いたことなどを絵や文で自分なりにまとめたり、伝えたいことを工夫して発表し合ったりすることができる。 【観察・振り返りカード・作品】	・町探検や人々とのかかわりを通して、自分たちの町が楽しいことやすてきであること、かかわると楽しいことに気付いている。 【観察・振り返りカード・作品】
	・町たんけんをふりかえろう ・すてきな町におれいをしよう	・町探検でお世話になった人々や場所に親しみや感謝の気持ちをもっている。【観察・作品】 ・もう一度かかわりたい、もっと知りたいという気持ちをもっている。 【観察・振り返りカード】	・お世話になった人々や場所へのお礼の気持ちを伝える方法を考え、表現することができる。 【観察・作品】	・探検や発表をして、自分や友達のよさに気付いている。 【観察・振り返りカード】





(3) 成果と課題

ア 考察

(ア) 対象との出会いの工夫

2学期の町探検を展開するに当たり、三つのアプローチを設けた。

まず一つ目は、「人」との出会いである。家の人の仕事の様子を調べ、「うちの人自慢」をした。

「ぼくのために料理を作ってくれて、愛情がいっぱい入っているんだなと思いました。」

「電柱にのぼって仕事するお父さんがかっこいいと思いました。」

「〇〇ちゃんのおばあちゃんは△△の名人なんだって。」

「〇〇くんのお父さんの仕事って面白そう。」

このように家の人の仕事の様子を調べることで、家の人が自分のために頑張ってくれていることに気付く子どもが多くいた。このことをきっかけに、身近な人に対する興味をもったり、町探検で「その人の気持ちを聞くぞ。」というめあてをもったりすることができた。更に、夏休み中に家の人と探検した所も紹介し合い、初めての探検スポットに新たな好奇心（はてなをしらべたい）をもつことができた。

二つ目は、1学期に訪れた「場所」との再会である。1学期の振り返りカードの中から「自分も行ってみたい。」という気持ちを記したものを紹介し、もっと行きたかった気持ち（もっと教えてほしいな、まだ気になる）を思い起こさせた。1学期よりも対象への働きかけに広がりや深まりが見られ、探検への意欲を高めることができた。

三つ目は、「対象からの働きかけ」（お誘いレター）による出会いである。1学期に訪問した探検先の中から、子どもが強く関心を示したところ、教員がもっと深くかかわらせたいと意図した探検先から、子どもたちに「探検においで。」というお誘いの言葉をかけてもらえるよう依頼し、3か所よりビデオレター、1か所より手紙をいただくことができた。リサイクル工場からのビデオではクイズが出題され、「クイズの答えは、ここにあります。」という呼びかけに、食い入るように見ては、「うん、行く行く！」とビデオに向かって返事をする子どもたち。「クイズの答えを調べに行きたい。」という明確な目的意識をもつことができた。また、パン屋カントリーロードからの手紙という思いがけないお誘いに、「知りたい」気持ちが大きく膨らみ、「興味あるある。」「すごく知りたいから絶対に行きたい。」「早く行き先を決めようよ。」と、町探検の学習に向かう気持ちは非常に高まった。自分たちが1学期に一度かかわり、親しみをもっている対象からの働きかけは、「実際に見てひみつを探りたい」「もっと調べたい」など、子どもたちの気持ちに揺さぶりをかけ、モチベーションを高めるのに大変効果的であった。

忍海小学校2年生の皆さん

皆さんが当たり前のように食べているパンがどのようにして出来上がってくるのか知りたくないですか？ちょっとでも興味のある人、焼きたてパン『カントリーロード』で、体験してみませんか。

カントリーロードより

(イ) 繰り返し体験を重視した単元構想の工夫

今回の探検は、夏の町探検に続き、2回目、3回目の探検を体験するものである。探検先を決める

ところから報告会を振り返るまでの一連の活動は、夏の町探検で一度経験しており、2学期は子どもたち自身が見通しをもって取り組むことができた。また、探検のめあてを立てる場面では、1学期の振り返りカードに残した「ちょっとしっぱいだん（失敗談）」を意識するよう助言した。その結果、グループのルールや個人のめあて、質問にも変化が見られた。

1学期 ・大きい声で言う。 ・話をしっかり聞く。 ・あぶないことをしない。

(1回目) ・しつもんをいっぱいする。 ・まわりの人にめいわくをかけない。

2学期 ・大きい声ではっきりとしつもんする。

(2回目) ・しつもんする時は店の人の顔を見てしつもんして、分かるまで聞く。

図1 お誘いレター

- ・作っている人の手のうごきをしっかり見てしらべる。
- ・目や手や耳や心など体をつかって、よくかんさつする。

- 2学期 ・はなおをつけるところを、ゆっくり見せてもらう。
 (3回目) ・ちちしぼりをして、手ざわり、形、色もしらべる。
 ・ようち園の子に本を読んであげたり、手あそびを教えたりしたい。

回を重ねるごとに、目的、調べる方法、内容などがより具体的になってきている。このように質の高い課題意識をもって探検することができるようになってきたのは、繰り返し体験することの効果の一つである。

幼稚園に出かけたグループは、1度目の秋探検後、作戦会議パート1のときに友達から「もっと知らせたいことがあるんじゃないの？」というアドバイスを受けた。報告する内容が人数や組の名前などに留まっているので、「探検で自分たちが一番やりたかったことはできたの？」と聞くと、「2番目にしたかった質問はちゃんとできた。1番は幼稚園の子と遊びたかったけど、遊びたいと言えなかった。」とのこと。しかし、この失敗は次の探検への意欲をかき立てるチャンスとも考えた。2度目の秋探検で再度同じ所に行く際、「今度はもっと欲張りになって、やりたいことをやっておいで。」と助言したところ、「今度こそ幼稚園の子と遊んでくる！」「本も読んであげたい。」「手遊びも教えてあげる。」と、明るい表情で次々とやりたいことの計画を立てていた。自分たちの思いを叶えることができた子どもたちは、「幼稚園の子に本を読んであげたら、言葉を真似してくれた。」「幼稚園の子って折り紙が大好きで、折ってあげたり折ってくれたりした。」「みんなも行ってみて。」と、楽しかった様子を素直に振り返っている。

2度目の探検では、1回目よりももっとひみつを見付けたい、という思いから、「パンを実際に作らせてください。」「野菜を使ったおいしい料理を教えてください。」など思い切ったお願いをするグループが増えた。繰り返し探検することで慣れ、その人とも親しくなったからできた一歩踏み込んだお願いである。もちろん、訪問先の温かい協力があってこそ受け入れていただいたのは言うまでもない。子どもたちは「2回行って調べ直せてよかった。」「1回目は書いていった質問だけだったけれど、2回目は書いていない質問ができて、いっぱい答えてもらったからよかった。」というように、同じ場所に2回かかわることのよさも感じ取っている。

また、N児はグループで学習するときには友達のやり方に協力的だが、活動を進めること自体は友達に任せる傾向があり、他の学習中も自分から発言したり積極的に学習にかかわったりする姿があまり見られなかった。そのN児が、2度目の秋探検の後、たんけん名人ほめほめカードにこのように書いていた。

じっさいにきつぷをかって、すぐにおぼえられたからほめほめ。行って、たんけんのべんきょうだけじゃなくて、じしんをもてるべんきょうもできたからほめほめ。

「すごいね。どんな自信がもてたの？」と聞くと、「う〜んと、話したり、聞いたりすること。」と答えた。「この前の探検のときはそうでもなかったの?」「この前は1学期よりいっぱい聞けたけど、まだ無理だった。今度は大きい声で言えたり、この前より何個もいっぱい聞けた。運転席の質問をしてモンキードライバーのことが分かった。」N児は、自分が回を重ねるごとに少しずつ自信をもって質問できるようになったことを実感していた。「Nくんは自信がもてたって自分で気が付いたんだって。すごいなあ。」と、N児の気づきを他のみんなにも広げた。その後、特に国語の時間に手を挙げて発表する場面が何度も見られるようになった。これは、繰り返し体験を通して、確かな対象への気づきがあったからこそ得られた自信である。また、その後の姿は、自己評価したことが教員に価値付けられ、友達にも認められることで、他の教科の学習やくらしに生かされ、更に学ぶ意欲を高めることにつながったことを示している。

(ウ) 学びの共有化を図る指導の工夫

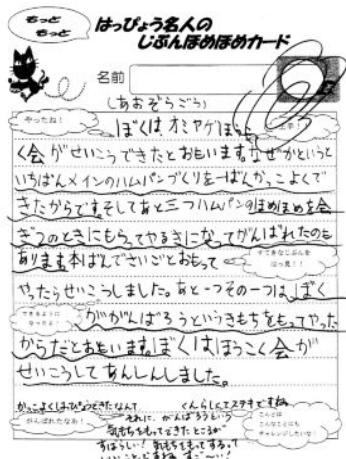


図2 振り返りカード

探検の行き先を決める際、行きたいところと理由をカードに書き、それを基に同じ興味をもった子ども同士のグループを組んだ。同様に、希望の行き先を基にしてペアとなるグループも組んだ。そして、報告会までの間に2グループ間で発表を見せ合い、アドバイスし合ったりほめ合ったりして互いの学びを高めるための作戦会議を2回開いた。1回目の作戦会議は、主に報告の内容や発表方法について話し合ったことを2度目の探検に生かすために、2回目の作戦会議は、主に1回目の作戦会議よりよくなったことを話し合ったり最後のアドバイスをし合ったりすることで、報告会本番に向けてのモチベーションを高めるために位置付けた。カントリーロード（パン屋）に行ったS児は、報告会后、自分ほめほめカードに図2のように書いている。1度目の秋探検の後、このグループは1学期に行ったグループと同じドーナツの作り方を説明し、ハムパンのできあがりの形を見せた。作戦会議パート1でペアのグループから、「なぜハムパンを見せたんですか？」というカードをもらってS児は首をひねっていた。「ハムパンのことを知らせたいから見せたんだよね。でも、行った自分たちにしか伝えられないことって何だろう？自分たちが本当に知らせたいのは何だろう？」と声をかけた。すると「ぼくらか見てきてないから、ハムパンの作り方を伝えたい。みんなもできあがったパンより作り方を見たいと思う。」と答え、2度目の探検は「ハムパンを作るのを実際にやらせてもらって、材料と順番を調べる」という課題をもって活動した。その後、「先生、紙粘土もって使っていていいですか。」と言ってハムパンの作り方を説明する準備をし、作戦会議パート2で、「ハムパンの作り方で、ぐるぐると巻くところがすごく分かりやすかったよ。」というほめほめカードをもらったのである。アドバイスし、再度よくなったことを評価した友達からの言葉が、学びの意欲を高めることにつながったのである。

また、はきもの作り名人さんの所に行ったグループは、1度目の秋探検後、ぞうりの裏を貼り付ける機械を作り、「この機械のことを伝えたい」と、作戦会議パート1でペアのグループに発表した。そのときに「はなおをつけるところがなかったよ。」「かんらん車みたいに回るきかいがなかったよ。」というアドバイスを受けた。その意図は、もっと機械や道具がいっぱいあったのに一つしか紹介していないから増やしたらよい、というものだった。機械の数を増やすだけではY児たちの伝えたいことが曖昧になってしまうので、「一番伝えたいことは何かな。もっと機械を作るんだったら、はきものの作り方の順序が分かるようにするといいね。」という問い直し声をかけた。すると、2度目の探検を前にY児が「だったら、作ったぞうりがどこに行くのかも聞いてみよう。そうしたら、はきもの一生が調べられる！」と、新たなめあてを立てたのである。友達からのアドバイスや疑問から、Y児のはきものへの見方が機械→作り方→一生と広がったことで、「はきもの一生を伝えたい」という内容の深まりと意欲の高まりにつながった。これは、友達や教員の助言を素直に受け止めた上で、自分なりに考えを深めた結果である。

このように、お互いを高め合う場である作戦会議を位置付けたことによって、友達同士で学びの共有化を図ることができた。そこに、子どもの思いや願いをくみ取った教員の働きかけをしていくことで、更に気づきの深まりや広がりが見られ、意欲が高まったと言える。

(エ) 自分の成長への気づきを価値付ける評価の工夫

各活動の過程で、その時々々に声をかけて価値付けたり、お互いの気づきを子どもたちに伝えたり広めたりする支援によって、対象や友達、自分自身のよさや成長の様子を自覚させたり、意欲



図3 報告会の作戦会議

を高めたりすることを大切にしたりした。ラッテ高松（牧場施設）に行った二人の子どもが、それぞれの探検振り返りカードに次のように書いている。

T児：リーダーのCちゃんが一ばんさいしょに『ちしほりがしたいです。』と言ったのがほめほめ。一ばんはじめなのに言えてすごいなあと思いました。

C児：わたしはリーダーだから、ゆう気を出して一ばんにおちちをしほったりそのことを言ったりした。ゆう気を出して言えたな。

友達の様子を見てから行動に移すことが多いC児のことをT児が「リーダーである」と書いているのに驚き、「へえ、グループでリーダーも決めていたんだね。」とT児に声をかけた。すると、「違うよ。でも、Cちゃんがリーダーみたいに頑張ってるなあと思って。」と言う。C児にも「Cちゃんはリーダーだったんだね。」と声をかけると、「リーダーは決めてないけど、頑張ろうって思ったから。」と言う。C児は自分自身の成長に気付いていない様子だったので、「勇気を出せたなんてすごいね。実はT君もCちゃんのことをリーダーだと思ったんだって。Cちゃんが勇気を出して頑張ってるってちゃんと分かってくれていたよ。よかったね。」とグループの友達もその勇気を認めていることを伝えた。T児にも「Cちゃんが頑張っている様子に気付いたT君もすごいね。」と声をかけた。その後、C児は報告会の準備のとき、バター作りの様子を本物のように表現しようと「次はペットボトルにティッシュを入れてみようか。」と提案したり、説明の言葉も中心になって考えたりするなど、自信をもって生き生きと活動する姿が見られた。報告会后、C児は「ちょっとはリーダーみたいになれたかな。」とつぶやき、試行錯誤しながら、自分なりに一生懸命意見を出したりみんなをまとめたりして、友達と協力してできた自分の成長の様子を振り返っている。

このように、教員が振り返りの中で子どもの成長を価値付けたり意味付けたりすることや子どもの思いに寄り添い子どもたちの思いやもっている情報を他の子どもに伝え広めることが、一層学ぶ意欲を高めることにつながると言える。

イ 研究を終えて

今回の事例は2学期の単元についてであるが、単元構想上、1学期からの長期的な目で子どもたちの育ちや意欲の高まりを見取ることができ、成果として以下の点を挙げることができる。

- ・対象との出会いを豊かにすることで、子どもに具体的な目的や「もっと」という追究心をもたせ、意欲を高めることができた。
- ・繰り返し体験を行うことにより「～するとうまくいくかな」「今度は～してみたい」「前よりもっと～したい」など、試行的、持続的の態度が身に付いてきた。また、「自信をもつ」「意欲が高まる」「更に質の高い気付きを生み出す」という学びのサイクル（連続性）へと高めることにつながった。
- ・中間発表として作戦会議を位置付けたことにより、気付きを練り合ったり、互いの思いや願いを認め合ったりすることができ、子どもが学び合い、育ち合う学習に高めることにつながった。
- ・個々の気付きを価値付け広めることで、一人一人の子どもに意欲や自信をもたせることができただけでなく、集団としての高まりにもつながった。

これらの成果は、一つ一つの視点が単独で効果を上げたというよりは、いくつかの要素が組み合わせられて効果的に学ぶ意欲を高めたと言える。今後、これらの成果を踏まえ、2年間を見通して八つの内容項目の関連性を工夫した年間計画の見直しなど、更に学ぶことへの関心・意欲を高めるための工夫・改善を図っていきたいと考える。



図4 振り返りカード

プロジェクト研究2

小学校における学ぶことへの関心・意欲を高める指導 プロジェクトチーム

平成18年度 奈良県教育委員会指定研究員

広陵町立広陵西小学校	教諭	兒島 強	【社会】
天理市立山の辺小学校	教諭	種池 進太郎	【理科】
広陵町立真美ヶ丘第一小学校	教諭	中尾 勝則	【体育】
宇陀市立榛原東小学校	教諭	渕矢 裕子	【音楽】
奈良市立右京小学校	教諭	奥村 文浩	【図画工作】
天理市立前栽小学校	教諭	高山 玲子	【家庭】
葛城市立忍海小学校	教諭	上田 恵子	【生活】

奈良県立教育研究所

教科指導部長	山田 均	指導主事	清水 俊也
副部長	島 恒生	指導主事	宮本 憲二
係長	廣瀬 保善	指導主事	吉村 茂
指導主事	稲浦 聡	指導主事	前田 景子
指導主事	檜原 俊司	指導主事	植松 利晴